京都

名所と美術之栞 内 下

839
2
145

839
2
145

西鶴の國語に於ける

第一 なつかしさ

岡崎 義恵

第三編　東北隔遠の名區

◉山端（三條大橋より一里十五町下四の東北にあり）

京都より若狹に至る街道の首驛にして、高野川の東岸に倚り、隣村、松崎の山端に對するを以て此稱あり、山景の幽雅なる、水色の清快なる、吟杖を曳によし、殊に避暑によく又螢を觀、河鹿を聽くに佳し、斯る地なるを以て、兩三の旗亭もありて來遊の客に便す故に都下人士のこゝに車を走らする者頗る多し

當驛の東隣なる一乘寺村に詩仙堂あり、石川丈山（丈山初名は重之、通稱嘉右衛門、參河の人、世々德川氏に仕ふ、大阪夏の役軍に從て戰功あり然ども其令に違ふを以て黃せられず、重之風に迫隱の志あり事平らぐの後遂に官を棄て京都に隱れ、藤原惺、林信勝、菅玄同等と交り文籍を以て自ら娛む、後水尾天皇屢々之を徵せども至らず、辭するに「わたらじなせみの小川の淺くとも老の波をぶかげぞはづかしと」をいふ和歌を以てし終身また鴨川を渡らじと誓ふ、天皇益々其操を高もし是より復徵さず、後光明天皇の時その辭書を善くするを聞し召し詔してその書を徵め之に賜ふに酒魚を以てす、一時盛んに其風韻を賞せしもぞ、寛文年中（西紀千六百六十年頃）卒す歳九十、墓は堂の東南山上に在り）幽棲の古

根岸信輔氏寄贈

跡にして高風なほ存し一度こゝに來れば自から塵俗を脱離するの觀あり、丈山嘗て本朝の三十六歌仙に倣ひ漢、晉より唐、宋に至る善詩の者三十六人を選び狩野尚信に托して其畫像を描かしめ自ら其詩を書し以て四壁に掲げたり、是この堂にこの名ある所以なり（左には蘇武、謝靈運、杜審言、李白、王維、高適、儲光羲、韓愈、劉禹錫、李賀、杜牧、寒山、林逋、海鬼、歐陽修、黄庭堅、陳與義の十八人を描き右には陶潛、鮑照、陳子昂、杜甫、孟浩然、岑參、王昌齡、劉長卿、柳宗元、白居易、盧同、李商隱、曹鬆、郎擁、蘇舜欽、蘇軾、陳師道、魯樞の十八人を畫けり）表門に小有洞、中門に梅關樓上に嘯月樓、樓下に蜂腰書院に坐樂集及び邁袖半山床等の額面あり、皆隸書にて丈山の自筆なり、又樓の二層には六勿の銘あり、三層に上れば十二景（櫻花、前村翠雨、岩墻瀑泉、硯池印月、溪邊紅葉、四山高聳、台嶺開雲、鴨川長流、洛陽曉烟、雞波城樓、圃外松聲、御曲殿謌）を見るを得べし其最下層は卽ち詩仙堂なり、遺物には十二景の詩、硯箱、竹如意、竹拂子、樹根の倚几、樹根の置物、明の陳眉公の古琴等あり、江邨綬が秋晩遊詩仙堂詩に云く

黄葉前賢，宅　相求岳麓，陰
浮雲生事淡，　流水隱心深，

竹雨沾殘榻　松風調古琴　詩仙餘畫壁　吟咏幾人尋

一乘寺村の北、修學院村の山上に後水尾天皇の離宮の舊趾あり、明治六年以來暫く衆庶の爰に遊覽するを聽されたれど頓てまた離宮に充られて今は拜觀を禁止せられたり、林苑は上下の二つに分たれ下苑には疇月觀、藏六庵の亭榭あり、老松、櫻、楓、鬱茂として景致極めて幽邃なり、上苑には鄰雲亭、止々齋、窮邃軒の亭榭あり、其中鄰雲亭やゝ大にして高處に位し林泉を一望の中に收め人をして爽快を叫ばしむ、池あり浴龍池と云ふ、異木怪岩の排置みな凡ならず、之に添るに八勝（興雲夜雨、芳檜秋月、村路晴嵐、修學晩鐘、遠帆歸雁、松崎夕照、叡峯暮雪、平田落雁）の絶景ありて苑外の眺望また甚た佳し

◉八瀬　比叡山の西麓、高野村の北にあり　八瀬一に矢背に作る（俗へ云ふ、昔天武天皇、大友皇子と戰ひ敗走して此地に落ち賜ふとき流矢來りて天皇の背に中る是より里名を矢背と號す、今も此里に篤風呂と稱する一種の蒸風呂あるは當時天皇の矢瘡を療せんが爲に始めて工夫せし者なりと、然ども固より歷史の徵すべきなし、恐らくは眺僻の口碑に殘れるならん）民家の東、山麓に天神社あり其華表の前に屹立せる八尺許の岩石は俗にこれを辨慶の脊競石とい

ふ（俳へいふ舊と叙山西塔に在りしを又この社地の南北に谷あり、其北の辨慶戯れに茲に提げ來れるなりと）谷を跨ること四町許にして一大岩窟あり高さ二丈深さ三丈許口狹くして中閑し俗にこれを鬼の洞と稱す（俳へいふ叙山の惡稚兒鬼門丸の住し所なりと）此はか元大原に惟喬親王の五輪塔の陵墓（字上野の東方山下にあり）蛇道心寺（字大長瀬にあり、龍女山攝取院と號す）淨土宗にして聖德太子作の阿彌陀佛を本尊とす　融通寺（字來迎院村の東にあり、其忍上人の開基にして、本尊は滋慶作の阿彌陀佛）來迎院等あり皆一見の價直を有す

音無瀧は來迎院を東に距ること四五町にしてあり、高さ六丈濶さ二間五尺餘、飛泉翠崖に懸りて徐ろに下り四圍樹木に掩はれて鬱蒼たり、氣爽かに風冷かにして三伏の日なほ暑をしらず

都人きかぬはなきを音なしの瀧とは誰かいひ初めけん　能因法師

瀑下の水流岐れて二となり一は北に向ひて奔る、之を律川と名け、一は南に向ひて流る、之を呂川と稱す、呂川の北に圓融院あり、その又た北に勝林寺あり、寺門の右側に一坊あり、寶光房といふ、境内に後鳥羽順德、二

院の帝陵あり（共に遺詔により隱岐、佐渡の行宮より御骨を茲に遷し葬りたるなりと）勝林寺の北（半町許り）に古知谷阿彌陀寺あり（頭陀上人の開基にして本淨の阿彌陀佛は惠心僧都の作なり、堂後の山上には開山窟、鉢掛松、自然石の佛像等ありて名跡多し）又元草生村の山下に寂光院あり、建禮門院落飾のゝち閑居し給へる寺にして後の翠黛山に芳骨を埋めし所あり（因に云ふ堂内に門院及び阿波内侍の像を安ず、内侍の像は其一門より來りたる滑息を以て自ら張貫きに製したる者なりと、堂前には汀の櫻あり、山中には天の岩戸、不動干滿石、石劍等の奇觀あり）草生の民家を東方に距ること二町許の山麓に朧の清水あり、古へより其名高く咏歌極めて多し、このほか江文社の日壺、雨壺、風壺などいふ名勝古跡多かり、凡て八瀬より以北大原に至るの間、女子に一般の風あり、紺地の衣服を脛高く褰げ白地の脚半、手甲を穿ち髪は束ねて後に垂れ白色の手拭を被るを常とし毎日薪炭の類を頭上に戴き京都に出て之を賣るを業とす、その風俗また一奇觀たり、市人これを目して八瀬女或は大原女と呼ぶ、釋越宗の詩あり

鴨流曲々繞秋間　炭竈青烟兩岸山

相遇土人都不レ賤　一枝楓葉添レ薪還

秋の日に都をいそく賤の女か歸る程なきおはばらのさと　定家

めせやめせもふけの妻木早くめせかへるさ遠し大原の里　拾樹

◎比叡山（京都の東北に聳ゆる大嶽なり三條大橋を距ること三里餘）往昔桓武天皇奠都の始め（延曆七年西紀七百八十八年）傳教大師（最澄）に勅して伽藍をこの山に造營せしめ以て王城の鎮護たらしむ、延曆寺即ち是なり、山中を三に區分して東塔、西塔、横川の三塔とし別に無動寺を置けり、抑も當山は山城、近江の二國に跨がる大嶽にしあれば、登山するにも亦數路あり然ども修學院村よりするを最も便道とす、村の東に雲母坂あり坂を攀れば先づ無動寺に到るべし、次に北して東塔（根本中堂、戒壇堂、文殊堂、大講堂、前唐院、千手堂、淨土院等あり）に入るを順路とす、當寺隆盛の日には堂、相輪塔等あり）に入り、なほ北して横川に入る支院三千坊、封地六萬石を有し、山徒の勢ひ甚だ猖獗にして動もすれば朝命に反し、日吉神輿を奉じて京師に亂入し輦下を騷がせしことその幾回なるを知らず、遂に白河法皇に歎聲を出させ奉るに至る、然るに元龜二年（西紀一千五百七十一年）九月織田信長これを惡み兵を遣はして堂塔僧坊はいふに及ばず山王二十一社をも燒亡し大衆を殺戮してその兇逆を止む、是より山中寂然たり、讀史餘論に云く

白河院の御詔に、朕が心に叶はぬは、双六の賽と山法師と仰せられしとぞ、山僧のみに非ず、三井寺、興福寺の僧徒らも動もすれば、兵革を動かして朝威を蔑如にし、應仁の亂の後は山僧は云ふに及ばず、法華一向の徒、高野根來の僧も兵威を振へるを、信長の代に叡山の兵器を燒き、根來寺を燒亡ぼし、數百年の禍を除かれしは、其功尤も大なりと云べし云々

と記されたるを見ても如何に强暴なりしかを知るべし、その後、豐臣秀吉これを再興し、寛永年中（西紀一千六百二十餘年代）徳川家光さらに改造す、今の堂宇は則ち是なり、山中名勝古蹟最も多くして一々枚擧するに遑あらず、就

中四明嶽の如きは、嶽中の最高嶺にして海面を抽出づること二千七百餘尺四望明豁にして京都及び琵琶湖の好景脚下に集れり、昔は平將門皇城の壯麗なるを望みて逆意を生じ、大丈夫當に此に居るべしと遂に天位を覬覦し、近くは蒲生君平帝宅の微々たるを瞰て憤慨に堪ずひゐの山見おろすかたぞ憐れなるけふ九重のかずしたらねばと涙を揮ひて悲歌せしも皆この山巔なり、山中たゝに眺望の佳絶なるのみならず空氣の清冷なるを以て三伏の候に至れば銷夏の爲に來るもの多し、大阪、神戸等に居留する外客の或る部分は毎年天幕を蔚林の間、清泉の邊に張り妻孥と共に之に起臥して暑月を過了するを例とす

齋藤拙堂

上四明峯

來上四明頂　壯觀勝昔聞
湖水琉璃淨　京城金碧分
帽尖捎高鳥　鞋底起層雲
飄然小天下　欲共羽仙群

北方隔遠の名區

◉松ヶ崎妙泉寺（下鴨の北十五町餘に在）　當寺は始め觀喜寺と號する天台宗の寺なりしが弘安の頃（西紀千二百八十年頃）住職實眼僧都、法華の僧日像上人に歸伏し遂に改宗して日像を當寺の開祖とし寺名をも今の稱に改む、一村みな一宗にして他宗を雜へず、毎年八月十六日の夜、村内の男女堂前に集り節面白く法華の題目を唱へ亂舞して夜を徹す世に是を題目躍と云ふ、又その夜後山に妙法の二字を點火し以て聖靈會の送火に供す、洛東如意嶽の大の字と共に京都より望むを之、火光炎々相映じて甚だ美觀なり本涌寺は同所東の山腹にあり、京都立本寺の十世上人日生の開基にして天正年中（西紀千五百七十年頃）同宗の學林となし爾來諸方の學徒斷ることなかりしが明治八年これを本國寺に移し今はたゞ講堂のみを存す

妙圓寺はその又東にあり大黒天（佛教大師の作）を安置するを以て甲子の日には洛人多く參詣す、當寺は三寺のうち最も高處に在るを以て眺望に宜しく且境内に大樹の垂櫻數株ありて一段の艶景を添るが故に春暖の

候に至れば杖を曳くもの絶えず、當山の北谷を丈谷といふ往昔は樹木陰森として谷を埋めしかば此あたりに氷室を置しとかや、堀河百首に顯季卿の歌あり

夏の日も涼しかりけり松が崎これや氷室のわたりなるらん

此はか稲荷社、日輪麗、月輪瀧等あり、又當山の西に虎脊山あり形恰も虎の臥たるに似たり、山腹に一祠あり新宮社といふ、山後には里俗の裏池と稱する大池あり山青く水清くして一覽するに足る佳境たり

たなびかぬ時こそなけれ秋も又松が崎よりみやるしら雲　貫之

◎岩倉大雲寺（松ケ崎の北、岩倉村にあり三條大橋より二里十餘町）　當寺は圓融天皇の御宇（西紀九百七十年代）戸部納言文範をして造營せしめ給ふ所にして開基は智辨僧正その安置する所の本尊は金色等身の十一面觀音にて行基菩薩の作なりといふ、殿堂は紫雲嶽の半腹、松杉鬱茂の地にありて幽寂愛すべき山間の一佳境たり、當寺の東方に石座明神の祠あり傳へいふ、これ桓武天皇遷都の當時詔して四方に石藏を造り經王を納めしめ給ひし北方の古跡にて岩倉の名稱もこれに起因する者なりと

題岩藏大雲寺觀音殿　竺常

靈蹤何歲現花宮　道是大雲垂世同　鬱々古松開石磴
冷々疎磬入林風　萬人輻湊稱名外　六道輪廻救苦中
我亦良緣從宿昔　山門幾度叩圓通

◎鞍馬山（三條大橋を距ること三里廿三町）　當山に至るには先づ路を鞍馬口に取り市原、野中、二瀬の諸村を經て山下に達するを順路とす、全山老杉蔚々として晝なほ暗く坂路怪岩巉々として攀躋甚だ難し、山上に一寺あり松尾山鞍馬寺と稱す、延曆十六年大中太夫藤原伊勢人の草創にして開基は鑑眞和尚なり、然ども今の堂は明治四年の再建に係る、堂の左方より尚ほ山巔に攀ること十三四町にして亭々たる老杉の天に冲するあり、之を御杉と稱す大さ殆んど六圓繞らすに注連繩を以てし傳へて天狗の棲處

といふ、上方の峰に義經の脊競石あり下方四五町に不動堂あり、堂より三四町の下は所謂僧正谷にして彼の牛若丸の擊劍琢磨の道場なり、壑中に一祠方九尺許あり、魔王大僧正を祀る、祠前幾十塊の岩石累々として縱横に俯仰し其中に刀痕のごとき形を存する者あり、また潛石、隱れ石、掴み石、足駄石、硯石、水入石等の名ある者もあり、是等のほかにも種々の名を附し牛若、僧正房、辨慶等に因みて說をなせる者あれど多くは皆後世好事家の牽强附會せるにて信を置べきもの甚だ稀なり、當山は古來櫻花に名あり、且堂前の眺望に富るこゝとは源氏若紫の卷に

うしろの山にたち出て京のかたを見給ふ、はるかに霞み渡りて、四方の梢そこはかとなう煙りわたれるはゞ、繪にいとよくも似たるかな云々

とあるにても知られたり然ど紫家の艶筆に價する程の風光はありやなしや

らでまらく

Kurama Dera.

登鞍馬寺

不迷鞍馬寺　杖底白雲從
欲尋公子古　唯見羽人蹤

繞谷春陰暗　合林夕景濃
換骨因靈艸　攀奇絶峰

霞たつ鞍馬の山のうす櫻たをり枝折に折そわづらふ　顯季

僧正谷にて

佗しらに貝ふく僧よかんこ鳥　其角

◉貴船神社（鞍馬の西北の谷間にあり）　水神罔象女神を祭る社にして明治四年五月官幣中社に列せらる、社殿二ヶ處にあり下の社奥の社といふ、相距ること凡そ六七町、奥の社は檜杉蓊鬱たる中に在て幽邃を極むるが上に寂人の甚だ少なるを以て蔦蘿縱ままに滋蔓し境内更に一層の荒涼を添ふ、本社の西邊に石を積みて船形と成せるものあり（高さ一間餘長さ二間許）是を天岩船といふ、又本社の東に沿ひて南流する溪水あり、是を御手洗川といふ、彼の和泉式部の詠歌（新後拾遺集に男に忘られて侍けるころ貴船にまゐらせたりし河に盥のとび侍けるをみて「もの思へ

は澤のほたるも我身よりあくがれ出る玉かとそみる」とあり、又西の山腹に螢石といふがありとかせしは此川なり、本社の左方數町を隔てし壑中に飛泉あり幅一尺許にして高さ二丈餘、龍王が瀧と稱す、抑も當社は古より請雨、止雨を祈願する所にして、其雨を請ふ時はこの瀧に來りて祈るを舊例とすといふ、新古今集に

社司をもきふねに參りて雨こひせしついてによめる

おはみ田のうるはふばかりせきかけて　加茂　幸平

井せきにおとせ川上の神

◉大悲山（鞍馬より西北五里許に在三條大橋より八里十三町）　山城ノ國の北境愛宕郡の盡頭に聳ゆる高嶺にして俗に大布施と稱する者是なり（佛へいふ古へ此地丹波國に屬せしが天正年中豐臣秀吉今し此山より北一里を以て山城に編入せしなりと）山腹に一寺院あり大悲山峯定寺と號す、久壽元年（西紀千百五十四年）二月平相國清盛の祈願に依て建立せし者といふ、開基は寛空上人にして天台宗を奉ず、滿山怪巖巉々として坂路を遮り松栢鬱茂して天日を蔽ふ、故に人跡はなはだ稀なり、山下の樓門より本堂に到るまで十餘町、崎嶇たる石磴を攀躋すれば中間の路傍に俊寛僧都一族の塔あり（案ずるに治承年中俊寛鬼界が島に謫せられてより其一族遇れて當山の北清谷に潛みたりといへば其緣故に因りて茲に之を築きたる者なら）山巔に奇石あり獅子岩、鸞鏡石といふ皆その形の類似するを以て名けしならん、又樓門の南十六七町を隔てし幽谷の中に乳石あり、岩面の諸所に乳房の如きもの突起し十四個あり常に水液を滴らす、婦人の乳汁に乏しき者は之を得て喫すればその患を療すといふ

西方隔遠の名區

◉妙心寺（葛野郡花園村にあり三條大橋を距る一里十八町）　初め左大臣清原ノ夏野この地に別業を設け群花を集め植て花園となす（當寺の在る所の名を花園爾後子孫相繼村と稱するはこの故なり）て之を領せしが清原良枝の時に當り花園上皇深く其風景を愛し別に宅地を洛北に賜ひて茲に離宮を造營し以て閑栖の地となし給へり、然るに上皇佛法を崇信し給ふの餘り遂に捨て禪刹となし正法山妙心禪寺と名け關山禪師（慧玄の號）を召し開基たらしめ親らは傍に一院を創め之

に潛居し給ひたり、今の玉鳳院則ち是なり、院内に上皇宸筆の尊影を安置す、此他境内には樓門、佛殿、法堂、開山堂、涅槃堂、祥雲院、影堂等ありて見るべきもの最も多く、又塔中、大法院境内に佐久間象山象山名は啓、字は子明、修理と稱す、信州松代藩士なり、幼にして聰敏、嘗て易を其父神溪に受け象數に通ず、長じて藤一齋の門に入り梁川盂緯、坪井信道、渡邊崋山等と交り和蘭の書を講じ銃陣築城の諸術を修す、當時易象に擬し砲卦一篇を著し書を幕府に上り梓せんと請ふ、允されず、米艦の浦賀港に入るや亦十策を献じ細行を屑せず、江戸に出で佐藤一齋の門に入り梁川盂緯、坪井信道、渡邊崋山等と交り和蘭の書を講じ銃陣築城の諸術を修す、當時易象に擬し砲卦一篇を著し書を幕府に上り梓せんと請ふ、允されず、米艦の浦賀港に入るや亦十策を献じ上陳す、象山經世を以て自ら任ずと雖も窮らず時風を好み一日櫻花の歌を作り山幕府の召に應ぜしとき門人危ぶみて切に行くことを諫止しけれども吾を愛せんとするか將た國を愛せんとするか若し國を愛せば我が行くことを止る勿れ吾豈開港の爲に正議を建る者吾を舍てん誰ぞ縱ふ命を損し軀を擲て別る、以て其抱負推知すべし、吾說に從ふ者有んと、門人等止ることを能はず涙を揮て別る、以て其抱負推知すべし、元治元年七月十一日山陽宮に遣らんとして水屋町を過る際に客の爲に命を落す時に年五十四の墓あり

當寺什寶甚だ多し中に就き其有名なる者を擧れば○達摩禮門無關筆は滅務賛布袋、豐干の圖李龍眠筆偃溪賛三幅對○五髻の文珠小野仁海筆○釋迦孔供の像吳道子筆○山水孫君澤筆○龍虎二幅楊月溯筆○柳に葵呂紀筆○青綠の西園雅集石虎筆○布袋牧溪筆○仙逸の圖文徵明筆○鐵拐仙小筆○觀音牧溪筆○達磨元信筆○觀音、寒山、拾得可翁筆○寒山、拾得默安筆○十六羅漢十六幅祭山筆○花鳥呂紀筆○人物山水の三幅對蘇東坡筆○達磨顏輝筆、沖賛朝陽、月梁諧筆、沖賛の三幅對○觀音と山水の三幅對牧溪の筆にして孰れも妙絶○地藏座像寺傳定朝の作○梨子池蒔繪硯箱秋草に雉子の摸樣○俱利加羅不動後藤祐乘の作、寺傳豐太閤の寄附○鹿に女郎花の蒔繪硯箱光悅作○文珠仁海僧正筆寺傳○牡丹に梅の圖金屏風六枚折一双、若色○三酸及寒山拾得圖金屏六枚折○琴棋書畫圖金屏風六枚折一双、以上友松筆○山水屏風一双寺傳阿彌筆○棄君の護身刀妙作愛すべし○蒔繪の緣頭、柄黃金○甲冑○鞍○鐙以上四品孰れも妙工の作愛玩すべきものなり○推黑大香合○推朱硯箱○同角形印籠孰れも、文房の名品なり○青磁の燈臺三段形なり○推朱の香盆二枚龍鳳の紋樣は陰影にして弭琴圖の紋樣は私柔なり○唐物の香盆菊花式にて佳品○福州燒青磁の花瓶○同香爐孰れも雅趣に富めり○寶冠の彌陀○觀音○勢至以上寺傳、岩清水八幡宮奥院に在し本尊なりきといふ、當寺の方丈に安置せり○鐘樓に梵鐘舊は鑑鐘の淨金剛院の什なりし鑑年國師一貫文にて購ひ

たりと寺傳に見ゆ、而して黄食鼎の音響ありといふ○法堂の天井に探幽の丸龍あり、此他見るべきものの猶あれども略す、総じて當寺には支那の名畫多し

◉等持院 衣笠山の南麓、龍安寺の東にあり 足利尊氏の創建せし禪刹にして開基は夢窓國師なり、初め山號を鳳凰山と稱せしが義堂和尚の時改めて萬年山といふ、足利氏累代の昭堂は長祿年中義政の建立する所にして尊氏より義昭に至るまで十三代の影像を安置す、みな束帯佩劔の座像なり文久三年二月世の擾亂に際し諸國勤王の浪士 伊豫人三輪田綱一郎、會津藩士大庭恭平、江戸人師岡節齋等十餘人が幕府の擅横を憤はり之を懲めんとて足利三將軍 尊氏、義詮、義滿 の首を刎て三條橋上に梟したるは則ち當寺の像にして偏く人の知る所なり 今安 ずる者は其後再び收めて接合せし者なり昭堂の西傍にある寶筐印塔は是また世人の知れる彼の慷慨の士高山正之 正之字は仲繩、彦九郎と稱す、上野新田郎の人なり精悍にして奇節あり年十三太平記を讀み中興の忠臣忠業遂げざるを見て慨然として功名の志あり、十八歳のとき京師にのぼり三條橋上に至りて島居の何れの方なるを問ひ地に坐し拜跪して草莽の臣正之といふ、見るもの怪みを敷へ大に罵り之を縛つこと三百、後天下に遊歴し忠臣孝子を問ひ求め寛政五年西遊して坑後に至り宮川嘉勝 が大罵して鞭苦を加へし尊氏の墓なり、義詮の墓は寺背の山下にあり然ども今は墓石なく唯その葬地の封境を存するのみ

當寺には敢て觀るべき什寶なし○利運地藏菩薩一体 寺傳定海作 ○觀喜天 長四尺二寸の木像なり異体にして千年以上の物なれども强ち佳作と云ふにあらず

◉龍安寺 等持院の西御室の東にあり 大雲山と號す妙心寺の末寺十刹の一なり、初め衣笠左大臣實能の別業にして傍に一宇の佛殿を營なみて德大寺と號す爾後代々德大寺を以てその家の名とせり、公有の世に至り細川勝元請て他の采地に易へ自家の別莊とす、文明五年 西紀千四百七十三年 勝元の沒するや遺囑して寺となし義天和尚 妙心寺の僧 を聘して開基たらしむ、本堂は舊と東福寺の昭堂なりしを移し建し者なるを以て天井の蟠龍及び迦陵頻の圖は同寺の兆殿司の揮毫なりといふ、方丈は勝元の居館を以て之に充たる者にして庭前の假山泉水は相阿彌の意匠を凝して構造し

一樹木をも用ゐずたゝ、岩石のみを以て巧みに奇雅を極めし者なり、世に名高き虎の子渡とは則ちこの庭園の勝をいふなり、殊に此地は北に衣笠山を負ひ南陽に面するを以て嚴冬も暖氣他にまさり園池には常に水鳥の來りて游泳する者多く、古より龍安寺の鴛鴦と稱して京都近傍の一勝景とせしが今は其名のみを殘し加ふるに近年火葬場となりしより人々同寺に遊ぶことを嫌ひ寺門つねに寂寥たり、竺梅莊が當寺の鵬鵬を咏せし詩あり曰く

彩羽乘寒候　滄池涵太清　織如機上出　粧似鏡中明
波送双々影　林含戛々聲　由來依淨域　罪報莫言生

什寶○觀音の畫像一幅寺博兆殿司筆○不動の像一幅寺佛妙澤の印を捺す○八幡曼荼羅寺佛宅間壁賢筆○七和尚の像七幅○大濟師の木像

◉仁和寺妙心寺の西北にあり三條大橋より一里二十八町餘　當寺は宇多天皇、先帝光孝天皇の遺志を繼ぎ仁和四年西紀八百八十八年創建し給ひし巨刹にして眞言宗の大本山なり、後天皇落飾して當寺に入り且ツ宮殿を造營し給ふ、是より御室又は大內山の號あり、其のち朱雀天皇も亦讓位して此に宸居を定め給ひしより以降一千年間皇子皇孫門跡を繼承して寺務を執る所となり維新前に於ては小松宮彰仁親王之に當り給ひたり、斯る名刹なりしが明治廿五年五月回祿の災に罹り本堂は悉皆烏有に歸す、惜むべきの限りなり、然ども樓門、五重塔、祖師堂、觀音院、經藏等幸ひにこの災を免れ今なほ依然としてあり、寺域十萬六千餘坪ありて堂舍の間植るに櫻を以てす、殊に當寺の櫻樹は他に比類なく身幹甚だ短くして株々根邊より花を着け萬枝曲折して地上を掩ふ、故にその滿開の候には人は恰も白雲の裡をもきかふが如し

仁和寺看花

撲地暖香雲幾團　閑吟倚徧玉闌干
昏鐘今日爲花晚　放却山門到夜看

齋藤拙堂

當寺有名の什寶は幸ひに火災の難を免れて現存せり○聖德太子の畫像、一幅（寺佛金岡筆、筆力遒勁にして若色亦鮮明なり）○孔雀明王の圖一幅（寺佛張思恭筆、溫和の中に高尚の風あり）○玉字の文珠、一幅（寺佛吳道子筆）○五大明王の圖三幅（寺佛法弘筆）○具利加羅不動の圖一幅（寺佛興教大師筆、木筆墨畫）○不動の圖一幅（同上）○八幡眞影の圖一幅（筆者不詳）○八幡神奉請の圖一幅○彌陀一個托喜尼天一幅（佛金岡筆）○普賢延命一幅（佛土佐經隆筆）○五秘密曼荼羅一幅（佛住吉慶恩筆）○二祖調心の圖一幅（西蜀石快）○佛頂尊勝陀羅尼帖（佛不空三藏）○書一帖○重料紙箱一個（雪に椿淡樣梨子地蒔繪）○戒牀箱一個（青貝輪法金々具枚鏡）○三鈷杵一個（寺佛大師所持）○三鈷鈴一個○五鈷鈴一個○聖敎三十帖○冊子一箱（箱面に納眞言根本阿闍利入唐求得法文冊子箱と記す）○寬平法皇の宸影一幅○虛空藏一幅（寺佛東大寺觀盛筆）○文珠一幅（佛吳道子）○孔雀明王一幅（寺佛源澄筆）○菅公の像一幅○弘法大師の像一幅（寺佛眞羅筆）○僧正相傳一幅○俱利伽羅不動（寺佛顯瑜）○三鈷鈴一個（寺佛小野僧正所持）○五鈷鈴一個（寺佛大師所持）○太素經一箱○觀音授記經一卷（佛孝謙天皇宸筆）○十八梵字二卷（不空三藏筆跡）○寶珠箱一個（鳳凰唐草鋲拔樣）○角盥一個（黑漆草蒔繪水）

◉栂尾高山寺（葛野郡栂尾村にあり三條大橋より三里餘）

醍醐天皇の御宇比叡山法性坊尊意僧正の開基せし所にして舊は天台宗なりしが中興明惠上人より華嚴宗に改む（上人は日本饅茶の祖に歸して高し委しくは宇治の附記に述たり）その名當山は所謂三尾山（高雄、栂尾、槇尾）中の最北にありて清瀧川の碧流を帶び西岸到る　に楓樹繁茂す、白雲橋を渡り阪路を登ること數町にして山腹に寺あり、是高山寺なり、殿堂は明治維新のゝち炎上に罹り今在るものは假の造築にして纔に一茅舍たるに過ず、秋霜樹梢を染るの時この堂前より瞰下すれば紅葉碧流と相映じて風景絶美なり恐くは名手の筆もなほ其眞を寫して及ばざるの嘆あらん

栂尾看楓

佳景羞無詩可酬　滿溪錦繡倩誰收　齋藤拙堂

紅葉青山水急流　憑欄唯誦唐賢句

人はみな高尾たかをと登れども　　大綱法師

栂の尾山の峰のもみち葉

◎槇尾西明寺　平等心王院と號す、律宗にして眞言宗を兼ぬ、開基は弘法大師の從弟智泉法師なるが正忍律師これが中興たり、本尊釋迦佛は明惠上人の作、千手觀音は聖德太子の作なりといふ、栂尾より當寺に至るには白雲橋より溪に沿て數町を下れば對岸の山腹にあり、三尾の內この山は楓樹に乏くして松杉鬱茂す、然ども近傍まばらき紅葉の地に松杉色を改めずして山下の清流と共に四時を同うするも亦一趣の氣韻あり

春來ても誰かは問ん花さかぬまきのを山の曙のそら　雅經

◎高雄神護寺　栂尾より溪に沿て西南に下れば直ちに高雄山下に達す是より左方に攀れば紅葉屋、右方に登れば神護寺なり、この寺は光仁天皇の御宇和氣清麿が草創せし所にして初め神願寺と號せしが淳和天

たかをやま

Takao Yama.

皇の御宇、天長二年（西�full八百二十五年）之を弘法大師に賜ひ神護國祚眞言寺と改稱せり、樓門の下方阪路の傍に弘法大師の額書石あり（傳へいふ大師勅を奉りて清瀧川の畔に筆を投じて金剛定寺と書せし處なりと）講堂の東北に鐘樓あり、是は板倉勝重の再建せし所にして其鐘は本朝三絶と稱する有名の者なり（橘廣相序嗣を作り、菅原是善銘を撰し、藤原敏行これを書す）鐘樓の下に別格官幣社護王神社あり、神靈は夙に世人の熟知するところ一微官の身を以て天日の將に墜んとするを回し以て皇統を保維せし本朝第一の勳臣和氣公清麿を祀る、當寺は二萬八千餘坪の廣境を有するを以て此他處々に名蹟多し、抑も三尾山中楓樹の最も多きは當山にして殆んど他木を雜へざる者の如し、殊に奥の地藏院下の楓景を第一とす、両崖の紅葉錦繡を織り成すところ清瀧溪流、素練を長くひきて其間に隱見す、高雄に遊ぶ者この處に來りて一望一瞰その奇勝を叫ばざるはなし

遊高雄山

伊藤維禎

猩血鮫綃錦様紅　　峰巒回合梵王宮
滿眼霜楓落日中　　無人收拾好風景

◉愛宕山（上嵯峨の西北にあり京都より四里六町餘）

麓に一の鳥居あり、是より嶮坂を攀て試峠、清瀧川、渡猿橋、樒原等の名蹟を過ぎ鐵の華表に至る、その間五十町、是より百數十段の石階を登りて漸く本社の前に達す、堂宇は天應元年（西紀千百一年）僧慶俊、洛北鷹ケ峯の邊より遷坐せし所にして朝日山白雲寺と號せしが維新のゝち神佛混合を廢せしとき當社を分離して鄉社とす、祭神は伊弉冊尊及び火產靈尊（伊弉冊尊の生む所）なり、本殿の後に太郎坊社あり、その西に八天狗社、子守勝手社、春日社、また南に十二天社等あり、山巔の秀峰を白雲山と云ふ、此處に攀登すれば東西兩ながら瞰下するを得て其壯觀いふべからず、山中の名蹟前に記するのほか日晩瀧、南星峰等處々に散在す（途中の茶店にて土盃を備へて客を待ち之に土盃投の戲を試みしむ、其戲は土盃を執て空中に拋げたの風に隨て轉拗し久うして深谷に墮つるを見るにあり、其狀恰も小鳥の背空に舞が如し、然ど頗る巧拙あり）

登愛宕山

上有神仙窟　雲飛愛宕山　千林隨出沒　一路極躋攀
淀水縈如帶　京城宛在顏　可知飄擧甚　人肘秘符還

合離
定家

あさらけき朝日のかげにあたゝ山
雪も氷も消そくたくる

家隆

我宿はそなたをみてそなゞさむる
誰かあた子の山といひけん

當山の半腹左手の方によりて月輪寺といふあり、鎌倉山と號す、社を下りて鐵の鳥居に還り來れば左方に途あり凡そ十八町許にして月輪に達す、當寺の開基は慶俊法師にして中興は九條關白兼實なり、兼實嘗てこの地に山莊を營みて閑居せしが後に法然上人に歸依し出家して此寺を中興す、祖師堂に空也上人の像を安置す、堂後に龍女水と名くる清

泉あり（傳へいふ上人念佛弘通の爲に此山に來りて練行すること多年、昼夜六時に念佛せり、或る夜山鳴り谷響きて龍女姿を現はし來りしが念佛の功力に依て成佛す、龍女そが報恩の爲自ら穿ちしものなりと）本堂背後の山に俗に白石と呼ぶ白色の岩石あり、遙かに京都五條橋より望見するを得べしといふ、境内に時雨櫻と云ふ名木あり、烏輪暉々たる晴天に、も樹下時に細雨を降して人衣を霑すの奇あり、故にこの名をつく、また二瀑あり、一は堂の東南の谷に懸る、之を高野瀧といひ、一は堂の西南十町許の所にあり、之を寒蟬瀧といふ

昨日今日秋くるからに日くらしの聲うちそふる瀧の白糸　玄旨

◉嵯峨釋迦堂（上嵯峨村にあり三條大橋より二里十六町）　五臺山清涼寺と號す、嵯峨の釋迦堂と云ふは俗稱なり、樓門に愛宕山と題する額を掲ぐ、此は當初の山號なりきといふ、當寺の本尊釋迦如來は永延元年（西紀九百八十七年）の秋大和東大寺の僧、法橋齋然入宋せしとき得て還れる者にして赤栴檀の釋迦と稱へ昆首羯磨天が作る所の字内無二の靈像と言囃せり、本堂の東に一堂あり、栖霞寺と號す阿彌陀佛を本尊とし觀音勢至を脇士とす、此地むかしは嵯峨天皇離宮の境内にして大覺寺と相通ず然るを天皇の第十子融公こゝに山莊を設けて栖霞館と號し後これを寺となしゝとぞ、三代實錄に元慶四年八月二十三日甲辰太上天皇（清和）水尾山寺より遷りて嵯峨の栖霞觀に御す云々栖霞觀は左大臣（融）の山莊なり（下畧）とあるは是なるべし

小倉山は釋迦堂の西に在り、寺を二尊院と號す、本尊に阿彌陀釋迦の二像を並て安置するが故の名なり、嵯峨上皇の建立にして舊は小倉山華臺寺と號せり天台、眞言、律、淨土の四宗を兼學す（此寺何人の開基たるを詳にせず、寺記等はみな中興の祖、法然上人より起り其以前を記載せず）影堂に法然上人の畫像を掲ぐ、これ所謂足引の影にして法印宅磨澄賀の筆なり堂後の山上に上人の塔あり、碑銘分明ならず（傳へいふ支那より船載し來りて茲に建設せりと）此他境内に嵯峨、土御門、後奈良諸帝の塔及び辨財天祠龍女池等あり、此山は古來紅楓鹿聲に其名高くして吟咏頗

る多し、嵯峨野は曩昔風流韻士の隱遁せし所にして舊蹟甚だ少なからず西行法師の庵跡は當寺中門の東、運善院の南隣にして定家卿の山莊は中院の北一町餘厭離庵の地にあり

小倉山しぐるゝころの朝なゝ　　定家

きのふはうすき四方のもみち葉

小倉の麓に住けるに鹿の鳴けるを聞て　　西行

をしか鳴小倉の山のすそちかみたゝひとりすむ我こゝろ哉

廣澤池は上嵯峨村の口にあり往昔寛朝僧正の開鑿する所なりと、周廻凡そ十二町、東西三町許、對岸の山を遍照寺山と云ひ、寛朝登天の松、座禪石、兒石等の名跡あり、池の西北に當て寛朝が開基せし遍照寺の舊蹟あり池中の觀音島は遍照寺より橋を架して觀音堂を設置したる跡なるを以てこの名あり、當池は古來觀月の勝池にして月夜の眺望最も佳絶なり、然のみならず堤上の櫻、柳、胡枝花、池汀の杜若、雁、鴨等の景品多ければ詩歌も亦多し

中秋遊廣澤　　江邨綏

悲秋尋廣澤　觀月有孤亭　一水光先白　千山影亦青
清輝驚宿鳥　明色走飛星　逸興憑杯酒　吟行紅蓼汀

いにしへの人は汀に影たへて月のみ澄る廣澤のいけ　　頼　政

紀の海の涙につゝかぬ廣澤も月の南は山のはもなし　　正　徹

大澤池は廣澤の西北五町許に在り、もと嵯峨天皇の離宮の境内に屬せしを以て奇石甚だ多かりしが後世、閑院の内裏に移されたりといふ、池中に菊島あり、其西北に當りて庭湖石と名くる奇岩の峙立するあり、往昔巨勢金岡が立たる者なりと傳ふ、山家集に「庭の岩にめたつる人もなからましかとあるさまに立しおかねは」と西行法師も詠みたりき、其詞書に大覺寺の金岡がたてたる石を見てとあれば是亦離宮の遺跡を照せり

大澤の池のけしきはふり行ぞかはらず澄る秋の夜の月　俊成

◎大覺寺（大澤池の西にあり）　此寺舊は嵯峨天皇の離宮にして嵯峨院と稱せしを貞觀十八年（西紀八百七十六年）二月淳和上皇請て之を寺となし大覺寺と稱す、斯て淳和の第二の皇子恒寂法親王をして寺基を開かしめ給ひ以降代々法親王の在住せらるゝ所となり、古へは境内十萬八千餘坪に及びたりといふ、宗旨は眞言にして弘法大師作の五大尊を安置す、松林陰深うして寺内頗る幽邃、門前胡枝花多くして秋光甚だ美なり

◎天龍寺（下嵯峨、渡月橋の北一丁許にあり）　靈鷲山天龍資聖禪寺と號す、此地はもと檀林皇后（嵯峨帝の皇后）の檀林寺を建立し給ひたる舊蹟にして其寺荒廢のゝち後嵯峨上皇仙洞の地となし給ひ、龜山院も亦こゝに宸居を占め給ふ、その後曆應二年（西紀千三百三十九年）に至り足利尊氏、後醍醐天皇の追福のため爰に天龍寺を草創す、開基は夢窓國師なり、宗は禪にして五山の第一位に置る總門の前に金剛院あり、光殿院の廟所なり、方丈の南に多寶院あり、後醍醐天皇の廟所なり、また聯芳昭堂、經藏、集瑞軒、雲居庵等ありしが明治維新の際、兵火の爲に灰燼となりしは惜むべきことなり、然ども夢窓國師の作として有名なる庭園のみは今なほ僅かに其形を存す、庭前咫尺嵐山を見て風光甚だ佳し合離の詩に曰く

高林一帶萬株松，寺俯長流午影濃。應是五山雲臥處，阿羅漢，鉢降天龍。

◎嵐山（龜山の南、大堰川の南岸に在、三條大橋より二里十町）　滿峰森蔚たる翠松の間、櫻楓を點綴して風景絶佳、四時遊客を絶ざる勝地なり、殊に櫻樹は龜山上皇、嵯峨の仙洞に宸居し給ひし時、吉野山より移し植させ給ひし者にして花時の麗景國中第一たり稱して都の吉野といふ、上皇の御製あり

春ごとに思ひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲けれ

山下の碧流を大堰川といふ、川に渡月橋（一に御幸橋といふ土橋にして千鳥淵（渡月橋の上流三町許にあり）戸難瀬川（戸難瀬川下流をいふ）等の勝あり、抑も當地は啻に櫻花

を以て邦内に無雙なるのみならず古より帝王の行幸、大臣の遊覽など屢々ありて歴史、文學に關して顯る著名の地たり、中にも世に偏く聞えたるは昌泰元年（西紀八百九十八年）九月寛平法皇（宇多）の行幸にして群臣に和歌を獻せしめ紀貫之にその序をつくらしめ給ふ

あはれ吾君の御代ながつきのこゝぬかと昨日いひて殘れる菊を惜みたまひ給ひ暮もく秋をもをしみ給はんとて月の桂はるの梅津より御船よそひて渡守をめして、夕月夜、小倉の山のほとり行水の大堰の川邊に御幸し給へれば久方の空にはたなびける雲もなく、みやきを待さふらひ流るゝ水は底に濁る塵芥なくておはん心にぞかなへると詔のりして（略）この言の葉、世の末までのこり今をむかしにくらべて後今日をきかん人、あまの栲繩くりかへし忍ぶの草の忍ばざらめや

是かなぶみの尤も古きものにて和文の親とも稱すべきは此序文なり

また寛弘年間（西紀千餘年代）には御堂關白（道長）が詩、歌、管絃の三船を浮べその才

能に隨ひて分載せしに大納言公任、後れて至り先づ和歌の船に乘て

小倉山あらしの風の寒ければ散るもみぢ葉を著ぬ人ぞなき

と詠じて次に詩文、管絃の船に乘り移り、その文才に人を驚歎せしめ後世にまで永く名譽を遺し〻類ひの風流逸事擧て數ふべからず

合離

大堰川

桂河源出峽間，天　億昔歌詩遊宴，年　公子王孫諳故事，

于今尙泛管絃，船

嵐山ふもとの花の梢までひとへに懸る峰の白雲　爲氏

龜山はあらしの櫻いくそたび

咲てちる世の春をみつらん　景樹

大悲閣は渡月橋を渡りて山麓の道を西へ行こと七町許の山腹にあり本尊は千手觀音の立像にして夢窓國師の作なり、閣前の左側に角倉了意（了意名は光好、小字は與七、天性工役を好み慶長十年大堰川の岩石を斷ち堰砂を渡へ丹波保津村より川水を通じ舟筏を自由ならしむ、加之十二年には

富士川を浚疏し、十六年には高瀬川の舟路を開通せり、凡そ我邦に於ての碑わ運河、を通じ漕運に便する了意の功を多しとす、後世永く其澤を恋る

り、銘は林道春羅山の撰する所なり、又山上に夢窓國師の座禪石、香西又六の古城跡あり、閣上の眺望絶佳にして京師の近郊丘樹、烟靄の裡に散見せられ山下の碧流縈々として溪をめぐり郊野を曲折して南みす、その平遠の景また一段よし

温泉場は大悲閣の西北山麓にあり、泉質炭酸を含有して慢性健腐質私に宜し此鐵泉場に至らんとするには北岸の三軒屋渡月橋の上方にある割烹店にして雪、月、花の三店あり四時客を絶たずの前より舟を浮べ流に溯ぼるを常とす、而して嵐山の風光を賞する者も此處を以て限りとす、是より上流は所謂保津川の急流なり

上已泛舟望嵐山花

江兼通

溪上尋春日　山陰修禊天　枝低臨絶壁　花密蔭飛泉

泛水觸瀧綱　飄空落酒船　何須問源去　觴詠樂如仙

戸難瀬瀧は川上の山中樵谷の西にあり此瀧の下流を戸難瀬川と稱す古より有名の瀧にして和歌多し

後宇多院

嵐山これも吉野やうつすらん
櫻にかゝる瀧のしら糸

俊成

となせより流す錦は大ゐ川
筏につめるこの葉なりけり

瀑上に淺黄櫻の巨樹あり、是また有名の者なり

◉法輪寺渡月橋の南にあり　智福山と號す聖武天皇の御宇、天平六年西紀七百三十四年建立にして初めは葛井寺と稱せしが貞觀十六年西紀八百四十七年僧道昌これを中興して今の寺號に改めしといふ、眞言宗にして本尊は二尺五六寸許の虚空藏菩薩なり、境内に參籠堂あり、昔は都の工人此所に籠りて斷食し本尊に智福を祈るもの絶ざりきといふ、斯る謂れにや今も陰暦三月十二十三の両日俗に十三參りと稱へ京都は更なり近國よりも年齢

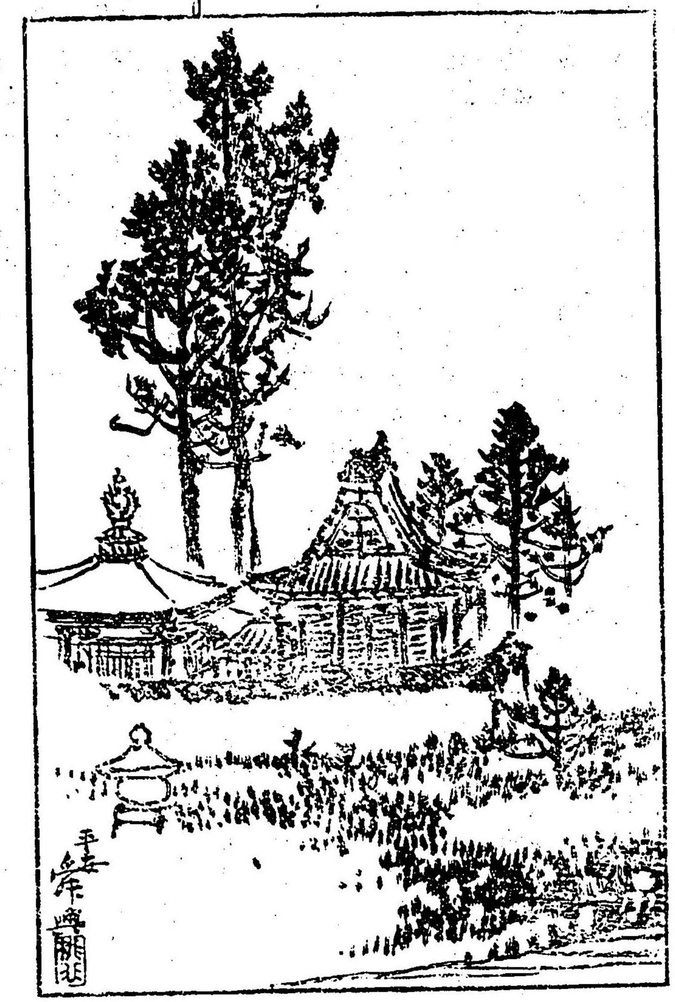
十三歳の男女智惠を附與せられんとて此寺に賽するもの頗る多し、當寺の南方二町許にして西行櫻あり、傳へいふ西行法師その傍に櫻元庵を結びて賞愛せし者なりと

◉太秦寺 嵐山に至る途次、木島の西三條大橋より一里三十町

初めは蜂岡寺と號せしが後に廣隆寺と改む、抑も當寺は推古天皇の御宇十二年西紀六百四年聖德太子その近臣秦川勝に命じ創建せしめ給ふ所にして藥師堂の觀音は同天皇の御宇十一年百濟國より獻納し、彌勒は同廿四年新羅國より渡來せし著名の者なり太子堂には御自作の影像を安置し地藏堂には道昌僧正の作れる地藏佛を安置す、太子堂の前に石燈籠あり太秦形と稱へて其古風を賞美し石工多く之を摸形す、當寺の西一町許を隔てゝ桂宮院あり、世に之を八角堂と稱す、堂内に安置する阿彌陀佛は隋ノ煬帝が推古天皇に獻せし者にして二臂如意輪は聖德太子の作なり、當寺は千二百九十餘年の創建に係れば星移り物變りて今は悉く昔時の形狀を失ひしと雖も

うづまさてら

Uzumasa-dera.



獨りこの八角堂のみは太子時代の遺物にして柱椽は蝕腐して蜂巣の如くなれど却て古代の證表となりて中々に貴く歩を運ばしむるの價値ある古堂なり境内楓樹多く晩秋霜葉の候尤も佳し

◉松尾神社 梅津の西、松尾山下にあり三條大橋より一里十二町 古へより洛西第一の大社にして維新後官幣大社に列せらる、神殿は大寳元年（西紀七百一年）の創建にして祭神は大山咋神、市杵島姫神の二座なり、神殿の前に拜殿あり、其近傍に神服殿竈殿、厨所、社務所等あり、此他山上山下に摂社末社など多く散在す一々擧るに遑あらず、山上別雷の峯に一巨岩あり、是神靈の始めて降臨せし所なりと、抑も當社の神は太古大堰川を開き丹波國を治め、また稲と水とを守護し給ふと稱し造酒家、醤油醸造者は皆これを信仰す、其醸造する時に當て山上の大杉谷より清水を汲來りて加入すれば必ず腐敗することなしと世俗いひ傳へたり

くれなゐに秋や手向て染つらん　爲家

松尾の山のみねのもみち葉

◉梅宮神社（梅津村にあり）　當社の創建は或は天平寶字年間といひ或は仁明天皇の御宇他より遷座せし者なりといひて其年代を詳かにする能はず官幣中社にして酒解神（祇神）大山大若子神（瓊々杵尊）小若子神（彦火々出見尊）酒解子神（木花開耶姫命）四柱を鎮座す、往昔嵯峨天皇の后檀林皇后、皇子なきを憂ひ酒解神に祈りて妊身す、則ち當社の清砂をとり御座の下に敷て太子を降誕し給ふ、仁明天皇是なり、今も婦人の産月に臨むもの當社の土砂を取て帶襟に佩び平産を祈るは此遺風なりといふ

◉桂離宮（七條の西、桂里にあり、三條大橋より一里三町）　寛永年中（西紀千六百二十年）八條宮智忠親王の造營し給ひし山莊の舊跡にして一に京極宮と號す、殿舍は良材を以て構造し障屏は名畫を以て貼付し其壯麗實に人目を驚かす、然のみならず林泉は彼の有名なる金森宗和、小堀宗甫が意匠を盡しゝ者にして怪岩奇樹の排置巧妙を極め清雅幽邃の趣き世にまた比類なし、嘗て後水

かつらのゐきう

Katsura Imperial Villa.

尾天皇園林堂の勅額を賜ひて之を賞し給ふ、明治十七年改めて離宮に充られたり、此地は古來月の桂の里と稱し和歌に咏ずる者多し

久かたの桂の里の小夜衣おりはへ月の色にうつなり　定家

紀の貫之も任はてゝ土佐より歸來れるとき此にて月の歌よめり、土佐日記に云く

かつらがは月のあかきにぞ渡る、人々のいはく此川あすか川にあらねば淵瀬さらに變らざりけりといひて或人のよめる歌

久かたの月におひたる桂川そこなる影もかはらざり鳧

又ある人のいへる

あま雲のはるかなりつる桂川袖をひてゝも渡りぬる哉

附錄

丹波

◉保津川舟　大堰川の上流を保津川といふ、その源を丹波、北桑田郡及び山城、愛宕郡の溪谷に發し、丹波、船井郡にいで、他流と合し、同郡保津村に至りて山峽に入り奇岩怪石の起伏せる間を奔流して相觸れ相激し噴沫四に迸しり水烟空に揚る、輕舟その中を纔かに一竿の操縱によりて過ぎ或は激波のために跳騰し或は急灘にはせて倒下し、その變化一瞬の間に幾回なるを知らず、斯てその進行の狀の千變なるが如く舟中見るところの物景また變化極りなし、前に望める巨巖俄然として後方にあらはれ後に見し峰巒忽焉として形を失ひ山走り岸行き樹石みな動けり、數里の行程寸時に過ぎ嵐山の麓にいたりて萬象漸く靜かなり、この舟行は暮春躑躅の候を尤も佳とす、峽中躑躅多くして其花の盛りなる頃ひには両岸の山々朱を注げるが如し、孟郊が躑躅の詩に迸火燒間地紅星墮青天といふ句あり、此所なる眞景を詠せしに似たり、また千蔭の歌に「たび人の松の火かけと見るはかりもゆる山路の岩つゝし」かな」章永の歌に「をち方のこゝしきくねの岩かゞに夕日をのせてつゝし句へり」これらの歌も亦借持きたりて爰の景色に充つべし

附言　保津川舟の快を試みんと欲はば京師より人力車を走らせて龜岡に至り更に北の方保津村にもき此處にて乘船すべし（保津村は龜岡を距る僅かに數丁）舟は車をも載するを得るが故に舟にて共に下すを便とす（人力車賃舟賃編の事は第五京師より龜岡に記載す）

を過れば右方に桂離宮あり、山城、丹波の國境に老坂隧道あり、この老坂は往昔大江山と稱し歌などにも多く見えたる個所なり（万葉卷十に丹波路の大江の山とあり、小式部内侍が「大江山いくのゝ路のとほけれは」と詠みたる大江山も即ち此處なり）舊は險坂にて旅人も行難みたりしが明治の世となりて隧道ひらかれ今は坦途を車にて走せとはれば昔の大江山とは知で過ぎく人も多かるべし、隧道を出て少しく進めば數仞の溪流に石を壘上て橋を架したり、此橋を田子

橋と稱す、石材はみな舊龜山城の城石を用ゐたりといふ、橋上より右顧すれば龜岡及びその近郊を見晴し三々五々の第舍烟靄の中に陰顯す、京師を出て爰に來り風物頓に改まり何事も目覺るこゝちして反りて一段の興味あり

舟下嵐峽　齋藤拙堂

龜山城下纔放舟　忽失雲間五層樓
目眩心悸下急流　峽束奔川波騰躍
石屏幾折難記數　操棹縱橫使槍似
嵐山楓柏入雙眸　亂刺石角舟自由
俄到彼岸恨太速　武夷九曲何足儔
却向峽中坐回頭　一餉卅里出絕險
晉入麗藻輝千秋　啼猿立鶴山水際
愧我奇勝等閑過　舟子間暇發棹謳
遙想延喜舊風流

◉龜岡（丹波南桑田郡に在り京都より五里二十九町餘）　舊と龜山と稱す、天正七年（西紀千五百七十九年）織田信長その將明智光秀に命し所在に割據して統一せざる州內の豪族を

討平せしめ其族を惟任と改めしめ以て丹波の守護と爲す、光秀卽ち龜山に城きて治す、斯て光秀、信長を怨望することありて龜山を周山と號し窃かに已を周の武王に比し信長を殷の紂王に擬したりしが天正十年遂に反して信長を本能寺に弑し尋て山崎の一戰にて豐臣秀吉の爲めに誅戮せられてより以來國内を分封して數人に與へ屢々沿革あり德川氏に至り州内を福知山、篠山、龜山、園部、柏原、綾部、山家の七藩となして分治せしむ而して龜山は岡部長盛の領する所なりしが後ち松平信岑之れに代りて以來子孫相襲て明治廢藩の時に及ぶ、龜岡は三丹州（丹波）（丹後）（但馬）より京都に入り來る要路に當り近郡より農産物の聚る地なれは今も郡中にては第一の繁華地にして郡役所、警察署等此に設置せらる

◉琴瀧　は船井郡市森村にあり高さ十丈幅二間三尺にして絶壁に懸り勢ひ奔馬の如く水石相激し山壑爲めに動かんとすその壯觀譬るにものなし

西南隔遠の名區

◉向日神社（乙訓郡向日町に在り、三條大橋より三里二町）　社殿のある所の丘を向日山といふ、町の右傍に石柱の華表ありて正一位向日大明神と題する額を掲く小野道風の揮毫なり、華表を過て登りもけば正殿あり、祭神は素盞烏尊の孫、大歳神の子向日神にして明治十四年六月府社に列せらる、正殿の前に拜殿あり正殿の左右に五座の摂社あり又境内の處々に楓樹ありて秋季の眺望尤も佳なり、山下の向日町は郡中第一の都會にして郡役所、區裁判所出張所、及び警察分署等あり、殊に京阪に通ずる鐵道線路に衝りて、停車場の設けあれば毎年五月一日の祭日には近郡よりも賽する者多く社頭頗る雑沓すといふ

早苗とる伏見の里に雨すぎて　土御門院

むかふの山に雲そかゝれる

◉長岡天神の社（向日町の南開田村に在）　當社の神靈は昌泰四年（西紀九百一年）菅公筑紫に

左遷のとき途次たま〳〵此地を過ぐ、當地に祐房（宇多法皇の侍臣）といふものあり嘗て公と親み善し、別を惜んで公の影像を寫す（或は公親ら寫し與ふともいふ）公謫所に薨去の後こゝに一祉を建立して其影像を祭るといふ、境内に池あり池の畔りに梅、櫻、躑躅、楓樹多く風光絶佳にして四時吟客韻士の跡を絶ず、南に見ゆる一小丘は是ぞ清小納言が枕草子に　篠のおひたるがおかしきなりと書たる鞆岡なり

◉柳谷（善峯寺の南、浄土谷村に在り）　當所の山に寺あり柳巖山楊谷寺と號す、白河天皇の御宇水觀上人の創建にして本尊は六尺許の千手觀音の立像を安置す、故に當寺の通稱を單に柳谷觀音といふ、脇士には將軍地藏左毘沙門天右を侍せしむ、境内に楊柳瀑布楊柳水、獨鈷水等あり

◉㋐粟生の光明寺（柳谷の麓粟生村にあり）　報國山と號し念佛三昧院と稱す、淨土宗西山派の大本山にして寺域一万三千坪を有す、開基は法然上人なり（建久九年熊谷入道直實始めて此地に草庵を結び後上人を延いて開基せしなりといふ）境内に本堂、阿彌陀堂、閻魔堂及び

法然上人の廟等あり、本堂の本尊は上人四國へ左遷のとき船中にて母の消息を以て造れる者にして世に張籠の御影と稱す、又阿彌陀堂の本尊は惠心僧都が千体の阿彌陀佛を刻み江州堅田の渚に安置したる所謂堅田千体の一にして蓮生法師廻國のとき常に其身を離さゞりしを晩年こゝに安置したるなりと、又法然上人の廟所は上人の死後叡山の衆徒その宗派の益々隆盛に赴くを惡み嘉祿三年（西紀千二百二十七年）遂に大谷の墳墓を發掘し死屍を鴨河に流さんとす、徒弟等これを聞てまづ棺を發し遺骸を收めて太秦に遷し安貞二年（西紀千二百二十八年）正月更に粟生野に遷して荼毗の煙に委し舍利を集めて今の所に埋めたるなりといふ、此地また楓樹多く且山腹の高處なるを以て右に天王山、南に八幡山を遙かに望み淀、木津等の諸川渺々として雲烟模糊の中に陰顯して自から活畫をなせり

◉善峰寺（大原野村、小塩山にあり三條大橋より三里卅町）　天台宗にして開基は源算上人なり（上人は叡山の僧惠心僧都の高弟にして長久三年（西紀千四十二年）始めて此山に入り草庵を結ふ）阪路を登ること八町中間に七折阪あり、こゝより樓門に至る間を阿知阪といふ、路の右傍に座禪石あり（源算上人始めて當山に登りたる時、觀念したる所なりと）樓門には長け五尺許りの金剛力士を安置す運慶の作なりといふ、本堂の千手觀音は行圓法師加茂の神木、槻木を得て弘仁法師を招て千手の像を作らしめ是を洛陽の革堂に安置し、その餘材を以て六尺の同像を作らしめし者是なりと、此他二重塔には大日如來を安置す、當寺の東南五町許に一子院あり、小塩山十輪寺と號す、本尊を禪衣觀音といふ（花山院西國順禮のはじめに詣て給ふ故なりと）又腹帶地藏を安置す（染殿皇后明子の安產祈禱のために造立し給ひしものなりと）本堂の西、三十間許を登れば鹽竈の古跡（傳へいふ在原業平大に鹽竈の風景を愛し遠く難波の海水を汲みて鹽を燒しめたる舊跡なりと）業平の塔（此塔初め下段の地に在しを八九十年前今の地に移したりといふ、而して此二つの遺跡は記錄の考證すべき者なし伊勢物語に業平の母が長岡に住したるよし見たれば此塔或は母の塔ならんか）鹽竈の古跡もいふは源融が河原院の故事をきゝひゞかめる者と思はれど暫く俗傳のまゝを爰に掲ぐ）あり抑も善峯寺は境域二万九千六百餘坪にして古へは五十有餘の僧房を有し一時隆昌を極

めしが應仁の兵火に罹りし以降漸く衰頽して今は僅に七坊を存す

よし峯に侍ける時よみ侍ける　慈道法親王

わきて猶もみちの色やふかゝらん都のにしの秋のやまもと

◉三鈷寺（善峯寺の北七八町に在）　當山の形三峰並び峙て三鈷に似たり故に此稱あり、開基を源算上人とし中興を善惠上人とす、源算承保元年（西紀千七十四年）此地に一室を建立し自ら阿彌陀佛の像を刻みて本尊とし北尾往生院と名く應保元年（西紀千百六十一年）觀性法橋尋ねて來りてまた一室を建立し自ら佛眼の曼荼羅及び釋迦、阿彌陀の二佛を畫き之を安置す（今櫻門の内石段の上に位する佛殿に安置するもこれなり）其後當寺を慈鎭に讓り慈鎭之を善惠に付與す善惠は天台眞言、戒律、淨土を兼修せし人にして今の淨土西山派は此人に基くなり、善惠の塔所は境内の華臺寺にあり、西の方なる山上を髮嶽と稱し巔き平かにして京城及び宇治奈良等の山々を一眸の中にあつめ頗る絶景なり

此庵はわが古里のひつじさる眺むる方は宇治の山もと　慈鎭

◉西岩倉の金藏寺（大原村氏方の山上に在）　桓武天皇平安城草創のとき四方に石藏を造り大乘經を納められたる西部の靈場なるが故に西岩藏の稱あり といふ、石藏は當寺の東の山上にありとかや、寺は元正天皇の御宇養老二年（西紀七百十八年）勅願に據り創建せし所にして宗は天台、開基は隆豐禪師なり、本堂の本尊には長け六尺一寸なる十一面千手觀音の立像を安置す（俗佛に向日明神の神作なりといふ）寺域三萬四千餘坪にして樓門、五大堂、念佛堂等あり又本堂の西南に三級の瀑布ありて三伏の日暑を洗ふによし

◉勝持寺（大原野村にあり、三條大橋より三里許）　小鹽山と稱す、當寺は役小角の開基にして文德天皇の御宇佛陀上人の中興せし所なり、上人深く天皇の崇信を蒙り遂に勅願所とせられ大に伽藍を修造す、そのゝち足利尊氏、當寺を尊重して田庄を寄附せしこと太平記に見ゆ

尊氏は大原野に陣を取て酒宴終日に及びけるが寺僧を召し寺號を

尋給へば勝持寺と申すと答ける、天下の戰ひに勝て持は名詮自性目出度とて大庄一所永代寄附せられける云々」と記したり、下馬橋より凡そ一里許の處に樓門あり左右に金剛力士を安す（阿像は運慶の作にして呼像は湛慶の作なり）樓門を過て進むこと三町許にして本堂あり勝持寺と題する堅額を掲ぐ（小野道風の筆）本尊は藥師佛（傳教大師の作）にして左壇に毘沙門天（同上）右壇に不動妙王（役小角作）を安置す、又堂前左方の洞内に石像の不動（弘法大師の作）を安す、此寺古へは櫻花多くして花の寺とまで稱せしが今は纔にその形を殘すに止まる西行法師が

花みにとむれつゝ人のくる時はあたら櫻のとがにぞ有ける

と詠せしより名けたる西行櫻も枯稿して跡なし、法師の庵趾は堂西の山上に在り、又長嘯子天哉翁の閑居の遺趾は東北の山上に在り（長嘯子初名は木下若狹守勝俊、遁世して長嘯子と號し和歌を吟詠して風月を樂む、初め洛東靈山に幽栖しのち此山内に移り菴を構へて閑居すること二十餘年、慶安二年六月十五日沒す）かの學白集に掲ぐる所の驢上岩、玄賓石、指月池等の名蹟今なほ存す、この近傍は古へより著名の勝地にして古跡も亦甚だ多し、爲實卿が

大原やをしはの櫻さきぬらし神代の松にかゝるしらくも

と詠せられしも此處にして大江匡房が

夜を寒み瀨和井の水は氷るとも庭火は春のこゝち社すれ

と詠せし瀨和井清水は本堂の西方にある溪流をいひ光俊が

いかにけさ冴野の沼や氷るらん小鹽の山に雪はふりつゝ

と詠せられし冴野の沼は石壇の下にある小池なり、また古歌に名高き朧の清水は下馬橋の東、路傍の北にあり（因に云、愛宕郡の大原にも同名の清水あり古歌に詠ぜしは或は愛宕郡の方ならんか暫く疑を存す）

◉大原神社（大原野村の森林中に在　官幣大社にして武甕槌神、經津主神、天兒屋命及び姫神の四座を祭る、奈良の春日神社と同體なり、當社の創立に二說あり、一は文德天皇の御宇仁壽元年（西紀八百五十一年）春日神社の帝闕に遠きを以

て皇太皇后の鎮座せしめ給ふ所なりと一は仁明天皇の御宇嘉祥三年（西紀八百五十年）閑院左大臣冬嗣上奏して平安城守護のため之を勸請すと、爰に両説を掲げて讀者の選擇に任ず（因に云、冬嗣は嘉祥に先だつこと廿三年淳和帝の天長三年に薨ず故に若し冬嗣とせば年代に誤あり）毎歳二月八日の例祭には勅使の參拜もありて祭儀嚴かなり、社頭今もなほ昔時の壯麗を存す古今集に在原業平の歌あり

二條の后のまだ東宮のみやすどころと聞へける時に（おほはら野にまうでたまひける日よめる）

おほはらや小鹽の山もけふこそは神代のことも思ひいつらめ

◉天王山（山崎町にあり三條大橋より四里廿八町）　當地は京阪間要衝に當るを以て往々戰陣の場となる、天正十年（西紀千五百八十二年）六月羽柴秀吉その主織田信長の爲めに明智光秀と戰ふに方り先づ此地を占めて遂に勝を制し、光秀敗走して小栗栖の里に逃れ土兵に刺れて命をおとし、秀吉關白の運を開く世の偏く知る山崎合戰是なり、元治元年五月長兵の京師に入るときも益田親施、眞木保臣、久阪通武等と共に此山及び山崎に屯せり、山上には素盞烏尊の御子八王子を鎮座する祠あり天王八王子社と稱す、卽ちこの山名の起る所以なり

山腹に寶積寺といふ佛刹あり補陀落山と號し宗旨は眞言なり老杉巨松鬱蒼たる間石磴を攀登すれば樓門あり金剛力士を安置す、佛殿の本尊は六尺七寸の十一面觀音の立像にして聖武天皇、行基菩薩の両作なりと傳ふ（傳說のまゝを記す眞僞知るべからず）當寺は聖武天皇の祈願により行基菩薩の草創せし所にして寶積寺或は寶寺とも稱す其故は龍神の天皇に獻せし打出槌といふ珍寶を當寺に納めたりしに因ると（是亦傳說のまゝを掲げしものにて固より信を置くべきにあらず例の寺緣起なり）堂前には九重の石塔婆を建て門内右方には三重の塔を建つ凡そこの山古戰場を以て聞もるのみならず眺望に於て尤も著名なり、八幡の翠峯澱江の白帆、平林田野萬種の光景ことゞく皆この山の瞰望に集るを以て一度こゝに登臨せばまた下歸るを忘る

◉男山神社（綴喜郡八幡町の上方にあり三條大橋より五里三十町）　有名なる官幣大社の一にして應

神天皇、神功皇后、玉依姫の三柱を鎮座す、其鎮座は貞觀年間（西紀八百六十年代）南都大安寺の僧行教（武内宿禰の後裔にして常に宇佐八幡を崇信す、嘗て其社に參籠する事二千日神託あり曰く皇城の近地に移座して國家を鎮護せんと）宇佐八幡の神告を受け之を奏聞し勅許を得て勸請せしに創まる山麓に一の華表あり石柱にして南に面し八幡宮と題する額を掲ぐ（今の額は銅板にて寛文年中瀧本坊昭乘の模造せし者なり舊の額は佐理卿の書にして今は神庫に藏す）本社は二の門の内にあり門は唐破風作りにして左右に廻廊を遶らし神殿は木造の瑞籬を以て圍む、その籬甚だ壯麗にして花鳥を彫り五色を彩り金銀を鏤めて人目を眩す、又神殿の雨樋（長十三間、幅三尺、厚一寸六分）は天正年中豐臣秀吉の寄附せし者にして黄金の樋と稱し世に名高きものなり（滅金製なるべし）摂社には武内社（武内大臣）若宮社（仁德天皇）若宮殿社（宇禮姫、久禮姫姉妹を祀る）水若宮（宇治皇子）住吉社（住吉神）高良社（高良玉垂命）狩尾社（大巳貴命、天照大神、天兒屋根命）石清水社（天御中主神）の八社、末社には氣比社、貴船社、龍田社、一童社、廣田社、生田社、長田社、三女社、水分社、稻荷社等（摂社末社の中には名稱の濫義及び祭神の名に其何たるを知るべからざる者あれど暫く俗説のまゝを記す）山中所々に散在す、又石清水

景清塚、楠公手植の樟樹、御前の橋などいふ古跡あり、當社は古來朝廷の崇信淺からず殊に弓矢の神として武家の尊仰極めて深かりき、昔しは美々しき祭式また放生會等ありて甚だ賑はへり、現時は年々九月十五日を以て祭典を執行す

誂男山、幡　合離

宗祧肅弧矢　壯麗應神宮　讓位儲君、德親征母后、功
飛龍白旗異　厄井放生同　清水岩々石　鎭京今古雄

萬代に千世をかさねて八幡山君をまもらん名にこそ有けれ　俊成

◉淀町（三條大橋より正南四里許り）　久世郡の西北隅に位して加茂川、宇治川、桂川等の諸水及び巨椋池の瀉水この地に相會し匯流するを以て淀の名あり、元龜年中（西紀千五百七十餘年）岩成主税助こゝに城を築き以て織田氏と戰ひしことあり、其後豐臣氏の愛姫淀君こゝに居り德川氏の初世には伏見城を移して造營し松平定綱その城主となり、享保年間（西紀千七百二十年頃）に至り稻

葉正知、定綱に代りし以來子孫相襲て明治維新のゝち廢藩の時に及ぶ斯る地なるを以て今も市内商肆軒を比べ郡役所、區裁判所出張所、警察分署等の設置ありて郡内第一の都會たり、然ども城壁は廢藩と共に荒廢し有名なる淀の川瀬の水車も廢城と共に斷絶せり

夜下二淀江一　齋藤拙堂

滿流枕底響淙淙　一夜東風下二大江一
客夢纔二醒一人語湧　萬家曉色入二蓬窓一

此ころは淀の渡りのあやめ草　順德院

すゑこす浪にかる人もなし

◉安樂壽院竹田村にあり　宗旨は眞言にして古義新義を兼修す、當院は初め鳥羽上皇の離宮なりしを保安四年西紀千百二十三年寺院となし五層の寶塔を建たまふ、人これを呼て本御塔といふ今の本堂は即ちその遺墟なり、堂内には卍字阿彌陀佛を安置す、堂下に石櫃あり上皇宸筆の法華經及び顯密衆僧に書せしめし一字一石の大乘經を納む、又遺詔に據りて上皇の芳骨をも奉葬す、本堂の東南の方に新御塔あり内に十一面觀音を安置し脇壇に鳥羽院、美福門院藤原長實の女にして上皇の女御なり八條女院障子内親王の畫像を掲ゞ、此はか境内に二重塔本尊阿彌陀佛、春日の作新堂本尊藥師如來、行基の作無銘五輪塔等あり、又本御塔の東、塚の下に冠石あり、本御塔の北に御愛の梅あり之を碁盤梅と名く、傳へいふ當時城南宮中にて圍碁を禁じ碁盤をこゝに埋み其上にこの梅を植ゑ給ひし故なりと

契りおかん我よろづ代の友なれや　鳥羽院

竹田の原の鶴のけころも

南方隔遠の名區

◉鷲峰山金胎寺相樂郡、東和東村原山の上にあり　當山は相樂、綴喜の兩郡に跨る高嶺にして坂路嶮峻攀登すること二十八町許にして漸く本堂に至るを得、堂は南面にして行基作の彌勒佛を安置す、宗旨は眞言にして開基は役小

角なり、抑もこの山を開きしは白鳳四年（西紀六百七十五年）にして天竺の靈鷲山に摸し、經營せしを以て奇峰の間に池多輪、妓樂嶽、阿閦嶽、不空嶽、釋迦嶽、虛空藏岳、仙居、頭光瀧、兜率瀧、仙藥水、寶生嶽、心經巖、阿彌陀嶽等の名蹟あり、又堂上の峻嶺を空鉢峯といふ、當寺の住僧泰澄所持の鐵鉢を藏する所なりと、この頂上に登れば琵琶湖の風景を一望の下に集むべし

◎大智寺（同郡、湯船村の奥、字小杉の西にあり）　百丈山と號す、禪宗にして大觀禪師を開祖とす、佛殿には釋迦佛の坐像（二尺計にして安阿彌の作といふ）を安し、方丈には文殊菩薩及び開祖の像を畫く、當山に八景あり雄峰（後山の東南十四五町の山下に在り）、白雲岫（西山の嶺を云）、歸鳥林（門前に在り）、座禪石（寺の東北の處なりといふ）、珠岩（座禪の東南に在り）、洗耳泉（麓の東北に在り）、樵歌嶺（東山の頂）、文殊岩（座禪の東南に在りといふ）、又當寺の南二町餘に哀堂あり、境内に重衡の塔及び頸洗の池あり、平重衡がこゝに誅せられし事は盛衰記にありて世の知るところなり、その折しも時鳥の鳴て西へ行を見て咏せし重衡の歌あり

思ふこと語りあはせん時鳥よろこばしくも西へゆくかな

◎有市炭酸泉（笠置村、大字有市にあり）　泉質炭酸氣にして胃達及ひ鹽鐵土分小許を含み其温度は華氏の四十六度内外なりといふ、効能は肺病、咳嗽、腸胃病浸性眼瞼衝等に宜し、因に誌す本郡山田莊村大字山田にも亦鐵泉あり温度五十四度内外にして鐵氣を含むを以て胃病者には最も効ありといふ

◎明神大瀧（北大河原にあり）　伊賀國の上野の川の流れにして當地に來りて瀑布となり名張川に會して木津川となる、懸崖百五十丈、左右に巨岩屹立し一を雄臺といひ一を雌臺といふ風景の奇勝なる恰も畫圖の如し

◎笠置山（木津川の南岸、南笠置村の上方にあり）　山勢雄偉にして巉巖怪を爭ひ樹木鬱葱として溪水流を競ふ、山中に文殊院、福壽院等あり、是卽ち解脫上人の開基せし鹿路山笠置寺の殘坊なり（元弘の亂に本堂、鐘樓、經藏等多く燒失せり）山上に笠置石あり、傳へいふ白鳳十二年（西紀六百八十三年）天武天皇この山に遊獵し給ふに御すると

ころの駿馬巖に膝を屈して動ず、天皇佛にこの危急を救はゝ佛閣を造營せんと誓ひ給ふ、既にして感應あり、天皇卽ち着御の蓋笠をとき巖上に止めて後證とし給ふ、山名寺號は是に依て起りしなりと（天武の故事は史乘の徵すべきなく固より信ずべき者なれど暫く俗傳のまゝを茲に記す）當山は元弘元年（西紀千三百三十一年）後醍醐天皇の行在所を定め給ひし所にして名勝古蹟頗る多し、爰にその概畧を摘記せん、坂路を登ること八町許にして文珠院あり、院の東に藥師彌勒虛空藏の三巨石屹立す（高さ五六間より七八間に至る、石面各々其像を彫刻すれど元弘の亂に猛火の燒く所となり今は虛空藏の外は皆磨滅して形態辨ずべからず）是より北すれば石門あり（門上の大石長さ凡そ二十間）門を過て西折すれば太皷石あり、石を去ること數歩にして一大平石あり、是卽ち皇居の遺趾なり、彼の楠公が召に應じて至り「天誅加ふるところ賊殲れざるなし、然ども勝敗は常なり一敗を以て志を動かすべからず、臣にして未だ死せずは陛下聖慮を勞し給ふなかれ」と感憤拜答せしは此處なり、又秋の深くなるまゝに

うかりける身を秋風に誘はれておもはぬ山のもみぢをそみる

といふ御製のありしも此處なり、當時賊將陶山、小見山ら夜襲して火を皇居に放ちければ天皇藤原藤房その弟季房に御手を引れつゝ赤阪城へと落させ給ふその時の御有樣を太平記に載せて云く

一足には息み二足には立留り晝は道の傍なる青塚のかげに御身を隱し夜は人も通はぬ野原の露を分迷はせ給ひ三日まで御食を斷しかば君臣ともに足たゆみ身疲れて今は何なる目に遇ふとも逃ぬべき心地もせざれば幽谷の岩を枕にて現の夢に臥たまふに梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞し召て本陰に立寄せ給ふ、下露のはら〳〵と御袖に懸りけるを御覽じて

さして行く笠置の山を出しより天が下には隱れ家もなし

藤房卿なみだを押へて

いかにせん憑む陰と立よればなほ袖ぬらす松の下露

甚もゝしかりける事どもなり、名所は前にかゝげし他になは千手窟、胎内挑、貝吹岩等あり、又千手瀧は東崖の巖頂に懸りて幾千仞の溪谷に落ち泉川は麓に流れて白浪巖に激す共に勝地たり

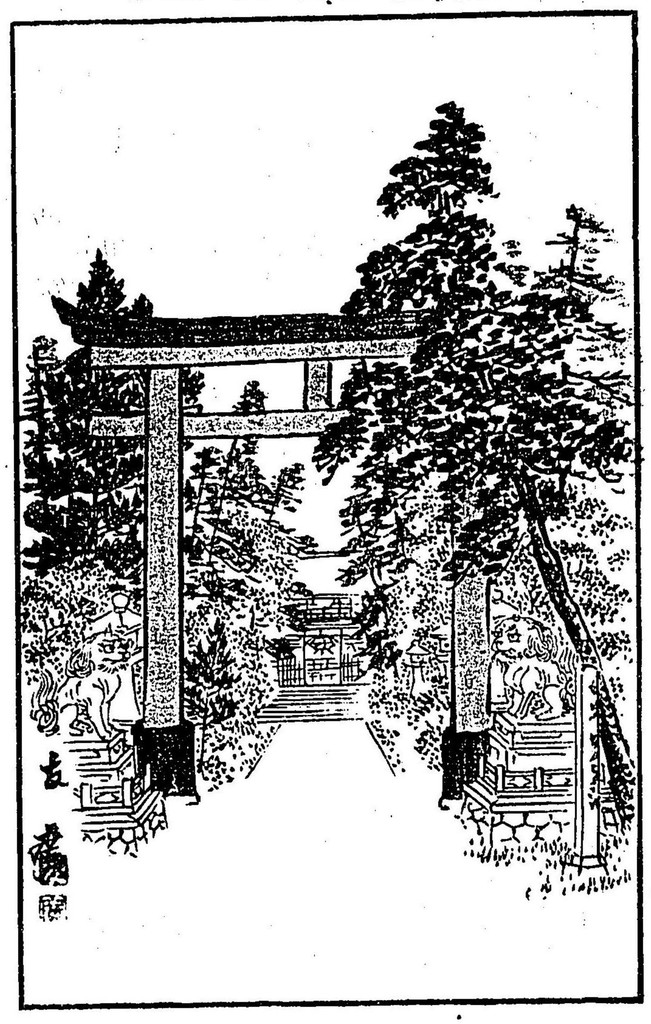
奥田士亨

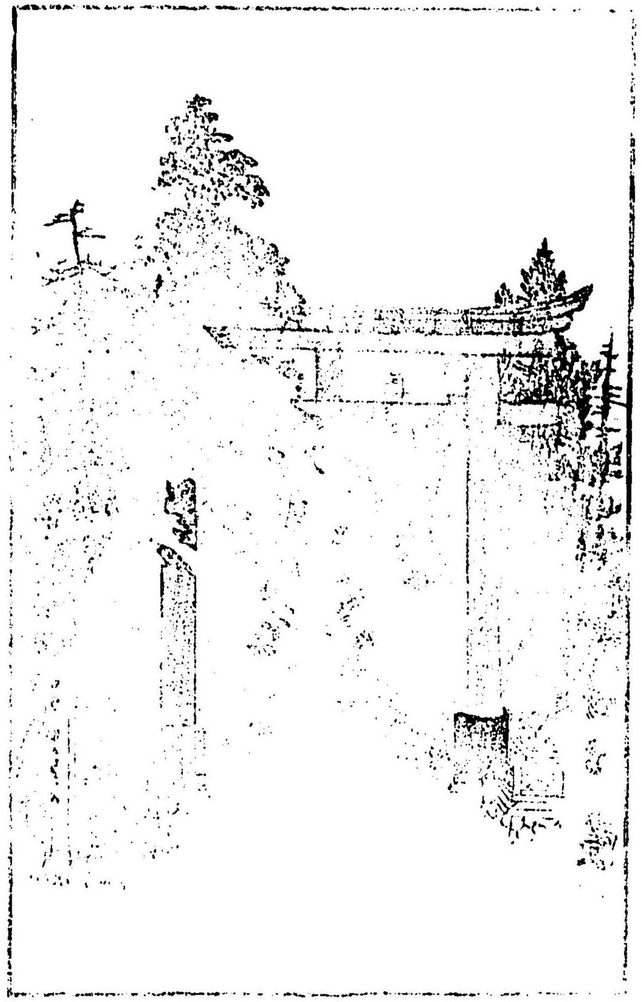
上巒置山

吟筇趁舞上崔嵬　島外捫蘿路九廻　嵐氣侵肌襦袴薄
春風吹涙蒲帆開　谷深勞汲阿加井　苔滑倦登般若臺
礎石空留行在所　僧導話古夕陽頽

東南隔遠の名區

◉稲荷神社（伏見街道の東側、稲荷山にあり、三條大橋より一里十八町）　著名なる官幣大社の一にして祭神は倉稲魂命、盞素嗚命、大市比賣神の三座なり、往昔元明天皇の御宇、和銅四年（西紀七百十一年）二月午の日倉稲魂命始めて垂跡し給ひし時は三の峰（今の本社より東へ凡そ十八九町の所にあり）に鎮座せしめしが延喜八年藤原時平、社殿を修造し、その後永享十年（西紀千四百三十八年）に至りて今の地に遷座す、境内頗る廣濶





にして老杉古松四方を圍み其中に宏壯美麗なる社殿あり、本社の他に若宮、拜殿、繪馬堂、御輿藏、寶庫など立並び樓門華表すべて建物の紅色は松杉の翠碧と相映じて恰も畫圖の如し、後山にはまた數多の攝社末社ありて之を順拜するを御山廻と稱へ賽人つねに絶ず、例祭は毎歳五月七日にして五基の神輿の神幸あり、その行裝甚だ艶麗なれば遠近より來觀のもの群をなせり、祠前の街頭には泥塑を陳列する店おはし、之を伏見人形と稱して此地の名産なり泥土を以て人物鳥獸の形を造りその上に彩色を施す、品質粗にして小兒の玩弄物たるに過ぎれど價の廉なるを以て稲荷社に賽する者は歸路必ず買て土産とす

因に云、世俗おはくは稲荷の神を誤認して狐とす、故にこれに詣る者はその嗜好する所とて油揚赤飯等を持もきて手向るを常とせり、人にして畜類を神とし拜するに至りては迷信とはいへ一は人類を恥かしめ一は神明を瀆すの甚だしき者なれど觀として其非を悟らす

歎ずべきことなり、而して此迷惑を世にいれし者は僧空海なるべし空海嘗て唐土より歸朝する時白狐ありて佛法流傳のために空海を守護し、その船に共に乘て本邦に渡りそのゝち稻を荷へる老人となり東寺の門前にて空海に逢ふ、空海これを祀りて東寺の鎭守とせしがその稻を擔へるを以て稻荷と號したりと、奇怪の說をなして空海これを世に傳へぬ、稻荷の神を狐とすること此傳說に據れるや疑ふべくもあらず、然れども稻荷としも稱するは此神を祀れる地名より起りし者にて舊記に和銅年中此神始めて伊奈利山に現すとある是なり、且ッ和銅は元明帝の年號なれば空海に先だつこと殆んど百年（當社の創始は和銅四年（西紀七百十一年）空海の唐より歸れる時大同元年（西紀八百六年）なり）伊奈利山の名は空海以前に既にあれば稻を擔ふにより號すといふ說は當らず斯て稻荷神社は古來五穀を司どり給ふ神として仰崇みたりしなり、神社啓蒙に豐葦原ノ卜定記を引て辰巳の方に當りて倉稻魂の垂跡あり、夫この神は百の穀物を播したまふ故に名け奉る、神代の昔より此峰に向ひ給ふも知ず、たゞ三峰に顯れ給ひしは人皇四十三代元明天皇の和銅四年辛亥二月十一日に垂跡ます誠に諸人を哀憐の御心ふかく蒼生の作らん物は草の片葉まで百の災を攘ひ給ふともあり、案ふに倉稻魂神（社中の祀る）は農作に功ある御方なりしなるべし、偖その倉稻魂神は伊邪那岐伊邪那美の御孫稚產靈神の御子にして豐遠迦比賣、宇氣母智大御食都豐宇氣毘賣など稱しみな食物に關りたる御名なり、大市比賣神（下社に祀るは大山祇神の女にして須佐之男命に御合まして大年神を生給ひし御方なり、この大年神もまた五穀に功績のありし御方なり、故にその名をも大年とは稱するなり、五穀に功ある神を生る方なる故にこゝに祀れるにもあるべし、素盞嗚命（上の社に祀る）はこの國土を經營せし大國主の御父、かつは大市比賣の夫なれば比賣を祀ると共に此所に祀れるにもあるべし、一に土之御祖神とす、土之御祖神は大年神の子

にして猿田毘古神とも稱し天孫を迎へ導ける御方なるが上に大年神の子なれば是亦こゝに祀るの縁なきにあらず、然ばとにかくに狐などにはあらず世になは惑へる人もあらば解誤の一助にもとて爰に聊か辯じ置く

いなり山しるしの杉の年ふりて　有慶

みつの御社かんさびにけり　一

ねきこともしなかはるらん稲荷山　千蔭

ひれもく袖の色にたな引

◎石峰寺（伏見街道深草村の東山に在）　百丈山と號す禪宗黄檗派にして開基は千呆和尚なり、本堂の本尊藥師佛は往昔天德中（西紀九百五十餘年）源滿仲攝津國多田に一字を建立し沙羅山石峰寺と號し其中に安置せし者なるが文祿中回祿の災に罹り寺院の燒失せし後は久しく山中に埋沒せしを慶長元年これを發掘し同く八年因幡堂に安置し寶永年中（西紀千七百餘年）に至り德川氏の命に依りて今の地に移せる者なり、本堂の後山には若冲翁の圖案に係る五百羅漢の石像あり山下には若冲翁の墓あり（若冲のことは第四編繪畫名家略傳に出づ）

◎寶塔寺（稻荷神社の南、伏見街道の東方にあり）　延慶年間（西紀千三百餘年）日像上人の開基にして法華宗に屬す背後の山に七面社及び七面の瀧等あり境内頗る幽閑にして雅人の吟筇を曳くもの多し、この地は彼の深草の御門の御國忌の日文屋康秀が

草深き霞の谷に影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

と詠せし古跡なり

◎瑞光寺（寶塔寺の南數町にあり）　草山と號する法華宗の寺院なり此寺もとは極樂寺の境内藥師堂の地なりしを其寺廢荒のゝち明暦元年（西紀千六百五十五年）元政上人中興して法華道場となし今の寺名を附せしといふ、當寺の本尊は二尺許なる釋迦佛の坐像なるが彫刻細美にして胎内には五臟六腑

及び脈絡等に至るまで具はらざるなし、唯惜むらくは何人の作なるかを明にせず、境内に元政の墓あり左の詩に詳かなり

過ク元政上人ノ墓ヲ　　鳥山輔寛

上人浮屠氏之工詩者也嘗隱于深草山之霞谷今有墳墓在其舊菴側唯植竹三竿不別存碑碣有艸山集行于世

政公墳墓在、傳是此棲遲　除有三竿竹　終無隻字碑
人高霞谷隱　我愛草山詩　重過留題去　祇應地下知

深草里は稲荷神社の南方より墨染邊までをいひて昔は此はとり鶉おほく秋に至れば都人の來りてその美聲をきゝ吟咏する者おはかりしとかや、然るに正保の頃（西紀千六百四十餘年）土人これを厭ひて悉く叢を苅つくし鶉の棲息を止めしとぞ雅俗その好惡を殊にす然ることもありけん口惜し

鶉なく夕べの空をなごりにて野と成にけりふか草の里　家定

◉藤森神社（深草村にあり、稲荷を距る十餘町）　京都を距ること一里餘、伏見街道の東側平林の中に在り、神靈は舍人親王、早良親王及び伊豫親王の三座にして明治十四年六月府社に列せらる、當社の創建に付ては種々の俗説あれども確徵を得ざれば畧す、境内に櫟の大樹あり俗に之を旗塚と稱す、傳へいふ神功皇后三韓征討の後その旗及び兵器を埋め給ひし遺跡なりと、然ども是また覺束なし、例祭は五月五日にして神幸の行裝には供奉の甲冑弓箭を帶ぶ、傳へいふ此は早良親王の異族征討の日の軍勢に擬する者なりと然ども親王の出征せしことを聞ず、蓋し光仁帝の末蝦夷反して陸奥大に亂れ藤原繼繩を征東大使に大伴益立紀ノ古佐美等を副使に任せしことあれども親王のことと見えず恐らくは謬傳なるべし、此森昔は藤花に名高くして藤森としも稱せし程なるが今は纔かに其浪殘をといむるに過ず、古き歌にはこゝの藤のもり春をかけてそ花は咲ける　信實

深草は名のみ成けり藤のもり春をかけてそ花は咲ける　信實

紫の雲と餘所にて見えつるは木高き藤の杜にぞ有ける　小侍從

◉桃山（藤の森の東南、伏見町の上方に在）　初め水淵大和守この山に小城を築き後また文祿三年豐臣秀吉、佐久間河内守、瀧川豐前守等に命じ更に此所に城を修造し盛んに第宅を營ましめ以て之に移住す、斯て慶長五年石田三成の亂に徳川氏の將鳥井元忠この城を守りしが浮田秀家、小早川秀秋、島津義弘等の爲めに攻落され爾後は荒廢し空しく城山の名のみを存して舊墟とはなりぬ、秀吉のこゝに築きし當時は結構善美を盡しゝと雖も今はその豪華いづくにか在る世事雲、千變浮生夢、一場と詩人がうたひしは實に然り、此地もと數千株の桃樹ありき、故に稱して桃山ともいへり

遊桃山　合離

豐公昔日競豪華　一上荒墟久耐嗟
黄土、美人零落盡　年々尚發斷腸花

山の北方に梅溪あり南端に宇治見臺あり共に梅樹多く早春の頃に至れば花魁清香を放ちて万人の掬するに任す、殊に宇治見臺は香雲樹梢を埋むるの間に巨椋の大池淀川の長流を望み風光甚だ佳絶にして亦清快なり

伏見山の梅　波忠秋

嵯峨山の花に先たつ白雲はふしみの梅の盛なりけり

◉伏見町（紀伊郡の東南部にあり、絲大橋より一里十一町三）　此地は古へ荒原の中に一二村落を成し古歌に「伏見の小野に鶉なくなり」などを詠せし處なりしが豐臣秀吉城を茲に築てより漸く人家を增殖し徳川氏の世に及びて伏見奉行を置き愈々繁盛して今は市坊二百六十餘、東西十四町半、南北一里餘に亘り戸數四千三百三十餘、人口一万六千九百餘にして國内第二の都會たり市街は殆んど京都に相接して肆店櫛比し郡役所、區裁判所、工兵屯營、郵便電信局、警察署、直間税分署等の諸官衙あり、私立には伏見銀行、伏見倉庫會社、淀川漕船會社等の設あり、殊に淀川を南に帶び高瀬川を西に繞

らして京阪の間、小漕船、運搬船の往來たえず、且ツ稲荷神社の華表前には停車場ありて京都停車場を距ること僅かに一哩六十三鎖、毎日十數回漕車の發着あれば其交通の便益また此地の盛榮に干る所多し

◉御香宮（伏見山の西、三町許に在）　御諸神社と稱す、祭神は神功皇后にして明治十四年六月府社に列せらる、境内に正殿、拜殿、神樂所及び幾字の攝社あり、又社前華表の東傍に御香水といへる清泉涌出づ世俗傳ていふ往昔この水香氣四方に薫じ病者これを服すれば疾忽ち癒え祈願ある者これを飲ば本懷を達すと（餘りに結構すぎて信を置難し神佛の俗傳には斯る類ひ多し）當社を御香宮と稱するも亦この水に起因すとかや

◉觀月橋（伏見町の東南隅にあり）　紀伊久世の両郡に跨り奈良街道に架する橋にして長さ百四間半、幅四間半あり舊は桂橋と唱へしを豊臣氏の世この橋の西北に別所豊後守の邸第ありしより豊後橋と稱す、而して近時架換を爲して今の名に改稱せり、この橋淀川の碧流に架して月夜の眺望いはん方なく美はし、觀月の名を負せしも此故なるべし

◉巨椋池（觀月橋の東南にあり、三條大橋より三里二十九町）　又小倉池と稱し俗には大池と呼ぶ、両郡（久世郡の東北隅にあり、紀伊）に跨る大池にして東西三十二町、南北二十四町、周廻四里十一町あり、古へは淀川の流水これに瀉ぎしかば入江と稱せしが豊臣秀吉の時東邊を斷切して中央に堤を築き新に大和街道を通じて交通を便にせり、池には芙蕖多くして花時は芳氣遠くきこえ眼涯たゝ紅綠を見て水を見ず、冬はまた水鳥多くして遊獵に宜しといふ

◉宇治町（久世郡の東北隅にあり、三條大橋を距る四里十一町）　宇治川を隔てゝ宇治郡の菟道と相對し、市坊三十（東西十五町南北二町半）戸數六百九十七、人口三千四百二十七を有す、河岸には清潔なる旅舍、瀟洒なる酒樓ありて翠峰に對し清流に臨む、この地幽雅にして山水の美なるより遊客常に跡をたゝず殊に夏夕は觀螢に宜し飛光千點碧水を照して夜色頗る麗しく古來螢火の名勝たるに背かず、又この邊は有名の茶所にして人家を離るれば到る所みな茶

園なり、摘芽の候にいたれば婦女一様に白地の手拭を頂き赤染の前掛を垂れ緑畦の間にありて均しく相謳ふ、その聲おかしくして斷續遠近に聞え、焙茶の烟戸々にあがり其香風に和して數里に薫ず

宇治山の木の芽はる雨いそがれて　直好

雲の晴間もまたぬころかな

木かくれて茶摘もきくやほとゝぎす　ばせを

町端なる長橋は即ち宇治橋にして此橋の濫觴は大化二年（西紀六百四十六年）僧道登（一云道昭）の渡せるに起る、その時の橋銘今なほ存ず曰く

浼々横流　其疾如箭　修々征人　停騎成市
人馬亡命　從古至今　莫知航葦　世有釋子
出自山尻　惠滿之家　大化二年　丙午之歳
濟度人畜　即因微善　爰發大願　結因此橋
法界衆生　普同此願　夢裡空中　導其昔緣

欲赴重深　名曰道登　構立此橋　成果彼岸

其後しば〳〵改造ありしが弘安九年（西紀千二百八十六年）の築造には其十月十八日橋供養ありて、龜山上皇の行幸もありき、橋の長さ八十三間五尺五寸、而して古は今より數町の川下にありきといふ、當橋は古へ大和路の要衝たりしを以て戰鬪の史に關係頗る多し、治承の乱にも頼政この橋を撤して敵を待ち、養和三年頼朝が義仲を討るときも義仲、今井兼平、根井行親をして宇治勢多の二橋を撤せしめて拒守す、佐々木高綱梶原景季の流を乱して先登を爭ひしは此時なりき、正三位有功卿の詠る歌に

かは橋をひきしは遠きむかしにて騒ぬ水をくむ世なりけり

當橋の西に橋姫祠といふがあり、初めは二社ありしが一社は洪水のために漂流して今は礎のみを存す、祭神に付ては種々の説あれど一も信をおくべき者なし、爰にその一説を記して讀者の一粲に供せん、昔宇治の橋守に女ありて橋姫といひしがその女懐妊して頻りに和布を食はまほしく思ひ男に請ければ男諾ひて和布を得んとて伊勢の海に赴き

誤りて溺死せしを後に女戀しさに堪へずして尋ねて伊勢にもきしに男の靈海より現れて

さむしろに衣かたしき今宵もや宇治の橋姫われをまつらん

と一首の歌を詠じたりといふ、斯てその社の二字あるは一は男を祀れるなりと、然ども此歌は古今集のうたなり、案ふに此歌を此男の詠るには非ずして此歌によりて後世この怪談を揑造せる者ならん

附日本茶史　菟藝泥赴といふ書に年中行事を引ていへらく栂尾は宇治より以前の茶の名譽あり、日本に茶を用ゐることは明惠上人より以前のことなり、季の御讀經は天平元年（西紀七百二十九年）に始められて貞觀の頃（西紀八百六十年代）毎季に行はれしに第二日に引茶とて僧に茶を賜ふとあり云々、また海人藻芥に茶は上古より我朝にあり挽茶節會とて内裡に於て行はるゝ公事儀式にして葉上僧正入唐のとき重ねて茶の種を渡され栂尾明惠上人これを翫そべりと記す、その最始の確かなる所は詳らかならねど明惠より前既に茶のありしことは明かにして弘仁六年（西紀八百十五年）四月嵯峨帝近江國滋賀韓崎に幸したまへる時、崇福寺の大僧都永忠みづから茶を煎じて奉りしことあり（崇福寺は滋賀寺も稱し十五大寺の一なりしが今は廢亡す）又當時茶は貴人騷客の頗る賞玩せしものと見え詩に文に續々あらはれたり、嵯峨帝の御製に蕭然幽興處、院裡滿茶烟の句あり、皇太弟大伴（淳和）の御作に提琴擣茗老梧、間の句あり、菅公が文中に茗葉香湯免飲酒云々の語あり、此他なほ多し、加旃弘仁六年の六月畿内並びに近江丹波、播磨等の國に令して茶を植ゑ毎年これを獻ぜしめられし事さへあれば茶を喫することゝ漸多くなりもきしことゝ疑ふべくもあらず（日吉神道秘密記（天正廿四年歸朝す）茶實を唐より持歸りて此處に植ゑ其後山城の宇治栂尾所所に植ゑ弘めし由記したりといふ、然ども余は淺學にして未だその書を親しく見ず）而して之を喫するに鹽を和す支那にて茶に鹽を和すること其風の我邦にも行はれしなるべし　故に此頃の茶の歌に前畧呉鹽和味

更美、物性由來是幽潔、深巖石髓不勝比、煎罷餘香處々薫云々と詠じたり、又茶の用法に二種ありて一は葉茶を煎じて喫し、一は抹茶を點じて服す然ども當時いまだ煎茶點茶とも儀式など起らず其行はるゝ所も漸多くなりしとはいへ尚は區域は廣からざりき、然のみならず人の賞翫も一時はぞには盛ンならず移植せし所の茶も亦發育を遂ずして中絶せしならんか中頃その沙汰を聞ことなかりしが建久年間に至り僧榮西（仁安三年（西紀千百六十八年）宋に入り建久三年（西紀千百九十二年）歸朝し始めて禪道を唱へ各所に寺を建立し建久三年香椎神宮の側に建久報恩寺を創む、後に千光國師と謚せらる）宋より茶種を取來りて筑前の背振山に植、これを岩上茶といふ、其後上京せしとき茶種を明惠上人に與へて栂尾に植しむ、故に栂尾を茶山と稱せしといふ、斯てその植たる所を深瀬といひ頗る茶に適したれば年を經ずして良好の茶を生出し之を宋に送りしに宋人深く賞翫し詩を作りて稱美す、詩中に、幸得梅山信、嘗日本茶（梅山は栂山の事なり、そはといふ句のあるより栂尾の茶梅栂字音同じければなり）

支那に聞え大に日本茶の名を海外に高くす、斯るが故に茶としいへば栂尾の明惠が始めの如く人々思ひゝがめ其獨しゝは榮西なることをも知ずなりて彼是の書にも栂尾を茶の始めとし明惠入唐して茶種を持來れりとさへ云にいたれるなるべし（和漢三才圖會に明惠上人入唐得二嘉種一歸種二栂尾山一と記したれど明惠は入唐せしことなし）さて其後これを山城の宇治に植ゑ、また仁和寺、醍醐、葉室、般若寺、神尾、大和の室生、伊賀の服部、伊勢の河上（一居駿河）の清光、武藏の河越などに移す、此等の地も皆その所を得て宇治、栂尾につゞきて上品の茶を出せり、然ども栂尾は稍に衰へ宇治は尤も盛ンにして舊幕府の頃は年々宇治より德川將軍家へ御茶壺を護送して納め（寛永九年（西紀千六百三十二年）始めて宇治茶を召す、爾後例となれりといふ）また諸大名へも茶を入れ、之によりて幕府もしくは大名より扶持せられ帶刀をも許されし家おはかりき、以て宇治の如何に世に重んぜられしかを知るを得ん而して茶の殊に世間の好遇を受しは後醍醐帝の御宇の頃（西紀千三百二十三年）より

ならん乎、當時玄惠法印始めて程朱の説を唱へし人にて後醍醐帝召して侍臣となす又藤氏の爲に是圓等と共に建武式目を作の著はしゝ喫茶往來あり、其中に收めたる文を見れば茶事の盛んなりし摸樣を知るゝなり、掃部氏消より彈正少弼某へ贈れる書簡に云前略抑彼會所、爲體內客殿懸珠簾、前大庭鋪玉沙、軒牽幕窓垂帷、好士漸來、會衆既集之後云々、亭主之息男獻茶菓、梅桃之若冠、通建盞、左提湯瓶、右曳茶筅、從上位至末座獻茶、次第不雜亂、茶雖無重請、敬數返之禮、酒雖用順點、未及一滴之飲、或四種十服之勝負、或都鄙善惡之批判、非啻催當座之興、又生前之活計何事如之下略この文にて茶會には筵席の修飾などに頗る華美を盡しゝこと、又この頃は既に茶式の備はりありしと又四種十服などいふ勝負の遊戲ありしこと及び批判品評をなしゝこと等明かなるべし、此後文明年間四紀千四百七八十年に及び足利義政東山に銀閣を起し薙髪して道慶と稱し且暮茶事に耽り南都稱名寺の僧珠光を聘して臺子の式など定めしめたるより彌よ茶事は流行して茶人と稱する茶事專門家さへ出來れるはそなれば製茶の業も頗る進みたり、爾來茶事は衰ふることなく信長、秀吉、家康みな此道を嗜み德川氏の治平の世となりては上下にわたりて流行し人の知らざるまじき社交上の一禮式の如くになりたれば茶業の隆盛推て知るべし、然るに茶湯の茶は濃茶薄茶ともに粉抹にして用ゐるものにて葉茶にては用ゐず、故に葉茶の製は抹茶の製はそれには進歩せざりしが其後また煎茶式といふもの起り文人墨客の間に一時盛んに行はれ專ら葉茶を賞翫せしより世人上製の葉茶を嗜愛するに至る、是より抹茶葉茶相並びて發達し年々精製佳良の上品を出すことゝなりぬ、然るにみならず、後世は薪木こる賤が伏家も藻汐たく蛋が苫屋も訪來る客には必ず一煎の茶を出すが世の習俗となりたれば茶といふものゝ國內に消費せらるゝ高は夥だしくして細かに算へなば計知れぬ程ならん況て今は外國輸出の事盛んになり其製法も舊時の他に新たに

加はれるが多く紅茶なども製出せられ年に月に茶業は盛運に赴き茶を産する所も次第に増加し隨ひて其製出高も増加して本邦物産中の重なるものに算へらるゝに至る、現時本邦にて製出する茶の種類の概畧を擧れば折物、玉露、薄茶、濃茶、飛出茶、晩茶、紅茶等なり

◉平等院（宇治町の東にあり）　初め河原左大臣融この地に別業を起し其薨去のち陽成天皇宇治院を設置したまひ、宇多、朱雀の二帝も亦これを離宮となし給ひぬ、然るに長徳年間（西紀九百九十餘年）關白藤原道長請て已が山莊となしゝが其子頼通に至り永承六年（西紀千一百年）三月遂に捨て寺となし號して平等院といふ、宗旨は天台にして三井寺に屬す、當寺の本殿は世に聞えたる鳳凰堂にして一昨明治廿六年北米シカゴの萬國大博覽會へも此堂の模形を出せり、屋上には翔舞するが如き雌雄の鳳凰を置く、銅製にして高さ凡そ三尺許、堂形も亦鳳凰の翼を張るに擬し、左右各々四間許の廊を通じて二閣を建つ、堂の扉の畫は當時の名手爲成の筆にして

びやうどうゐん

Byodo-in.

是亦有名の者なり、内に安置する阿彌陀佛は定朝の作なりといふ

因に云、太平記に建武三年正月字治へは楠判官正成向はる云々橘ノ小島、槙ノ島平等院のあたりを一字も殘さず燒拂ける程に魔風大厦に吹懸て宇治の平等院の佛閣寶藏忽ちに燒ける事こそ猿淺けれ云々と記したれどこの佛閣といふは奥堂のことにて鳳凰堂にはあらず、建武の合戰のはかにも此地は不幸にして荒けき軍兵の爲に幾度となく蹂躙せられ屢次兵燹に罹りしが何たる僥倖ぞこの鳳凰堂のみは其災を免れて今に存することを得たり

平等院の境内に入んとする左手に一基の石碑あり、此所を扇芝といふ昔し治承四年西紀千百八十年五月廿六日、源三位頼政、以仁王の令旨を奉じ兵を擧げて將に南都に走らんとす、る折しも官軍に攻められければ當院に陣して戰鬪をなしゝが軍利あらずして以仁王以下みな討亡ぼさる爰に於て頼政この所に坐し腰なる扇とり出して

埋れ木に花さく時はなかりしを身のなる果ぞわはれなりける

といふ一首の辭世を書付け遂に自盡して果ぬる處なり（或は云自盡せしは釣殿の中なりと）

過平等院

文武全才一世雄　白頭擧事戰功空

九原不起源三位　枯樹花開春寺風

齋藤拙堂

（玉葉）宇治平等院にて頼政卿が扇の芝もかやの花をみて

咲にはふ梢をとへは苔の下のその名も花にあらはれにけり

扇芝より少しく進めば右方の路傍に古風の建物あり、之を釣殿と稱す往昔頼通が此所に住ひしころ宇治川の岸に臨みて造りたりし遺物にして今を去る八百四十年餘の者なり幾多の星霜を歷て後は或は荒廢に任せ或は漁人の休處となりて誰一人顧みる者とてはなかりしが其後今の所に移し近來に及びて有志の者これが保存に意を注ひるに至れり

當院の鐘樓にかゝる鐘は本邦三鐘の一にして著名のものなり、世人の諺に銘は神護寺、音は園城寺、形は平等院といへり

什寶○藥師如來（寺傳三國傳來と云）○如意輪觀音○不動尊（共に寺傳興教大師作）○藥師十二神將（土佐光茂）

◉縣神社（平等院の後門の前、縣の森に在り）

祭るところ或は弓削道鏡の靈といひ或は惡左府頼長の靈といひて其實を詳かにせず（平野神社の本殿の南に縣の社といふあり其祭神は天穗日命なり、伊勢國鈴鹿郡に縣主の神社あり延喜式に載す、此は倭武命なるべし、縣主は日本武尊の後なりと姓氏錄に見えたればなり、愛なる祭神も或は此等の神にはあらざる乎）社字狹小なれども賽人つねに絶ず殊に愛嬌を守る神なりといふ俗說あるを以て遊女藝妓など多く參拜せり、六月五日の例祭には遠近より集ひ來りて群をなし京阪等よりも賽する者少なからず、社頭の熱鬧實に驚く許りなり、而して此祭は夜中に行はれ又互に口に任せて罵詈惡言を吐が例となりたれば喧噪もまた甚し

◎興正寺（宇治川の東岸に在）　佛德山と號する禪宗曹洞派の寺院なり、後深草天皇の建立にして道元和尚の開基に係る、然ども今の堂宇は永井直正（淀城主信濃守）の再建せし所にして本尊は一尺許の釋迦佛を安置し、文殊普賢をその脇士とす、門前凡そ二町許がはゞ左右みな櫻楓にして寺門に達すれば花木水石美はしく排置せられ且當寺は高處に在て後に山を負ひ前に宇治川の流を控へ風光清麗なり

◎朝日山（興正寺の後方に在）　權大納言公實卿が「麓をばうぢの川霧たちこめて雲井にみゆる朝日山かな」と詠ぜられしは實景にして宇治川の水煙糢糊たるところ旭光早く翠巒を照し來りて望見甚だ奇なり、山に登れば南方に當りて碧流に臨める一蒼丘を見ん、是なん源氏物語、椎の本の卷に「音羽の山ちかく風の音もいとひやゝかに槇の山邊もわづかに色つきて云々」と記されたる槇尾山にして景色頗るよし

朝朗まきの尾山は霧こめて宇治の川長舟よばふなり　土御門内府

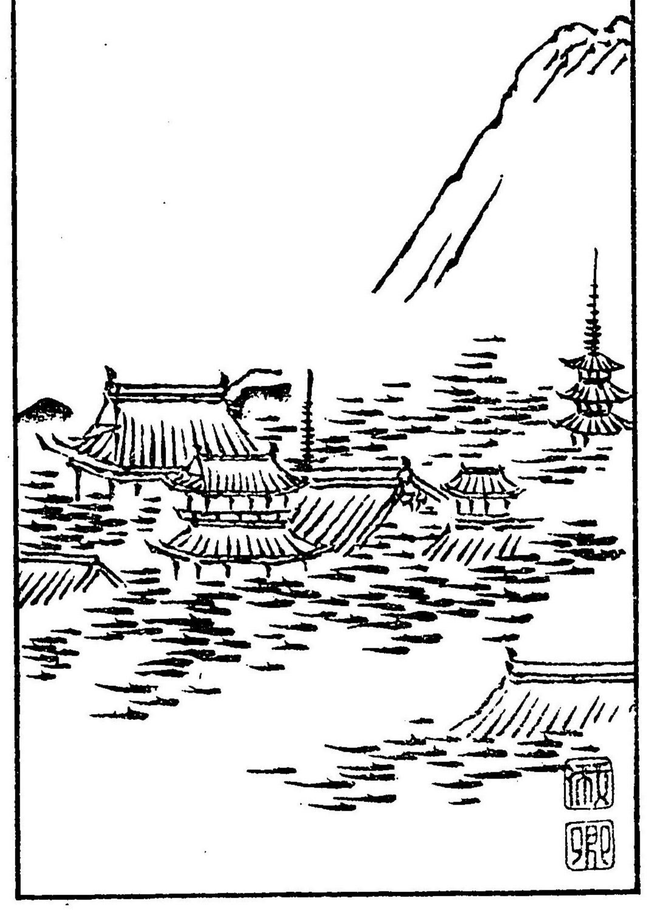
◎離宮八幡（橋寺の南、二町許にあり）　應神天皇、神功皇后及び姫神を祀る、又東の山麓に若宮あり菟道稚郎子を祀る、稚郎子は應神天皇第五の皇子なり天皇「崩御のゝち皇兄大鷦鷯皇子と互に天位を讓り給ひ自らは避て宇治山に閑居し給ふこと三年に及べども皇兄なほ天位に卽き給はざれば遂に自ら薨じ給ひぬ、斯る事のありつる地なるを以てこの社に離宮の名を負はせし者なるべし、而してこの御位讓の事は百世の美談として世人の夙に熟知する所なり、藤田東湖の詩あり云く

弟兄讓天位　藹然禮讓淳　慈愛及麋鹿　況復王畿民
三載免課役　四海服其仁　誰知聖帝德　淵源在魯論

◎黃檗山萬福寺（宇治村、菟道に在り、三條大橋より三里九町）　禪宗黃檗派の總本山にして開基を隱元和尚とす（和尚は明國福州の人にして姓は林、名は隆琦、隱元は其號なり、後水尾天皇の御宇勅して之を徵し承應三年始めて本邦に渡來し尋て京師に入り德川將軍に見ゆ、萬治三年公命に依て此地を賜ひ金錢巨萬を施し以て佛寺を造營せしむ）　伽藍の草創は寛文三年（西紀千六百六十三年）にしてその經營多く明風に摸し、また閩南の范道生

に命じて觀音佛、韋駄天、祖師監齋の像を造らしむ、寺域七万七千三百五十九坪に亘り、内に山門、天王殿、大雄寶殿、法堂、鼓樓、祖師堂、選佛場、鐘樓、伽藍堂、禪悅堂、牌堂、浴室、開山堂、壽藏、舍利殿、華嚴室等甍を並べ甚だ宏壯にして清美なり、建築その他目に觸るところ一種風趣を殊にして珍らしき心地す、また當寺に十二の勝景あり妙高峰、大吉峰、五雲峰、白雲岩、青龍澗、双鶴亭、三級池、龍目井、松隱堂、万松岡、中和井、東林院是なり、此内東林院は半里ばかり距りたる所にあれど他はみな境内にあり

◉御室戸寺（三室戸山の半腹にあり）　明星山と號す、宗旨は天台にして智證大師の開基せし者なるが中世衰微せしを三井寺の隆明和尚これを再興す、本尊は古へ笠取村炭山の麓なる岩洞の水底より現出せしものにて長さ八寸二分許なる二臂千手の閻浮檀金佛なり、本堂の西北に鎭守祠あり、神明、赤山權現及び淨明法師の靈を祀る、法師は江州三井寺の僧にして字治橋合戰のとき筒井淨明とて諸勢の目を驚かしゝ强の者なることは



うぢくさん
Wōbaku zan.

世の偏く知る所なり

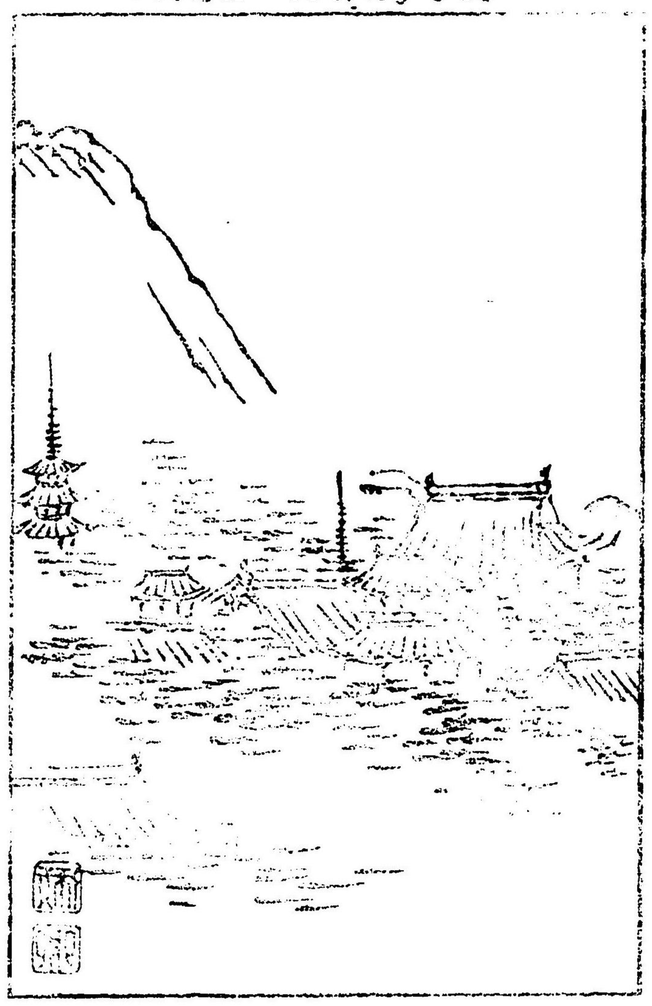
喜撰嶽は三室戸の東南三十餘町字池村の西に在り、山麓の溪を櫃河と名く、山上に岩洞あり内に石塔あれと銘文消磨して讀むべからず纔かに大同二年の四字を讀了するを得、絶頂樹木なく風威常に烈しくして自から塵をとゝめず眺望頗る宜し、わが庵は都のたつみしかぞ住む」と詠めりし喜撰は此山に住みたりけん、長明が無名抄に

三室戸の奥二十餘町ばかり山中へ入て宇治山の喜撰が住ける跡あり、家はなけれど室の石ずゑなどさだかにあり、これら必らず尋て見るべき事なり

と云へるは此山の事なり、又草庵集に、世中靜かならず侍し頃、三室戸の庵室にて

淋しさは忍ひてそせめいとひきて世を宇治山の峯の松風

とあるを見れば頓阿法師も此邊に閑居せしならんが、その舊趾は詳か



ならず

宇治山の喜撰が跡也といふ所にて人々吹よみけるる秋の夢なり　寂蓮

嵐ふく昔の庵のあとさえて月のみそすむ宇治の山もと

◉醍醐寺（醍醐村大字醍醐の山中にあり）　深雪山と號す、延喜四年（西紀九百四年）醍醐天皇の勅願により創建せし所にして開基は聖寶尊師なり、伽藍は山上と山麓との二所にありて一を上醍醐、一を下醍醐といふ、下醍醐には山門あり、本堂あり本尊は藥師佛にして日天、月天を脇士とし、又四天王をも安す、この堂は醍醐天皇の御遠忌に當り豊臣秀吉根來寺より移し建しものなり、本堂の東に開山堂あり弘法大師及び聖寶尊師の像を安置す、又本堂の東南に五層塔あり内に二十一体の畫像を掲ぐ、これ所謂説相曼荼羅なり

醍醐の山にのぼりて延喜の御願寺をがみてよみ侍ける　中原師季

名をとむるよゝは昔に絶ねども優れし跡をみるも畏こき

上醍醐は麓より登ること三十七町、坂路一町毎に石標を立つ觀音堂、五大堂、如意輪堂、祖師堂、藥師堂等あり、當山は古今集に忠岑が

雨ふれは笠取山のもみぢ葉はもきかふ人の袖さへそてる

と詠せし山にして古名笠取山なるが開祖聖寶尊師始めて當山に登りしとき谿に獨の老翁ありて泉水を嘗め醍醐の味なりと稱譽せしより寺號となし遂に山名にも及ぼせりとぞ、その清泉は今觀音堂の石階の下に在る閼伽井これなりといふ

三寶院は醍醐寺山門外の左方に在り、聖寶尊師の住房なり、本殿は慶長三年（西紀千五百九十八年）三月十五日豊太閤醍醐の花を賞せしとき修理せしめし舊蹟にして檜皮葺の門の扉には菊桐を刻し玄關、次の間、寢殿、奥殿等みな依然として當時の態を失はず壯殿美麗一々人の目を驚かせり、殊に庭園には奇木珍石を集めその排置頗る巧緻を極めたれば林泉の趣き口に言ひ能はざるの妙處あり就中池の邊なる藤戸石その名世に高

し此石は往昔備前の兒島なる藤戸にありし者にして（彼の源平の戰に佐々木盛綱が藤戸の淺瀨を土人に問ひその事の漏んことを懼れて斬捨たるはこの石上なりきといふ）織田信長、足利義昭の爲めに二條城を造營するとき遠く運搬して林泉の間に用ゐしを豐臣秀吉の時これを當寺に寄附せしものなり

山上に千墨敷と稱する所ありこれ豐公觀花の當時殿舍を設けし跡なりと傳ふ、此他なほ古蹟勝地甚だ多し

醍醐の花見けるに聖寶臺の前にやすらひして　光廣

めにあかぬ花のところとなかめまし心ちらすな春のやま風

◉勸修寺（山科村大字勸修寺に在）　延喜四年（西紀九百四年）醍醐天皇の母后胤子の本願に依て創建せし所にして開基は範俊僧正なり、本尊には天皇御等身の千手觀音の像を安置す、この寺むかしは殿堂伽藍ことゞく備はり頗る壯嚴美麗なりしが漸く衰退して遂に今の形態となれり、此寺も三寶院と等しく門跡號を有す

◉牛尾山（大津街道、道分の東二十町餘に在）　山城近江の國界をなせる山にして一名を音羽山と稱す、山中に寺あり、牛尾山法嚴寺といふ、本尊には天智天皇の御作なりといふ千手觀音を安じ、脇士には弘法大師の作と稱する不動、毘沙門の二像を置く、又た脇壇には弘法大師と行叡居士の像を安せり、抑も當寺は世人の清水寺の奥の院と呼ぶ者にして洛東清水寺の開祖延鎭居士の開基に係り往昔は倘四五町の山上に壯嚴なる伽藍あり山麓に大門ありしが中世大に衰へ今は形ばかりの本堂を存す、山中老杉森森として山氣膚に冷かなるを以て避暑に宜しく、櫻楓多きを以て春秋の遊覽によし、また堂後の山巔に登れば琵琶湖の景を双眸の間に集めて眺望頗る絶佳なり

登牛尾山

不知牛尾地　歩々轉山腰　秋葉依人落　宿雲隨杖消　竺常
艸深林有路　崖斷澗無橋　樹抄忽回首　梵宮倚碧霄

音羽山うの花垣におそさくら春と夏とやあふ坂のせき　慈鎭

當山に瀑布あり音羽瀧と稱す（清水寺に同名の瀧あり混ずべからず）寺にもく路を右に轉じ

溪水を渡りて進むなり、高さ凡そ三丈、濶さ一丈五尺許、翠崖素練を垂れ紫岩明珠を散す、この邊り閑寂にして俗塵に遠く自から心垢の濯るゝ思ひあり、今はこの瀑布を白糸瀧または布引瀧など稱すれど古くは皆おとはの瀧とのみ呼て古歌にも多く出たり、此瀧のほかに銚子瀧といふあり、又經岩蛇ヶ淵など云もあり

水上や雲井なるらんあまひこの音羽の瀧そ空に聞もる　行家

◉山科陵（大津街道、御陵村の内にあり）　天智天皇の山陵にして延喜式に兆域東西十四町南北十四町、陵戸六烟とある是なり、舊は陵上に八角形の廟堂ありしなりこの近邊をすべて御廟野と稱す、然るに其廟は應仁の兵燹に燒失して今は只その礎形を存せるのみ、天智帝は鎌足と共に擅横を極めし入鹿を誅戮し孝德帝を助けて大化の革新を行ひ給へるを以て中興の君と仰ぎ奉る御門にしあれば當陵は殊に朝廷にても重んぜられ十陵の中なるは固より論なく他の陵は御代によりて變更もあれど此山階の陵のみは永世十陵の中より除かるゝことなく往昔は荷前の使として十二月吉日を撰びて十陵八墓に幣帛を奉らせ給へるに先この陵を第一とは爲給ひぬ

安祥寺は山科村字藪の下に在り、吉祥山と號す、本堂には十一面觀音及び五智如來を安置し地藏堂には惠運僧都が唐土より持來りし延命地藏を本尊とし開山堂には惠運及び宗意兩僧の像を置けり、彼の伊勢物語に

昔、田村の帝（文德天皇）と申すみかどおはしましけり、その時の女御、たかき子（右大臣藤原良相の女）とまをすいまそかりけり、それうせ給ひて後の御わざ安祥寺にて三月のつごもりにしけり、人々さゝげもの奉りけり、奉り集めたるもの千捧ばかりありけり、そこばくのさゝげものを、木の枝につけて堂前に立たれば山もさらに堂前に動き出たるやうになん見えける云々

とある安祥寺は卽ち當寺にして其創建は五條后順子なるを以て藤原家の全盛と共に一時は全盛なりし著名の寺院なりき、その隆盛の時は北方十餘町の山上檀の谷といふ地に在りしが後やゝに衰微して南西三町許の地に遷り終に又この處に徙れるなりといふ

附錄　近江

◉三保崎疏水口　三保崎は近江國大津町の東北に在り疏水は此所より琵琶湖の水をひき三井寺山麓の隧道に注げり、三保崎の端は湖上に突出し三面ひらけて眺望佳し、前には水を隔てゝ近江富士を雲烟の間に望み左顧すれば比良の高峰白を頂きて空に聳え下には長江碧を湛へて渺々たり、後方の翠丘に陰顯する殿堂は三井寺にして北方遙かに湖に沿て一簇黑く見ゆるは世に名高き唐崎の松なり、其又むかふに少しく岸を離れて亭榭の如きものゝ水上にあるは堅田の浮御堂なり、總じて此邊は名勝おはし、近傍の名勝を探り日暮三保崎より舟にて疏水に泛び水道の景を眺めつゝ京都に歸らば甚だ便にして興あり

附言　疏水口を見んとて琵琶湖にもくには往を陸にとり歸を舟によるを可とす（人力車及び疏水舟賃錢路順は第五編に委し）

經て日岡の坂をこゆ御廟野にいたれば左方に小松の並植りたる一路あり是天智帝の御陵の路にして北方なる山腰に見ゆる茂たる森はその陵なり、此所をすぎ追分を過ぎ山科村に到れば停車場あり（東國道なる大谷停車場へ三哩廿七鎖、西國道なる稻荷停車場へ三哩一鎖）此より進みて漸く逢坂山にかゝる、逢坂山は古來有名の地にして東國の要衝なれば桓武天皇平安城遷都の當時こゝに關所を置きたまふ（伊勢國鈴鹿山、美濃國不破、近江國逢坂に關所ありて之を三關と稱せり）古歌ども此關を多く詠り「しひてやは猶もきすぎぬ逢坂の關のわらやの秋の夕風」また「逢坂の關には人もなかりけり岩間の水のもるに

まかせて然ど今は關もなく險路の坦げられ昔時とは甚く異なりぬ坂を大津のかたへ下る途中の左方に蟬丸神社といふがあり、此は人皆の知る「これやこの行も歸るも別れても知るもしらぬも逢坂の關」といふ蟬丸が歌に因みて此所に社を營めるなるべし（此歌後撰集に出でその詞書に、逢坂の關に庵室を作りて住侍りけるに行かふ人を見て」とあれば蟬丸こゝに住たるは定かなれど今の社はその跡なりやそは知り難し、昔この社を關の明神とも稱し古くよりありしも出たり）當社の前を過れば大津町なり、町に入ば十字街頭に中央里程表あり其所を右に往ば石山及び勢多橋にいたり、左に折れば三井寺程近し先ッ三井寺に登り北に下れば則ち三保崎疏水口なり

◉三井寺（大津町の西北に在）　長等山園城寺と號す、天安二年（西紀八百五十八年）僧圓珍（延長五年）智證大師の勅を奉じて建立する所にして天台宗なり（草創は天安より百八十餘年の昔にあり）始め弘文帝一寺を建立せんと欲し果さずして崩じ給へるを大友與多王その遺志を繼て建立せし者なりといふ、即ち園城寺と稱するは大友氏の莊園の地に建たるが故の名にして三井寺と號するは寺の西に井泉あり俗呼で御井といひ寺を稱して御井寺ともいひしを圓珍三帝湯沐のことを聞て御井を三に改めたりと或記に見ゆ往昔は八百五十九坊を有しその勢威は延曆寺に比抗せり、而して互ひに武器を蓄へしば〳〵兵仗を動かし或は堂宇を燒き或は殺戮を縱まゝにして佛域を修羅場に變せしめしこと其幾回なるを知らず、之がために輪奐の美も金碧の煌きも次第に消滅して遂に今日の景狀とはなりぬ、然ど山光水色は依然として變らず、石磴を攀て寺境にのぼり堂前に立ば天然の畫圖目前に展かる、遠峰は紫色を帶び近山は翠綠を含み湖面は藍靛を鋪き白く帆影を撒布す造化の設色極めて巧妙なり

堂の左の小丘に明治十年の役に大津分營の兵の戰沒せし者の爲に建たる紀念碑あり（紀念碑といふ三字は陸軍中將三好重臣の書、右の文は當時縣令籠手田安定、左の文は陸軍中佐山口素臣なり）明治十一年十月天皇北陸巡幸の途次蹕を此に駐めさせ給ひしより御幸山と稱せり、金堂の南に古鐘堂あり此鐘は傳へて田原藤太秀郷の龍宮より得たる十種の寶の一といふ所の者なり（古事談に昔し大津に粟津冠者といふ人あり武男勝

れ江上に一寺を建立し江廣寺と名づけ此寺の鐘を作らん爲め銅鐵を求んも欲し西海に赴きたるに圖らずも龍宮にゆき龍神の依頼により惡龍を射殺しその報酬にもらひ受て持歸れる者なるが其江廣寺廢してのち三井寺に納むとあり、秀郷の談と似たる話なり、此鐘は高さ五尺五寸、厚さ三寸五分、口徑四尺一寸、龍頭一尺一寸五分なり、嘗て山門の僧徒この鐘を奪去り無動寺谷に轉落して破碎せしを後に取戻して補ひたりといふ、其故にや今現に瑕あり　別にまた鐘樓あり、之は慶長七年四月照高院道澄の寄附せし所なり、當寺の鐘は三井の晩鐘とて近江八景の一ッにも數へられてその名高くして詩歌に多く吟咏せられたり

さゝ浪や三井のふるてら鐘はあれど　昔にかへる聲もきこえず

定圓　合離

登園城寺

廢宮花可賞　古寺月相從　天濶北低浦　地回東接峰
名傳三井水　聲斷一樓鐘　記得荒都詠　平波抱舊踪

◉唐崎の松　大津より北一里、下坂本村の東端字唐崎に在　此松は世に聞えたる名高きものなるが其始を詳かにせず、一説には舒明天皇の世（西紀六百三十餘年）に始めて植たりといひ（琴御館宇志丸もいふ常陸國鹿島より上洛して此地に住せしが其庭前に植し松にて初めは軒端の松と稱せしもぞ）又天智天皇の時（西紀六百六十餘年）に栽る所なりともいふ、然るその最初の松は朽く失て今のゝは遙か後に植たるものなることは此彼の記錄によりて明かなり、青蓮院尊朝親王の唐崎松記に云く

此松はいつぞやの大風に倒れて形ばかりも殘らず侍れば御幸の神威も事絶ぬるやうに世にも言合り爰に新莊駿河守直賴とて文武の士あり五常も自ら備へたる人なり然ばにや大津の城郭を預け給ふ其側に松庵雜齋とて二人あり、此主の後見にて相副れしが彼の松の事をり〳〵悔て弟の雜齋いで栽んとて家中の者にいひて風情ある松をと尋られしに辛うして掘求め栽られ周りに垣を結ひ如何樣にもげに〳〵しければ往來の人も目留ぬは少なし、時に天正十九年（西紀千五百九十一年）卯歲の秋の末なりと

此他になほ說はあれど今の松の天正年間に植たりしものなることは

違はず（今を去る凡そ三百餘年前）今のもの昔のものならずと雖も是もまた稀世の名木にして老幹四方に盤亘して翠蓋地を掩ふこと百餘坪に及べり

唐崎やかすかに見もる眞砂ちにまがふ色なき一松かな　從二位爲子

唐崎浦　合離

雨霽唐崎夜　驚濤激偃松　湖心探明月　下有未眠龍

◉石山寺（石山村大字寺邊に在り）　天平勝寶年中（西紀七百五十餘年）の創建にして開基は良辨僧正なり（宗旨は眞言宗）始めの伽藍は承暦二年（西紀千七十八年）二月燒亡して其後は久しく荒廢の狀形なりしが建久年間に至り源頼朝これを再興して稍や舊觀に復す、斯てまた歳月を歴るに從ひまた衰頽せしを豊臣秀吉の側室淀君ふかく當寺を崇信して莊園を復し堂宇を建立す、現在する所のもの即ち是なり、當山は石山の名に背かず怪石奇巖にて滿され或は起ち或は伏し或は躍り或は舞ふが如くその狀萬態なり、深草の元政いはく「凡そ石山は石を以て名あり石の奇なる復た名く可らず、この山石を以て顯はれず而して石を以て顯はれ圓通大士の靈應を以て高し（草山集）本堂の右方なる石階を上りて崖頭にもけば亭あり觀月亭と稱す、湖上の眺望頗る佳し月夜は殊に宜し

石山賞月　武村森

古木回巖烏鵲啼　月明樓閣影高低
憑欄秋思共誰語　水遠山長吟望迷

都にも人やまつらん石山の峯にのこれる秋のよの月　長能

往昔こゝに字多法皇の臨幸數回あり、また有名なる源氏物語は紫式部この寺に留てゝ通夜しけるに折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物語の風情心にうかび出ければ先ッ須磨、明石両卷を書といひたりといひ（明星抄、河海抄などの既にして當寺に亦源氏の間、紫星、河海の說も亦誤なることは宜長その他の學者も既に辯ぜり）然ど此等はみな好事者の作意より後世道出せる者にて明（あり）（觀月亭の北に）其墓さへあり）右大將道綱の母のこゝに籠れる事もあり、その記せる蜻蛉日記に

石山に十日ばかりと思ひ立つ（中略）夜になりて浴なぞものして御堂にのぼる云々夜うち更て外の方を見出したれば堂は高くて下は谷と見ゆたり云々廿日月夜更ていと明るければ木影にもりて所々に前方ぞ見えわたりたる、見下したれば麓にある湖は鏡のごと見えたり

◉近江八景　琵琶湖の風景は古來人の歎賞する所なるが明應九年（西紀千百年）八月十三日近衛政家、佐々木高賴等の招請によりて江州に遊覽し支那の瀟湘の八景（江天暮雪、瀟湘夜雨、山市晴嵐、遠浦歸帆、煙寺晚鐘、平沙落雁、漁村夕照、洞庭秋月）に擬ひて湖上の八勝を歌に詠ず、是より近江八景の名世に高し、今その八勝の所在及び歌詩を左に列記す（時は相國寺林長老の作）

比良の暮雪（比叡山の北に在て高く聳ゆ、山麓木戸村大字八屋戸より山頂まで一里十五町、直立二千八百八十尺、近江第一の高峯にして雪景を以て聞こえ又櫻に名あり）

雪はるゝ比良の高根のもふくれは花の盛にすくるころ哉　比良、嶺雪暮紅寒

輕舟短棹與何盡、莫作剡溪一樣看

唐崎の夜雨（前に委し）

瀲灩湖光朝露晴、玲瓏山色暮雲横、唐崎一夜摸稜手、半作松風半雨聲

粟津の晴嵐（膳所村より勢田橋までの松原を粟津ヶ原といふ寿永三年木曾義仲、範頼及び義經と戰ひて亡されしはこの所なり）

雲はらふ嵐につれてもゝ船も千ふねも涙の粟津にそよる

嵐度粟津春興長、吹霞吹雨似相狂、山花片々一蘆涙、湖上閑鷗夢亦香

矢橋の歸帆（草津の西一里許にある船なり、大津波止場まで湖上凡そ一里半）

眞帆ひきて矢橋に歸る舟はいま打出の濱をあとの追風

釣竿手熟白頭翁、辛苦客船西又東、幾度風帆歸去後、呂公榮達一盃中

三井の晚鐘（前に委し）

おもふその曉近きはしめそとまつさく三井の入相の鐘

湖面朦朧畫不成　昏鯨高響出園城

霞間好是客船月　十倍楓橋半夜聲

堅田落雁　堅田村は大津町より北三里五町に在、湖岸より十四五間許り突出して水上に堂宇あり、之を浮御堂と稱し慈心僧都の草創にて海門山滿月寺と稱し内に慈心の作れる彌陀、豐聰耳皇子の作れる觀世音を安ず堂宇頗る雅趣にして風光亦絶佳なり

峰あまたこえて越路にまづちかき

かた田になびき落るかりかね

鴻雁幾行更不孤　晚風帶月落東湖

囊沙背水堅田浦　猶見孔明八陣圖

勢多夕照　勢多川は滋賀粟田の郡界を流る、之に架せる橋を唐橋と稱しまた青柳橋、とゝろき橋、勢多の長橋なども稱して古來著名なる橋なり川の中央に島ありて大小二橋かゝれり、大は長さ九十六間、小は長さ二十三間、この邊り山水秀麗にして橋上の眺望頗るよし

露しくれもりやまとはくすき來つゝ夕日の渡る勢多の長橋

沙鳥風帆帶夕陽　夕陽人影與橋長

勢田曉鐘東山月　一色江天兩景光

石山秋月　前に委し

石山や鴉の海てる月影は明石も須磨も外ならぬかは

秋風蕭颯一天涯　霜滿四山不帶霞

古木回岸寒月影　吟殘葉々霧中花

美術師人名索引（陶工は各陶器の下に併記せしが故に先づ陶名を擧て其下に工名を記せり、又支那畫人は索引の中に加へず）

〔い〕（畫）祐高 二九四丁 ○一之 二九五丁 ○祐宣 同上 ○一休和尚 二九六丁 ○友松 二九七丁 ○友雪 同上
○岩佐又兵衛 同上
（彫）一宮長常 三百三二 ○岩本良寛 三百三三 ○石川龍右衛門 同上
（漆）飯塚桃葉 三百五〇 ○生嶋藤七 同上
（陶）犬山燒 三百五九 ○出雲燒 楯兵衛、中三百六、善四郎六〇
〔ろ〕（畫）蘆雪 二九八丁
〔は〕（畫）原在中 二九八丁 ○英一蝶 二九九丁 ○抱一 三百丁
（彫）春若 三百三四
（漆）羽田五郎 三百五一 ○破立 同上
（陶）破風 三百六一 ○萬古燒 沼浪五左衛門、同有節上 ○萩燒 三百六二
〔ほ〕（畫）如雪 三百丁 ○忍海 三百一丁
（漆）二宮桃亭 三百五一

(は)(畫)北齋 三二丁
(彫)細川政守 三三四
(漆)本阿彌光悅 三五一
(と)(畫)土佐家 基光、隆能、光長、經隆、吉光、行光、行秀、光信、光起 三二丁○屠龍 三四丁
(彫)德若忠政 三三四
(陶)豐助樂 三二六○常滑燒 三六三
(ち)(畫)珍海 三五丁○仲安 三五丁
(彫)定朝 三三四○長勢 同上○陳和卿 三五三
(り)(畫)良圓 三五丁○良全法印 三六丁
(を)(畫)小野篁 三六丁
(彫)小笠原一齋 三五三
(漆)緒方光琳 三五二
(陶)尾張新製 加藤民吉、淵吉 三六三

(か)(畫)狩野家 正信、元信、永德、山樂、探幽、信政、尚信、洞雲、常信、永納、勝川 三六丁○覺猷 三一○○豪信 同上○覺鑑 同上○可翁 三一
(彫)康尚 三五○覺助 同上○康圓 同上○康猶 三六○上総介親信 同上○河內大椽 一
(漆)梶川久次郎 三五二○覺々齋長寬 三五三
(陶)唐津燒 神瑞 三六四
(よ)(彫)横谷宗與 三六○横谷宗珉 同上○吉重五郎作 三七
(漆)良直 三五三○吉長 同上
(た)(畫)宅磨爲氏 爲成、爲遠、爲久、爲行、澄賀、良賀 三一○大雅堂 三二
(彫)高男曆 三七○湛慶 同上
(漆)玉楮象谷 三五三
(陶)高取燒 陶工八藏、八郎右衛門 三六六
(そ)(畫)曾我蛇足 三三○曾我蕭白 同上○宗丹 三四

(漆)宗哲 五三百四

〔つ〕(漆)堆朱平十郎 五三百四

〔な〕(彫)奈良宗貞 三三百八 ○奈良利壽 上同 ○奈良乘意 上同

(漆)永田友治 五三百五 ○中山胡民 上同

〔ら〕(陶)樂燒 長祐、常慶、道入、一入、宗入、左入、長入、得入、了入、且入、六七三百

〔ひ〕(彫)村上如竹 三三百八

〔う〕(畫)雲谷等顏 一三百四

(彫)運慶 三三百八 ○埋忠重吉 三三百九

〔ね〕(彫)院助 三三百九

(漆)井上白齋 五三百五

〔の〕(畫)信實 一三百五 ○能阿彌 上同

〔お〕應擧 一三百六

(陶)御深井 六三百八 ○織部 上同 ○大河內燒 六三百九 ○大師燒 上同

〔く〕(畫)空海 十三百六 ○空光 一三百七 ○觀盛 上同 ○光悅 上同 ○光琳 一三百八

(彫)鞍作鳥 三三百九 ○國中連公麿 上同 ○觀喜 四三百〇 ○會理阿闍梨 上同 ○快慶 上同

(陶)九谷燒 傳右衞門、八郎右衞門、大藏清七、莊三、友三 三百七〇

〔や〕(彫)大和眞盛 四三百〇 ○柳川直改 上同

(陶)八代燒 尊碧 三百七一

〔ま〕(彫)增田宗次 四三百一

(陶)眞中古二世藤四郎 三百七二

〔け〕(畫)源琦 一三百八 ○月僊 上同 ○景文 上同 ○啓書記 一三百九

(彫)稽文勳 四三百一

(陶)乾山燒 七三百二 ○乾也燒 七三百三

〔ふ〕(畫)文晁 一三百九 ○蕪村 上同

(漆)重藤藤嚴 五三百五

〔こ〕(畫)巨勢家 金岡、相見、公忠、公望、深江、弘高、是重、金持 三百二〇 ○古澗 三百二一 ○吳春 上同

(彫)後藤祐乘 宗乘、乘眞、光乘、德乘、榮乘、顯乘、即乘、程乘 三百 四一
(漆)古滿休伯 三百 五五
(陶)古瀬戸 加藤四郎左衛門 三百 七三
(え)(陶)永樂燒 三百 七三
(て)(畫)兆殿司 三百 二二
(彫)出目洞白 三百 四二
(あ)(畫)粟田口法眼 三百 二二
(彫)漢山口直大口(あやのやまくちのあたへおほくち) 三百 四二 ○近江昌滿 三百 四三
(漆)青貝長兵衛 三百 五六
(陶)淡路燒 加藤琪平 三百 七四 ○有田燒 李祭平、東鳴德左衛門、辻喜左衛門、辻勝造 三百 七四 ○粟田燒 三百 七六
(さ)(畫)淇園 三百 二三
(彫)行基 三百 四三
(陶)京燒 仁清 三百 七七 ○清水燒 三百 七八 ○紀州燒 同 ○金花山 同
(み)(彫)明珍宗助 三百 四三 ○茗荷屋清七 三百 四四 ○眠江 同
(陶)美濃燒 三百 七八
(し)(畫)如雪 三百 二三 ○周文 同 ○若冲 三百 二四
(彫)志古磨 三百 四四 ○淨阿彌 同 ○若芝喜右衛門 同 ○周山 三百 四五
(漆)春慶 三百 五七 ○珠光 同 ○春正 同 ○鹽見小兵衛 同
(陶)志野 三百 七九 ○信樂燒 同 ○白石燒 三百 八〇
(ゑ)(畫)惠心 三百 二五
(彫)圓快 三百 四五
(ひ)(畫)飛彈守維久 三百 二五
(彫)左甚五郎 三百 四五 ○雛屋立甫 三百 四六

(陶)備前燒　三日月六兵衛　三百八〇
(彫)元利榮滿　三百四六
(漆)門入　三百五七
(せ)(畫)雪舟　三百二五〇
(彫)是閑吉滿　三百四六〇
(漆)關宗長　三百五八〇
(す)(畫)住吉家　慶恩、廣通、廣澄、弘貫　三百二六
(漆)鈴木庄左衛門　三百五八
追遙軒　三百二六
清兵衛　上同
青海勘七　上同

かやうと

第四編　美術の栞

◉繪畫諸名家畧傳　附支那畫歷代人名日支洋年代對照

本邦畫家の祖とも稱すべきは大岡氏とす、其祖男龍一に畫を善せしを以て、武烈帝より首の姓を賜ひ、天智帝の御宇にその五世の孫惠尊また畫に巧なるを以て倭畫師の姓を賜ひ、稱德帝の神護景雲三年（西紀七百六十九年）に至り其裔の居る所の名によりて大岡忌寸の姓を賜ふ、武烈帝より稱德に至るまで廿三朝みな畫を以て仕ふ、其間子孫宗族に名手の者多しと雖も年を歷ること久しきに過ぎ其跡の傳はらざるは惜むべきことなり、大岡氏の他にも其跡を止めずして其名を史乘に遺しし者少なからず、最古には因斯羅我、百加、曇徵（第一編美術小談を參見すべし）降て孝德帝の頃に至ては狛堅部子麿、鮒魚戸直（共に佛畫に其名高し白雉四年二人勅を奉じて多く佛菩

薩の像を爲し之を川原寺に安置せりと云ふ　天武帝の御時に倭畫師音檮（畫を善するを以て小山下位を授けら）る　聖武帝の朝に楯戸辨麿、孝謙帝の御代に河内畫師祖父麿等みな其名存して其跡なき者なり、平安遷都以來の名畫はその古きものにして幸ひに亡滅を免れ今なほ存する者あり、其稀にだに存する者は悉く收めて次に列記す、之を列記するに伊呂波の順に從へり（此他の諸家の作も皆同じ）然ぞその落欵一樣ならず姓と名とを書するあり、又姓と官名とを書し、官名と名とを書したるものあり或は號のみなるもあり、故に主として名をとりて掲げ世間の人口に膾炙する者のみは號若くは官名等を用ゐたり、例へば兆殿司（兆は名の明兆を畧したる者殿司は僧の役名なり）粟田口法眼（粟田口は姓、法眼は官名なり、實名は隆光と云ふ）飛彈守維久（飛彈守は官名維久は名なり）雪舟（雪舟は號にして名は等楊なり）等の如し

（い）祐高　南都の繪師にして北朝後圓融帝の時（西紀千三百七十年頃）法眼に叙せらる、嘗て畫所預大藏少輔行忠、繪師采女正中務少輔久行、大進法眼等と共に高野大師の行狀圖を畫き、六年にして成就す、その名世に聞えたり

○一之　正平の頃（西紀千三百六十年代）の僧にして一に江藏主と稱す、畫法を明光に學び能く佛、僧及び人物を寫し最も墨畫に長せり、筆力秀潤にして風致あり

○祐宜　智積院第二世の祖にして眞言宗の碩學なり、暇日丹青を好み墨畫を善す、雪舟の筆法を學ひて其眞趣を得たり、然ぞ畫はその重んずる所にあらず、祐宜幼より勤行苦學し行錬れ學成るに及ては恒に法鼓を鳴し來學を接引し時に景從の徒を策して曰く「我聞く學は勤苦に精しく行は修錬に成る必しも黠慧に在らず、我もと性魯鈍なり少時鄉に在りて論席にもさ毎に同輩の屈する所となる、一日父わが屈することを聞き大に怒て刄を持し余を逐て曰く生て屈辱を受るは早く死するに如ずと、我避て逃れいで之より勤學懈らず、晝勵夕惕し根嶺より歸るに及びて則ち昔の吾を屈する所の者みな來て誨を受け一も抗衡するなし豈

稽古の力ならずや旃を勉めよ」と、以て祐宜が人と成の梗概を窺ふを得ん、その畫の高雅眞妙なるは彼が英風おのづから紙面に映寫するが故なるべし、慶長九年（西紀千六百四年）十二月勅を奉じて僧正に任じ同十七年十一月十一日早晨浴室に入り自ら淨髮し訖りて浴槽中に跏趺して化す壽七十七

○一休和尚　紫野大德寺四十八世の住僧にして名を宗純といひ（一休は字なり）號を狂雲子、夢閨、驢驢、國景等なを稱せり、幼にして出家し大德寺華叟宗曇の弟子となり遂に知識高德の譽を得、その性磊落にして非凡の行爲おはし、故に畫も亦逸狂にして粗なり、然も氣象幽閑にして清趣あり、又好んで其畫に自ら賛す、而して多くは語意を轉じて懸隔の事を書し輕快不適の賛をつくり相應實體なるもの甚だ稀なり、是この和尚の風骨にして亦その人物の筆にあらはるゝ所なり、文明十三年（西紀千四百八十一年）十一月年八十八にして寂す

○友松　姓は海北名は紹益、友松はその號なり、江州堅田の人にて初め狩野永德に隨ひてその畫風を受け後朝鮮に航して宋人梁楷の筆意を學び歸朝して遂に一機軸を出し、その畫世に愛重せらる、後陽成帝未だ踐祚し給はざりし時（西紀千五百七八十年頃）友松を召して畫法を問給へり、故に間々宸筆の賛あるものありといふ、又當時故ありて墨龍を畫き之を朝鮮國王に贈りしに王書を寄せて稱譽せり

○友雪　友松の男にして名は道暉、友雪はその號なりまた落款に道暉齋と書せしものあり、父の業を嗣て家聲を墜さず、畫法その初めは父に倣ひしが後には之を改めて狩野の正風に復せり、洛東淸水寺の樓觀に掲ぐる所の田村丸緣起の大圖は友雪の筆にして當時その名聲を博せり

○岩佐又兵衞　元和ごろ（西紀千六百餘年）の人にして荒木攝津守村重の子なりといふ、父村重織田信長の命に背きて自殺せしとき二歳にして乳母に誘はれて命を全うし越前の岩佐氏に育はれしを以てその氏を冒すとか

や、慶長年中京都に出て土佐光則の門に入て學び後一家を成し能く當時の風俗を寫す、其筆意精緻にして極めて艶麗なり、時人これを浮世繪と稱す、故に岩佐又兵衛を以て浮世繪の祖と仰げり

(ろ)蘆雪　姓は長澤、名は魚、字は冰計、蘆雪はその號なり、城州淀の藩士にして畫を善す、圓山應擧に就て學びその門の巨擘と呼れしが更に一格の新意を出し精粗両ながら妙を得、その畫くところ緻密のものに至ては肉眼の能く認識し難きあり、其洒落のものに至ては淡坦として風致あり、天この名手を惜まざりしか齢僅に四十五にして寛政十一年（西紀千七百九十九年）六月八日世を辭す、子あり蘆洲といふ（名は麟字は呑江）亦畫を能し巧に圓山風を寫せり

(は)原在中　原は姓、在中は號なり、名は致遠字は子重また臥遊の號あり、京師の畫家にして文政の頃（西紀千八百餘年代）の人なり山水花鳥を能くし又有職の畫を能くす、その着色精密にして頗る美麗なり、當時名手と稱せらる、

○英一蝶　姓は多賀、名は安雄、字は君受、號を蕉翠翁、牛丸、舊斗堂、一蜂閑人、隣樵庵、鄰濤庵、曉雲、六巣、澗雪、寶蕉、和央（一に廻作る）雲堂など稱ふ、畫を狩野安信を學びて狩野信香（或は云安雄）と稱し年久しして遂に妙手に達る、人物花鳥を善し又戲畫を巧にして往々人の頤を解く、一蝶の畫風斯の如きを以て或は浮世繪の評を下す者あれど其實は狩野家の正風にして時に戲畫を描き出すのみ、元祿年間佛像師村田民部と謀りて戲に當世百人首一卷を著し執政者を誹れるものと認められ其十一年（西紀千六百九十八年）三宅島に流されて謫居十二年を歷、一蝶性至孝にして恒に母を思ひ母に不自由あらせじと已が不自由を忘れ僅かに島中の石土木皮を索めて繪具を製し之を用ゐ畫を作りて母に送り以て衣食の資に給す世これを島一蝶と稱して特に賞翫す寶永六年（西紀千七百九年）赦に遇て東都に歸りしが其赦に遇るとき會ま一蝶草花のうへに止る之を見て頓て姓を英と改め名を一蝶と呼しといふ

○抱一　姓は酒井、名は忠因、酒井雅樂頭宗雄の弟なり、天資多病なるを以て出家し西本願寺文如上人の養子となりて等覺院權大僧都に任せられしが尋で寺務を捨て隱居し東都に歸りて根岸の鶯村に住す室を兩華菴と号し又輕擧道人、庭柏子、鶯村などの號あり（通稱は屠龍）幼年の頃より畫を好み初めは兄宗雄に學び後に狩野永德の門に入り、其後京師に上りて土佐光貞に畫法を受く、是より狩野の風をすて土佐を慕ひ又應瑞の門に入て應擧を追慕し深く寫生を研究す、斯く轉々諸家に就て學び彌果に光琳の畫風を悅び遂にその風に變じ晩年に至りて彌よ精妙を極む（享和年間西紀千八百年の頃）の人なり

（に）如雪　有名なる畫僧にして本は明人なり應永中（西紀千三百九十年代）九州に來り後に京師に出て畫を明兆に學び、終に妙手となる、山水人物花鳥を善くし其畫く、ところ南宋の馬遠、夏珪、牧溪、玉澗及び元の顏暉の風あり當時本邦の畫師にして未だ能く宗、元の風を學びたるものなし如雪始めて之を能くす、前に祥啓、明兆ありて、漢畫を唱へしと雖もその主とする所佛畫なるを以て周文以後雪舟狩野等の漢畫に依て各その畫風を立るに至りしは全く如雪の恩賚といふべし

○忍海　字を海雲といひ江戸の人なり、その貌美にして性葷酒を惡む、幼稚の頃より嬉戲恒に畫を嗜み長ずるに及て益す甚だしかりければ父これを畫師某に就て學ばしむ、某に女ありて姿樣美にして艶なりしが忍海を視て心に悅び愛慕止めがたく人をして數回艶書を贈りて殷勤を通せしめしに忍海肯んせざりしかば女自らその指を割き艶書に併せて贈る、然るになほ顧みずして之を地に擲つ、女怨恨の餘り病で遂に死たりしが其後夜々閑坐する毎に女恍惚として目前にあらはる、忍海これを患ひ且その愛欲の苦報を憐み出家行道の志を發して父母に請ども許されず潛かに遁れて三緣山（芝の增上寺）に登り鐵舟和尙の室に詣りて剃髮す爾後勉學勤行怠らず遂に碩德の名を得るに至り、延享中（西紀千七

百四十餘年、寶松院に住せしが修道の暇丹青を善し最も佛畫に妙を得たり

(ほ)北齋　天保年中（西紀千八百三十年代）の名畫工にして江戸（今の東京）の本所の人なり姓は中島なれど後に葛飾と稱せり、初め浮世繪を勝川春章に學び春朝と號し錦繪を畫きしが後に破門せられて古今諸名家の遺蹟を慕ひ又西洋の畫風をとり遂に一家を成して其名大に世に知らる、其畫く所の宮殿樓閣、有職、衣冠の人物及び山水花卉鳥獸に至るまで悉く眞を寫す、其筆力遒勁にして意匠斬新なり、又狂畫を巧にす、その著す所の畫譜の類多くして其中最も名高きは北齋漫畫なり

(と)土佐家　藤原基光を以て祖とす、始めは春日と稱せしが經隆土佐權守に任せられし以來累代多くは土佐を官とするが故に其家土佐を以て稱するに至る、基光このかた後嵯の連續すること殆んど九百年、その間俊傑交々出て能く家聲を墜さず、其畫風は纖麗にして都雅なり、多くは皆彩畫金碧を施せり

基光　堀川帝の時（西紀千八百九十年頃）の人にして初めの名は盛光といふ、巨勢金持より畫傳を受て佛畫を巧にし終に一家を成す、南都東大寺に住し春日を以て稱す、其蹟世に傳ふるもの少しと雖も相撲の畫及三尊來迎の圖等あり、精緻雄勢の筆力を後代に示せり

隆能　鳥羽帝の御世（西紀千百年代）の名工にして正五位下主殿頭に叙し畫所の職を襲ふ、畫法妙を得て此頃より土佐流の畫風起り物語繪起等日本畫の眞相を見るべき者この人に始るといふ

光長　土佐氏の第四世にして高倉帝のころ（西紀千百七十年代）の人なり、所預となり從四位下に叙せらる、畫法を父隆親に學びて巧に佛像を畫く而して繪足れりもせず益々研究して遂に紗手となり和畫五筆の中に算へらる、其畫く所の年中行事六十卷の如きは本邦歷史畫の上乘といふべし（五筆は光長、光信、光起の三人をいふ、三筆は光長、慶圓、吉光、行光、行秀の五人をいふ）

經隆　光長の男にして初め春日有房と稱す、畫所預となり從五位下に叙せられ土佐權守に任せらる、此人に至り始めて南都を去り京師に移住し春日を改めて土佐と稱す、畫法を父に受け彌よ研究して遂に丹青の妙を得、春日曼陀羅、宮曼陀羅等を畫き名譽を世に高くす

吉光　經隆の三男にして正安ころ（西紀千三百年代）に畫所預に任じ從四位下に叙せらる、其畫く所の世の人これを愛重す、就中法然上人畫傳、十王繪法、春日宮曼陀羅、淨土曼陀羅、百鬼圖卷等は著名なる品なり吉光は即ち和畫五筆の一人なり

行光　吉光の男にして正平ころ（西紀千三百五十年代）の人なり是亦和畫五筆の一人にして頗る名手と稱せらる光顯の後を嗣ぎ畫所預となり從四

位下越前守に叙せられたり、遍歟の頭著なるもの、は普願寺縁起、北野天神縁起、太子畫傳、四場道場一、遍上人畫傳等にして其他にも尚ほあり

行秀 土佐行廣の男にして、即ち土佐氏の支族なれど後に眷日を改めて別に一家を成せり、是亦和畫五筆の一人にして名手の譽あり永享二年（西紀千四百三十年）歌を奉じて弟光弘と共に大管會の屏風を畫く、又その遺蹟なる春日山童陵王、三十六歌仙の色紙、鹿苑院の肖像、加茂祭小巻物、百鬼夜行等は著名の品なり

光信 文龜永正ごろ（西紀千五百年頃）の人にして土佐三筆の一人なり畫所預となり右近將監を歴て刑部大輔に進む、天性畫を嗜み幼より拔群の兆あり人と成るに及びて其技ますます進み廣く古畫を探りて其粹を拔き用い周到にして頗る緻麗なり後世蒔繪をする者多くは光信の畫法に倣ふと

光起 土佐家の名手にして即ち三筆の一人なり畫所預となり從五位下左近將監に任ぜらる、畫風溫雅にして彩色美麗なり其畫く所の宮殿樓閣月卿雲客及び草木花實鳥獸蟲魚悉くみな眞に迫りて恰も生るが如し後世寫生の畫を善くする者ありと雖も光起の上に出る者なし、是よりも先土佐の畫風大に衰へたりしが後に至て再び盛になれり、後に藤髮して法眼に叙せられ常昭と號し元祿四年（西紀千六百九十一年）四月に沒す

○**屠龍** 薩摩の人にて龍虎を畫くに巧なり、然どもその姓その年代を詳かにせず

(ち)**珍海** 大治ごろ（西紀千百三十年頃）の僧にして性畫を嗜み佛像を畫くに妙を得たり畫法を藤原基光に學びて東大寺已講繪師となれりといふ（一說に基光の男なりと）

附言 畫家人名詳傳云、洛東禪林寺永觀堂歴代之記に曰第十世珍海諱、瓦深權大僧都に補す、然ども已講を稱す、照登親王の男、花山院の御孫三論の英傑、又丹青に妙なり、後に淨土門に歸し決定往生集三卷を著し安養を慕ふ、永萬元年十月十五日入寂（永萬は二條帝の年號にして西紀千百六十五年に當る、大治に後るゝ三十餘年なれば時代略ほ合へり珍海に付說種々あれど永觀堂の記や實ならん）七十九歳

○**仲安** 名は梵師、號は松屋また竹天史と稱す、相國寺開山普明國師の弟子にして畫を牧溪に學び多く不動尊及び大黑天を畫く明應年間（西紀千四百九十年頃）の僧なり

(り)**良圓** 佛畫を善くし法橋に叙せらる、嘗て攝州多田の光遍寺開山空圓の像を畫く、その裏書に康安二年（北朝の年號西紀千三百六十二年）二月廿三日畫工法橋

畫筆とあり以て其時代を知るべし

○良全法印　正平年中(西紀千三百七十年頃)の畫工にして佛畫を能くす、和州本國寺什物に羅漢三十二幅あり良全の筆にして其名世に著はる

(を)小野篁　參議岑守の子なり、若くして學を修めず馳馬を事とせしかば嵯峨帝歎じて宣曰く斯人の子にして弓馬の士となる乎と之を聞き始めて悔悟して學に志し遂に才學を以て世に鳴るに至る、後東宮學士となり彈正少弼に任じ清原夏野等と共に令義解を撰す、其後また累遷して左大辨となり從三位を受け仁壽二年(西紀八百五十一年)十二月歳五十一にて歿す、篁詩を善くし草隷を能くし文章また當時に冠たり、又畫に巧にして妙、神に臻る、最も佛畫に長ず、世稱して野相公と呼べり

(か)狩野家　正信を以て祖とす、正信の父は景信といひ伊豆國加茂郡狩野村に住せしにより狩野を氏とし子孫みな狩野を冐し累世畫を以て統を嗣ぎ十數代聯綿として繼續し宗支門流その族極めて多く名工妙手また輩出せり、土佐は倭畫にして雪舟は漢畫なり、而して狩野はこの兩者を兼ぬ、家祖正信は雪舟と共に周文に學びしかど雪舟は形をとらずして只其意を寫し正信は實を求めてその正を擇ぶ、是その殊なる所また各別に一家を成す所以なり

正信　本姓は藤原なれども留居りし所の名によりて狩野を氏とす初めて大炊助と稱し後剃髪して名を祐勢(或は友濟)と改む、關東の兵亂によりて、京師に來り周文また宗丹に随ひて畫法を學び能くその趣を得たり、人物は宋の梁楷に倣ひて最もその長ずる所なり、足利八代將軍義政に仕へて近侍となる、延徳二年(西紀千四百九十年)七月歿す

元信　正信の子にして大炊助と稱し剃髪のゝちは永仙また玉川と号す、世に古法眼と唱へ狩野家の泰斗とせり、幼時より畫を好み巧に人物鳥獸草木を畫くを以て人これを奇童といふ、十歳に及て足利義政に仕へて近侍となり畫を以て寵遇せらる、後諸國の名山勝地を歴覽し景趣を臨摸して還りその技いよ〳〵進て妙に達る、山水は馬遠、夏珪、牧溪、玉澗、舜擧、子昭を學ひ人物は馬遠、夏珪、梁楷、顏輝に法とり、花鳥は趙昌、馬遠、舜擧に依り又信實、光信等の倭畫の粹をとり各名家の長所をあつめて其有とせしか故に畫風温雅にして緻密滋潤かつ淸秀なり、永正中(西紀千五百餘年)數幅の山水花鳥を圖し蠻舶に附して明國におくりしに知勤城の鄕澤これを視て稱歎して云く筆法は趙昌、馬遠の如し墨畫は牧溪、玉澗に似たり一草一木亦毫も放心する所なし、日本五百年來嘗て此品あるを聞す、若し夏士其の時に遭はゞ必す圖繪寶鑑中に列せんと、乃ち畫を元信に贈て云く、吾先生の畫彩を看るに恰も趙

昌馬還の如し、筆跡甚た歡ぶへし、若し我國に遊ぶを得は必す先生の門下とならんと、其名聲嘖々として世に喧しきも故なきにあらす

永德(えいとく) 狩野家第五世の人にして初の名を州信といひ後改めて重信といふ、書法を祖父元信に受け新たにまた奇趣を出し山水花鳥人物獸を巧に畫き大なるものには殊に妙を得たり、而して其筆法は曾祖にして草なるもの多し、嘗て安土の城中に畫きて信長の感賞を受け、また聚樂二條等の金壁にも畫きて秀吉の稱美する所となり殆ど元信と相頡頏する勢なりき

山樂(さんらく) 或は三樂に作る、狩野家有名の人にして名を光賴といふ、其父は木村永光とて江州蒲生郡の人なり、初め淺井氏に事へ既にして羽柴筑前守(秀吉が信長に仕へし頃の稱)に事へて近侍となる、當時山樂なほ幼なりしかば秀吉が城廓を營みて臨監するをり〳〵杖を以て其後に從ひゆき其杖を以て馬を沙上に畫き人の傍觀するを顧みず、秀吉これを見て奇とし山樂をその頃の名畫工永德に附して學ばせしに其發達速かにして遂に妙手となる、秀吉また命じて永德と父子の義を結ばしめ狩野氏を授けて條理亮の稱を賜ふ、後に至りて剃髮す、山樂はその時の號なり、遺蹟の著名なるものは東福寺法堂天井の龍(頭の二丈餘り身の長さ十八丈數日にして之を畫く)天王寺の堂壁に畫ける太子緣起等なり

探幽(たんいう) 狩野中興の祖と仰がるゝ名手にして名は守信、幼名四郎次郎また采女と稱す、剃髮して探幽齋とも白蓮子とも號せり、その三歲のとき父孝信試に筆を授けしかば啼止み、四歲の頃ほひ自ら筆をとりて紙に點するに殆ど習熟する者の如くなりきといふ、長ずるに及ひ其技いよ〳〵進み和漢を涉獵し家法を襲して更に機軸を出し一種輕妙の風をなす、然ど密畫眞圖の精巧なるものに至ては宋の舜擧本朝の土佐の名蹟にもをさ〳〵劣らず、長十七年(西紀千六百十二年)齡僅かに十一にして德川家康に駿府にて謁し爾後屢々柳營に召され畫を以て寵遇を受け又寬文二年(西紀千六百六十二年)

京都に召され天皇の聖容を圖し奉り之によりて筆縣大居士の印を賜はり且つ法印に叙せられ食邑を加賜せらる、時人稱して畫仙と呼べり

信政(のぶまさ) 祖酉(畫法を松榮及び永德に受け善く狩野派を畫く)の男にして號を業川(一に業仙に作る)と稱し能く父の畫風を傳へて家聲を墜さず畫を以て東福門院に仕ふ(東福門院は後水尾帝の中宮なれば西紀千六百年代の人なり)

尙信(なほのぶ) 初名を一信といひ又主馬と稱し號を自適齋とよぶ、孝信の仲子にして守信(探幽)の弟なり、畫法を父及び兄に學びて大にその深趣を得、その畫くところ頗る氣韻あり家兄とその名を均くせしが惜いかな中年にして没し天縱の畫才を盡く世に發揚するを得ざらしめたり(慶安三年(西紀千六百五十年)四月年四十四にして卒す

洞雲(どううん) 名は益信、洞雲はその號なり、畫法を探幽に學びて能くその眞を得遂に探幽の養子となりしが其後養母卒し探幽後妻を迎へ之に探信探雪生るゝに及び別に出て一家をなす、德川家光の寵遇を得て法眼に叙し狩野三家に次ぐの命を蒙る(孝信に三子あり各別れて一家をなし是より狩野三家となる、長子守信を鍛冶橋狩野といひ、次子尙信を木挽町狩野といひ、季子安信を中橋狩野といふ、皆その居所の名によりて稱せしものなり、洞雲は駿河臺に居る故に之を駿河臺狩野といふ是にて亦四家となる)

常信(つねのぶ) 尙信の男にして木挽町狩野第二世なり、號を養朴、古川叟、寬耕齋、青白齋など稱す、父の畫法を受けて其の奥を極め遂に妙手の聲を得、山水草木鳥獸ともに巧にして精粗兩ながら善し、眞圖淡彩のものに至ては其周到緻密土佐畫に讓らず

永納(えいなふ) 元祿年中(西紀千七百年頃)の名畫師なり、山雪(山樂の義子、初め畫法を養父に學び後その風を一變す)の長男にて一陽齋、梅岳、山靜居、[illegible]など號し

狩野家屈指の人なり、初め畫法を父に學び後また安信に就てその閫奥を極め遂に父の畫風をすてゝ狩野の正風に歸せり、また文操に富み嘗て本朝畫人の傳を著す本朝畫史と稱し人に據て証を立つ、延寶年中(西紀千六百七十年頃)の名手なり

勝川名は雅信、號は素信、齋と稱しまた法印に叙せられて勝川院といふ、木挽町狩野八世の入なり畫法を父美信に學びて能くその風を寫し特に畫く所のもの頗る活動あり明治初年の狩野派の名工と世に稱譽せられたり

○覺猷　源隆國の子にして天台の座主及び三井の長吏となり大僧正に至る、醍醐に住し又鳥羽に住せしを以て世に鳥羽僧正といふ、倭畫を善くし特に人物に巧なり就中戲畫に妙を得たるを以て後世この風の畫を鳥羽繪と稱するに至る運筆飄逸にして凡を離れたり、堀河帝の御時西紀千百年頃の畫僧なり

○豪信　藤原信實六世の孫にして畫を巧にす山の法師となり敕を奉じて花園帝の宸影を寫し奉る西紀千三百餘年代の畫僧なり

○覺鑁　根來寺の開山にして高僧なり、天性畫を好み能く佛像祖師を畫く、畫法を宅磨爲遠に學び嘗て木筆淡墨を以て不動尊像を畫きしに生意發動神妙あり、康治二年(西紀千百四十三年)十二月圓明寺の西廂に趺坐秘印を結び恬然として寂す

○可翁　名は宗然、可翁はその號なり、筑前の人にして嘗て元にゆき留ること十年、歸りて筑前の崇福寺に住し又和泉の禪通寺を創め尋で詔によりて南禪寺に住す、當時高德知識の聞こゆあり、性畫を嗜み南浦紹明の弟子となり其畫く所の彩畫は顏輝に倣ひ墨畫は牧溪を學ぶ、殊に能く牧溪の骨法を得しかば世人往々その無落欵のものを誤りて牧溪の筆とす、每に好みて寒山拾得及び觀音の像を畫き又稀に墨竹を圖す、其他の畫は甚だ少なし、貞和元年(北朝の年號、西紀千三百四十五年)四月寂す

(ち)宅磨爲氏　永延年間(西紀九百八十餘年)の人にして畫を善くし巨勢弘高と名を齊くす、爾後宅磨氏は畫家を以て世に知られ其子孫より多く著名なる妙手いでたり

爲成　爲氏の子にして當時名工の聞あり繪所の長者となり又かの有名なる宇治平等院鳳凰堂の壁及び扉に畫く、長暦年中(西紀千三十餘年代)の

人なり

爲遠（豐前守に任ぜられ近衛帝に仕ふ（西紀千百四十年代）晩年に至り剃髮して勝知と稱し法印に叙せらる、佛像を畫くに名あり）

爲久（爲遠の三子、畫を能くする（西紀千百八十餘年）源頼朝に召されて鎌倉に行き觀音の像を畫く、之を畫くに齋戒沐浴衣冠を裝ひて筆を執りしもいふ、以て當時畫家の精神苟且ならざるを知るに足る、世に無雙の妙手と稱せられたり）

爲行（爲久の子にして能畫の聞あり左近將監に任せらる、其畫く所生氣活動ありて世人これを愛玩す、寛喜年中（西紀千二百三十年頃）の人なり）

澄賀（是も爲久の子にして亦畫を能くす、依て家を嗣ぎ法印に叙せらる佛像人物みな生氣活動ありて神妙に至り又雜畫をも巧にせり嘗て九條關白兼實の爲に法然上人の眞像を寫したりしが頗る名作にして其聞ゐ世に高し今この圖畫鎌倉の二尊院にあり眞像を寫したりしが頗る名作にして其聞ゐ世に傳を畫かんとする者は畫法を之に取るといふ、建仁年中（西紀千二百年代）の人なり）

良賀（畫を善くする僧鏡忍、良喜、惠阿彌陀佛等心を合せて新曼多羅を圖せんと欲し藤原光親に由て之を土御門院に奏せしかば則ち良賀及び源慶に詔して筆を執らしめ給ふ、世にその名高き當麻の新曼多羅是なり）

○**大雅堂**　姓は池野、名は無名、大雅堂はその號なり、又霞樵、九霞山樵、竹居、兎罔釣叟、三岳道者などと號す、幼にして書畫の才あり長ずるに及び紀伊にもきて畫法を祇園南海に學び後また大和にもきて柳澤里恭に學び多く明清の畫譜を摹し遂に南畫の宗と仰がるゝに至る、大雅人となり蕭散恬虛にして貧賤に安んじ身を毀譽得失の外におけり、故に畫法の高きと共に奇人を以て亦人に知らる、其性音曲を好み又和歌を嗜む、間居の時は妻玉蘭と三絃を鼓して樂むを常とす、其自畫に賛して云く「あかなくも長き日かけに青柳の糸もてあそぶ心のどけさ」、安永五年（西紀千七百七十六年）四月歳五十四にて歿す

（そ）**春我蛇足**　式部と稱し後薙髮して夫泉といふ、その家代々越前朝倉氏に仕へて武臣たり、蛇足性畫を嗜み周文を師として學ぶ、山水人物花草鳥獸みな濃墨を以て畫く、畫風豪邁にして活動の勢あり、然るにその筆粗にして師の周文に似ざるなり、時に大德寺の一休畫を蛇足に學び蛇足、一休の像を畫く、この像世に存して賞譽せらる、應仁年中（西紀千四百六十餘年）の人なり

○**春我蕭白**　明和年間（西紀千七百六十年頃）の人にして名を輝一といひ師龍（又は輝麾とも云ふ）

號を如鬼樵山、鬼神齋、飛樵など稱す、初は畫法を高田敬甫に學びしが後には蛇足雪舟の風を慕ひその筆法を修めて遂に一機軸を出す、一に號を蛇足軒と稱し又自ら曾我蛇足とも唱へしことあり是その畫風を景慕せしよりの名なるべし、當時の妙手にして其畫くところ怪醜なるを以て世に名を博うせり

○宗丹　永享年中（西紀千四百卅年頃）の人にして性畫を好み初め周文を師として學び後に牧溪の筆法を慕ふ、嘗て季瓊和尚に別號を請ひしに其畫の神妙牧溪に比すべしとて自牧と呼ばしむ、その筆勢雪舟よりは柔かに周文よりは潤ひ行筆磊落にして其畫く所の動植ことゞく生意を得、遂に一家の畫風を起せり

（う）雲谷等顔　天正年間（西紀千五百七十年代）の人にして性は源、通稱は治平、有名の畫人なり、初めは狩野松榮に就て學び後には雪舟の法に倣ひ能くその深趣を得しを以て毛利輝元雪舟の筆法を傳る者を索めしとき等顔これに應じて大に其名を博うす、山水人物花鳥等を畫くに水墨又は淡彩を用ゐ頗る風趣ありて奇韻甚だ高し、雲谷はもと雪舟の住せし寺名なるが等顔も亦雪舟の三代目を繼てこの寺に住し遂にその寺名を取て氏とせしなり、斯て雲谷派の一家を開きてその祖となり爾來この派より著名の者を出すに至る、その子等屋（畫を以て藝州祖島家に仕ふ）等益（畫を能くし法橋に叙せらる孫等與の弟亦畫を能くし法眼に叙せらる、等與の子なきを以て其家を嗣ぐ）等みな其名を世に知られ等哲も亦この派に於て著名なり

（の）信實　姓は藤原、初め名を隆實といふ、官は右京太夫たりき歌を巧みにし亦畫を善くし其筆法變化自在にして品位頗る高く寫眞に最も長す、實に中世の妙手なり、文永二年（西紀千二百六十五年）十二月年八十九にて歿す

○能阿彌　眞能と稱し鷗齋或は春鷗齋と號す、周文を師とし又牧溪を慕ふ、その畫風平淡にして趣高し、能く花鳥山水猿猴を畫き、また水墨の竹石を畫く、繪事のほか書を善くし又歌を巧みにす、正長ごろ（西紀千四百二十餘年）

の人なり

(お)應擧　字は仲達、名は初めに仙嶺といひ後に應擧といふ、仲均、僊齋、鴨水漁夫などの諸號あり、通稱を主水とよび京師に住す、畫法を狩野派の畫人石田幽汀に學びて出藍の聞えあり、而して弘く古今の名蹟を探りて强ち一規模によらず遂に自ら機軸を出して一家をなし其名海内に振ふ、その畫くところ精巧にして人物花卉鳥獸蟲魚悉くみな眞に逼れり寫生の畫風應擧に至りて振興し關西の畫家多くは其弊に倣ふに至る、世人この畫風を稱して圓山風また上方畫といふ、その子應瑞その孫應震みな能く家法を守りて畫名を墜さず、其門には源琦淇園蘆雪等の名手を多く出したりき、寛政七年(西紀千七百九十五年)七月年六十三にして歿す

(く)空海　姓は佐伯、空海はその名なり、入定のゝち弘法大師と謚せらる、讃州多度郡の人にして延暦の末(德宗の貞元廿年西紀八百四年)唐に入り密法を慧果阿闍梨に受け歸朝のゝち高野山に金剛峯寺を創め大浮屠を建て本朝眞言宗の開祖となる、博學多才にして文を善くし書を能くし畫も亦神妙なり、毎に神佛祖師の像を寫し、また木筆を用ゐて梵漢の字を書し佛像を畫く、今その遺蹟の稀に存するものは世これを珍とし寶とせり

○空光　畫工にして最も能く佛像を畫けり、承和五年(西紀八百三十八年)三井寺の智證大師その夢見る所の不動の像を空光に畫かせしに圖なりて妙、神に通ず、世に著名なる薫不動尊是なり

○觀盛　東大寺の僧にして美濃公と稱す、其畫世に存するもの甚だ稀なり、御室仁和寺にその畫く所の虛空藏の像一幅あり、畫風巨勢派に似て頗る佳なり年代を詳かにせざれども其遺蹟によりて考るに今を去る四百年前の人なるべし

○光悅　本阿彌と稱し刀劍鑑定家なり、大虛庵、自德齋、德友齋などの號あり、本業の傍ら諸藝に通じ最も能く畫を作す、海北友松を師とし又土佐風を學び一種逸格の畫風を起しゝに世これを光悅風と稱して愛重す、

寛永中（西紀千六百廿餘年代）の人なり

○光琳　寶永ごろ（西紀千七百年頃）の人にして姓は尾形といふ、初め土佐狩野を學び後に光悅宗達の風を慕ひ遂に一種の畫風を起す、頗る意匠に富み風致絶妙なり

（け）源琦　源は姓、琦は名なり、字を子韞といひ氏を駒井といふ、畫を應擧に學びて能くその奥旨を得たり、美人翎毛花卉を善くし設色を巧みにし其畫くところ秀潤妍麗なり、寛政の頃（西紀千七百八十年代）の妙手にしてその名世に重せらる

○月僊　淨土宗の僧にして伊勢の寂照寺に住す、名は元瑞、字は祥譽、月僊はその號なり、性畫を嗜み初め應擧の門に入り後また雪舟の筆意を學び、元、明の古蹟に法り、更に一家をなし名聲時に藹々たり、享和ごろ（西紀千八百餘年）の人なり

○景文　姓は松村、字は子藻、景文はその名にして號を華溪といふ、月溪の弟なり、畫法を兄に學び頻りに勉强して遂に妙手に達し就中花鳥を能くし其墨色の美麗なること兄に勝る所あり、天保年間（西紀千八百三十年頃）の人なり

○啓書記　名は祥啓、雪溪又は貧樂齋と號す、嘗て鎌倉、の建長寺に在て書記たり、故に世、呼て啓書記といふ、山水人物を能くし殊に佛畫に長ず、其畫くところ頗る高趣あり、寶德年間（西紀千四百五十餘年代）の畫僧なり

（ふ）文晁　近世の名手にして姓は谷、號は寫山樓、畫學齋、蹄叟無二など稱す、壯年の頃はひ畫法を加藤文麗に學び中年に及びて北山寓巖に就て清人の畫風を修め又宋の牧溪、本朝の雪舟、探幽などの筆法を摹し又西遊して南畫を雲泉に學び南北を折衷して遂に一家を成しその畫風精巧佳美なり、天保十二年（西紀千八百四十一年）十二月歿す

○蕪村　丹後與謝の人なり故に謝を氏とし名を長庚といふ、安永年中（西紀千七百八十年頃）の人にて京師に住し俳諧と畫を以て其名一時に高し、畫法を

元明諸大家にとり最も山水に長じ又狂畫を能す

(こ)巨勢家　當家は大岡氏に次たる畫の舊家にして其祖を金岡とす、其子孫畫を以て統を嗣ぎ皆よく家名を愧かしめず、妙手續々輩出して各その名を當時に振へり、斯てその畫風は所謂倭畫なる者にして唐畫より出て一家を成せるならんと云ふ

金岡　姓は紀氏にして宋女正に任ぜられ清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に歷仕し遂に大納言に陞る、頗る畫を善くし丹青の妙、神に通ず、嘗て勅を奉じて多く畫きしが其中最も著名なるは紫宸殿の障子賢聖の像是なり、世に傳ふ御府に藏する所の金岡が畫けるを以て之を鑒がしめしに果して萩戸の邊に出て萩花を噛ふ因て畫工に勅して筆を以て之を模せしに果して止みたりと此他にも金岡の畫に付てはこの類の談多し固より信かべき事にあらざれども其畫の靈氣活動の妙あるを以て斯る傳說も起りしものなるべし神妙の筆想見するに足れり

相見　金岡の男にして即ち巨勢家第二世なり、畫風父と大同小異にして其筆生氣あり、佛像を畫に巧にして雜畫をも亦善くす其畫く所の竹取物語の圖世に著明なるものなり

公忠　相見の子にして巨勢家第三世なり是亦能畫にして名手の聞あり天曆中(西紀九百五十年頃)の人なり

公望　公忠の男にして巨勢家第四世なり、畫風父に同じ其筆生氣活動の妙あり、是亦名手の聞あり、是なるか定かならざれど巨勢家を嗣て其弟子といふ何れ是なるか定かならざれど巨勢家を嗣て其弟子といひ又その弟子となれるは實なり、是亦名手の聞ありて其遺蹟世に重んぜらる、天元中(西紀九百八十年頃)の人なり

深江公望の子　弘高　深江の子寬弘中(西紀千餘年代)の人　是重　弘高の子　等もみな能く父祖の業を受て畫を巧にし敢て家聲を墜さず此後にも尙ほ世に聞えたる人おほく出づ、土佐家の祖基光に畫法を傳へしは金持なりといふ金持また巨勢家の能畫士にして白河帝の時西紀千七十年頃の人なり、而して亦公忠以下多くは皆繪所長となれり、此は畫家の名譽とする所なり

○古澗　寶永の頃西紀千七百年代の畫僧にて名を明譽といひ号を虛舟といふ初め狩野永納に學び後雪舟の畫法に倣ひ能く人物山水を畫き好んで大黑の像を寫せり

○吳春　姓は松村、名は春、字は伯望、號は月溪、允伯、存白、など稱す、壯年のころ攝州吳服村に至り酒造家の所に寓居し毎に酒樽の菰を畫き此所にて終に春を迎へしかば名を改て吳春とす初め大西醉月を師として學びしが後には蕪村、應擧を折衷して一風を起す、世に之を四條風といふ

筆致輕淡にして寫生に妙を得たり、性酒を嗜み常に酣醉し興に乘ずれば則ち揮毫す、亨和ころ（西紀千八百年代）の妙手にして當時その名を博せり

（て）兆殿司　名は明兆、號は吉山、淡路の人にして東福寺大道和尚の弟子なり、其性酷た圖畫を好みしかば大道これを戒めて師資の約を絶んとす明兆おもへらく道路に棄らるゝ者は破屣なり、今われ繪事を以て大道に棄らる因て破艸鞋と號せんとて然か稱す、或日たま〳〵師大道の出るを候ひて不動の像を畫く、時に師の還るを見て驚き之を膝下に藏せしに圖中の火燄勃起して掩ふと能はざりしかば大道その神妙なるに服して爾後戒むることをせざりき、應永年間（西紀千四百年代）東福寺の殿司となりて南明院に住す、兆殿司と唱るは此故なり、其畫法道釋の像は宋の李龍眠を學び、また元の顏輝に倣ふ、筆勢は龍の飛ぶ如く鳳の翔るが如し、固より凡筆の及ぶ所にあらず

（あ）粟田口法眼　應永の頃（西紀千四百年代）の名畫工にして名を隆光といひ洛東粟田口に住す、土佐光顯の三男にて舊は土佐家の人なるが出て一家を成し、別に粟田口派を起せり、其法眼に叙せられしを以て世呼て粟田口法眼と稱するなり、後に春日繪所となり、之に移りたれば子孫みな南都にありて佛畫を業とす、其中經光は頗る妙手にて父隆光の畫法をうけ其畫くところの人物草花活動ありて生るが如し

（き）淇園　姓は柳澤、名は里恭、字は公美、淇園はその号なり又竹溪とも玉桂とも号す、和州郡山藩の老臣にして才文武を兼ね諸藝に通じ殊に書畫を善くす、寶暦八年（西紀千三百九十年頃）歿す歳五十三

（し）如雪　元中年中（西紀千三百九十年頃）の僧にして京師相國寺に住し畫を能くするを以て義滿に仕ふ、支那宋、元の風を學び氣韻を尚びて眞似を求めず筆法おのづから粗率なり、古來畫を能くする者に未だ宗元の筆意を傳へし者なしと之を學びて大に其法を得しは如雪を始とす

○周文　京師相國寺に住せし畫僧にして字は等慶、号は越溪、また岳翁な

を稱す、嘗て如雪の門に入て學びしに當時すでに出藍の稱を得たり、山水人物花鳥は馬遠、夏珪、顏輝の法を用ゐ墨畫は牧溪、玉澗の風を寫し畫風清潤にして雅韻あり、雪舟、小栗、狩野なをいふ名手輩が宋元の堂に上るを得しは偏に周文の階梯あるに由る、稱光帝の御宇（西紀千四百廿年頃）の人なり

○若冲　姓は伊藤、名は汝鈞（初め倍教と云）字は景和、若冲はその号なり又斗米庵とも号せり、京師の人にて青物問屋の主なりしが幼より畫を嗜み初め狩野家の門に入て學ひ後に元明の古蹟を摹し又光琳の筆意を用ゐて一種の畫風を出し人物山水草花鳥蟲等を巧に畫き殊に雞の圖を善せり、其雞を畫くには家に數頭の雞を飼養しおき數日その形狀を熟視して後に筆を執りしといふ故に其動靜鳴啄の狀ことゞく眞に逼れり然を必しも寫生のみを事とするに非ず寫意に最も力を致せり、天明ころ（西紀千七百八十年頃）の人なり

（ろ）惠心　姓は卜部、名は源信、叡山の慈惠大師の弟子となり横川に住し新たに寺を開きて惠心院と號す、能く佛像を畫て巧に慈悲眞實の情貌をあらはす、故に人みな之に向ひて渴仰尊信の念を生ず、而して其遺蹟のうち最も著名なるは眞如堂に藏する山越の彌陀なり、又始めて地獄の變相を畫きたりといふ、寛仁元年（西紀千百七年）六月寂す

（ひ）飛彈守維久　後村上帝の時（西紀千三百十年頃）の畫工にして軍畫を能くす嘗て後三年軍記の圖を作る、圖中載する所の甲冑その他器械、屋宇、門墻等みな實に合ひ一として杜撰なし、故に世の古實を唱る者これを引て當時の考證となす、以てその畫の價値を知るべし

（せ）雪舟　名は等楊、雪舟は號なり、又備溪齋、米元山主人、雲谷軒などの號あり初め如雪周文等に就て學び後に明に渡りて能畫を問ひ又夏珪、梁楷に則りて遂に一派を開く筆力豪健にして清韻あり、專ら山水を畫き又仙佛を圖す共に神妙にして世に畫聖と稱せらる、永正三年（西紀千五百八六年）

十七歳にて歿す

○逍遙軒　姓は武田、名は信綱、剃髪して逍遙軒と號す、信玄の子なり、或は弟と云ふ、性畫を嗜み能く信玄の壽を寫し又十王及び十二天を畫き傳へて高野山にあり、天正十年（西紀千五百八十二年）勝頼亡ぶるに及び立石に走り終に斬らる

（す）住吉家　土佐の一派にして其祖を慶恩とす、慶恩は春日隆親の二子にして光長の弟なり、攝州住吉の繪所となり住吉の里に住するを以て住吉を氏とし畫を以て法眼に叙せらる、依て世に住吉法眼と稱し人その畫を愛重せり、畫風雄偉靈活にして變化を極む、建長年中（西紀千二百五十年代）の人なり、然も此人の子孫に畫を以て名の著はれたる者なく一時中絶の狀況なりしが慶安の頃（西紀千六百四十年代）に至り廣道勅を奉じて新たに住吉の家名を興し住吉家中興の祖となりしより名手續起れり

廣道土佐光吉の次男にして幼名を光陳といひ通稱を内記といひ後薙髪して加賀也といふ、畫を善くする以て法眼に叙せらる又徳川幕府の畫師となり東都に住し住吉家を中興す、その畫構巧にして甚だ美麗なり寛文十年（西紀千六百七十年）六月齢七十二にて歿す

廣澄廣通の子にして内記と稱したりも雖も人物畫は殊に妙を得たれば世人の之を賞愛すること父に越ねたり寶永二年（西紀千七百五年）に歿す

弘貫近代の土佐家の名手にして初め名を廣定といひ又弘定ともいひ内記ともいふ、畫風能くその眞趣を得て世人に賞譽せらる、從來住吉家は狩野家と共に徳川幕府の畫師たれども其の座席大に下れり、然るに弘貫に至りて狩野家と肩位を同うするに至る、此家の名譽と云ふべし文久三年（西紀千八百六十三年）七十一歳にて歿す

附錄

支那畫、二代人名

（い）殷令名　唐代の人にして工を不害とす、顯世畫畫に工なり來す、畫を善くし、最も山水に長じ頗る風韻に富めり

○伊孚九　清代の人、孚保十一年（西紀千七百廿六年）始めて長崎に來り其後屢々往

（ろ）盧楞伽　唐代の人、乾元の初め大聖慈寺にて行道の僧を畫き頗眞翰これが爲に名を顯す時人賞して二絶といふ

(は)馬賁　宋代の人にて花鳥人物山水を能くし殊に小景に長ず　○馬遠　宋代の人にて光寧の朝に畫院待詔に任ず、山水人物花鳥を巧にし其變化の妙獨歩と稱せらる　○馬麟　遠の子にして能く父の畫風を嗣ぐ然も終に及ばず畫院祗候となる　○馬公顯　宋代の人、山水人物花禽等を能く畫く馬氏は累世の畫家にして子孫相嗣ぎて家聲を墜さず　○法能　宋代の僧にして羅漢を畫くに巧なり

(ほ)牧溪　宋代の畫僧にして名を法常といふ、能く龍、虎、猿、鶴、鹿、雁、山水人物を畫く、筆意閒淡にして裝飾を愛さず　○蒲宗訓　五代の時の人鬼神を畫き人物を圖する妙を得たり

(へ)邊鸞　唐代の人、丹青を以て晉を得、最も花鳥に長じ其畫眞に迫る　○米芾　宋代の人、字は元章、書畫共に妙絶なり山水を善くし枯木松石亦奇思あり

(と)杜齯龜　五代の時の人、博學强識にして佛像人物を畫くに巧なり　○董其昌　明代の人、書畫ともに名高し

(ち)陳子昂　唐代の人、巧に人物を畫く　○張思恭　印寶に其印を載す　○沈南蘋　清代の人、名は銓、南蘋は其字なり

(り)李龍眠　宋代の人、名は麟、字は伯時、龍眠は其號なり、宋畫中の第一と稱せらる　○梁楷　南宋の人、道釋鬼神を畫き又山水人物をも善くす　○李思訓　唐の宗室にして左官武衛大將軍に至る畫超絶最も山水林泉に巧なり　○陸信忠　印寶に其印を載す　○劉坦然　宋代の人、名は履中、坦然は其の號なり、能く人物を畫く、殊に仙佛に長ず、筆勢雄峙たり、然ど工氣を脫せざる所あり　○李昭道　唐代の人思訓の子なり、父に及ばざる所ありと雖も亦妙筆なり　○呂紀　明代の人字は廷振　○林良　明代の人字は以善

(わ)王摩詰　唐代の人、名は維、摩詰はその字なり山水を善くす其思致高遠なり　○王麗　明代の人、字は大卓、

(か)夏珪　南宋の時の人、字は禹玉、能く山水を畫く宋畫の上々と稱せらる　○顏輝　元代の人、字は秋月、道釋人物を善くす

(た)戴文進　明代の人、名は進、號は靜庵、また玉泉山人と稱す　○太宗皇帝　宋の二世にして諱は炅開寶九年十月位に即く

(れ)蘇布　宋代の人、字は宣仲、

(そ)蘇軾　宋代の人、字は子瞻、號を東坡といふ、書畫文章共に善し、好で墨木枯木奇石を畫く　○孫君澤　元代の人、山水人物を巧にす

(ね)韋無恭　唐代の人、畫を以て稱せらる、最も獸を善くす

(く)黃筌　五代の時の人、其畫諸家を貫て妙に臻る

(や)楊補之　宋代の人、字は無咎、逃禪老人と號す能く梅竹松石水仙を畫く　○楊月澗　元代の人にて花鳥龍虎を善くす

(ま)毛益　宋の乾道年間の人、花鳥小景を畫くに巧なり

(け)玄宗皇帝　唐の六世にして諱は隆基、大極元年即位　○月壺　印寶に其印を載す爾餘は詳かならず

(ふ)不空三藏　西域の僧にして唐の代宗、太曆九年六月寂す、大辨正廣智和尚と號せらる　○文徵明　明代の人、名は璧、停雲と號す畫畫ともに著名なり

(こ)吳道玄　唐代の人、字は道子、筆法妙絶百代の畫聖と呼ばる　○顧愷之　晉代の人、字は長康丹青に妙を得たり

(ね)閻立本　唐朝の人、閻立德の弟なり、兄弟ともに丹青を以て名を得たり○閻次平　宋代の人、父を閻仲といひ妙手なり、次平能く其業を嗣ぎ亦善く畫く、最も牛を巧にす

(て)趙子昂　元朝の人、名は孟頫、松雪道人とも號す書畫ともに其名高し○趙子固　元代の人、名は孟堅、子固は其字なり其畫く所の水仙、梅蘭竹石等清雅凡なり

(あ)安紹芳　元代の人、字は茂卿、硯亭居士とも號す

(さ)左文通　唐代の人、寫貌に巧みなり

(き)徽宗皇帝　宋の三世にして寫機の暇書畫を玩び丹青の妙を得

(ゆ)愈徽　宋代の人にて字は子清、光宗の朝に大理少卿寶閣待制に任ぜられ致仕のち且軒と號す

(し)徐熙　宋代の人、花木禽魚蔬果を○仁濟　宋代の畫僧なり、姓は董、字は澤翁、墨竹畫くに其妙造化を奪ふ

(も)默庵　南宋の人、姓は王、名は水、默庵は其號なり山水人物を能くし殊に梅蘭に妙なり

(せ)錢舜舉　元代の人、名は選、王渾と號す人物山水花木翎毛を善くす○石恪　宋代の人、字は子專、巧に佛道畫人に係る世代のみを知るべし

日支洋年代對照　茲に掲ぐる年代對照は前に出せる

支那	日本年代	西洋年代	世代年數
晉	自紀元九百二十五年至一千七十九年	自紀元二百六十五年至四百十九年	百五十年
唐	自紀元一千二百七十八年至一千五百六十八年	自紀元六百十八年至九百九十八年	二百九十年
五代	自紀元一千三百六十九年至一千六百十九年	自紀元九百九年至九百五十九年	五十年
宋	自紀元一千六百二十年至一千九百三十九年	自紀元九百六十年至一千二百七十九年	三百十九年

支那	日本年代	西洋年代	世代年數
元	自紀元一千九百四十年至二千二十七年	自紀元一千三百八十年至一千三百六十七年	八十七年
明	自紀元二千二十八年至二千三百十九年	自紀元一千三百六十八年至一千六百五十九年	二百九十一年
清	自紀元二千三百二十年至明治二十八年	自紀元一千六百六十年至一千八百九十五年	二百三十五年

五代とは唐と宋との間にありし後梁、後唐、後晉、後漢、後周の五國をいふなり

◉彫刻　佛工、金工、木工、彫工　妙手傳

總じて百工の業は世の需用と人の嗜好とに依て發達を促さるゝ者なり、本邦彫刻の技は佛法の興隆とゝもに進歩を始む、推古帝の御時より佛法盛んに世に行はれ伽藍佛像の需用年々歲々繁多を加へしが茲に於て造寺彫佛の名工頻りに輩出せり、故に本邦彫刻の濫觴を佛工に歸するも不可なきが如し（佛像を造る他に寺院の模股及び桁端等に彫刻を用ふ、四天王寺金堂の模股に雕りたる雌雄の鹿はその始めなり、皇子の創意に出しもいふ（今を去る千三百二年前）奈良朝の頃にはは種々の器物にも彫刻を施せり東大寺に當時のものを藏す　延暦遷都の時に及び堂扉門扇等に青瑣を彫り、又桁端蟆股

等にも諸物象を彫り、其後唐門の製起りて彌よ彫刻の業盛んになり室町將軍の奢侈にて調度器具に數奇を盡しゝより彫刻の技器物に及び當時また謡曲流行せしかば能面の名作者續々出て（室町時代（西紀千四百年代）より能樂盛に行はる、是より前既に舞樂技樂ありて古より行はれたり、故に古きものには舞樂技樂の面の名作あり、多くは佛工の手に成る）武家華奢に流れて刀装を美にせしより金工の妙手多くあらはれ、世間印籠を用ゐること例式の如くなりて懸鍾彫刻の名人盛んに出づ（印籠は藥を入れて不時の用意にするなれども後には唯一の裝飾物の如くなれり、武家其他の者も雖も少しく身分ある者は禮服を着する時は固より平生も亦これを腰にさゞ、徳川氏の世に至り殊に此風盛なり）

徳川氏の世に至り干戈の動かざること殆ど二百五十年上下その治澤に潤ひ建築（神社佛閣に花卉鳥獸の形を彫ること元祿の頃より殊に繁盛となり又士民の家宅にも書院窓、欄間等に彫刻を用ゐたり）器物（棚、卓、厨物その他修飾品、手遊具等）にも人の嗜好ます〳〵加はり彫刻の需用いよ〳〵殖えたれば諸種の彫刻に名工の出しこと頗る多かりき

（ら）一宮長常　明暦ごろ（西紀千六百五十餘年）の裝劍師にして京師に住す始め靈山と稱し後に越前大掾といひ又含章子と號し俗稱を柏屋忠八と呼ぶ彫刻に妙を得、最も寫生を善くし縱横意の欲する所に隨ひて刀を走らせ其技の精巧人目を驚かすに至る、時人呼て神工と稱せり、その子長義も亦妙技にして父と共に一世に鳴る

○岩本良寛　江戸の金工にして岩本忠兵衛五世の技統を嗣ぐ、當時名手の聞えあり、世これを古良寛と稱す、其門人良寛（淺井喜三郎と稱し、又白條亭春曙堂、南甫など號す）師に次て彫刻を善くし遂に二世良寛（岳村榮泉師古良寛の後を嗣ぐ）殁するに及びて岩本氏を嗣ぎ以て其家聲を傳へて墜さゞりき（良寛は享和元年（西紀千八百年）九月五十八歳にて殁す）

○石川龍右衛門　後宇多帝の時（西紀千二百八十年頃）の人にして赤鶴吉成大夫僧日氷、宗忠等と共に能面の名工と稱せらる、赤鶴は大癡武惡の如き强きものを彫するに巧にして龍右衛門は日氷と共に女面の如き優しきものを作るに名あり

(は)春若　應永年中（西紀千四百年頃）の人にして寶來千種等と共に能面の作に名高し

(ほ)細川政守　享保年間（西紀千七百二十年頃）の名工にして毛彫象眼を創意せり

(と)德若忠政　正平の頃（西紀千三百五十年代）の人にして越智吉舟、小牛清光、增阿彌等と共に能面を作るに巧みなり

(ち)定朝　僧康尙の子にして佛工の名手なり、其技父に超えて精巧を極む嘗て法成寺金堂の佛を造りて法橋に叙せられ又山階寺の佛を造りて法眼に陞る、彫工の綱位を受ること之を初とす、定朝また舞樂の面蔵王を刻み人その妙を稱美せり、後一條帝の時（西紀千二十年頃）の人なり

○長勢　定朝の弟子にして當時の名匠と呼ばれ法印に叙せらる、嘗て法成寺、廣隆寺等の佛を造れり、後冷泉院の時（西紀千五十年頃）の人なり、其子圓勢も名聲當代に高くして法印に叙せられ鳥羽帝の勅命によりて許多の佛像を造る、又圓勢に三子あり嫡子を忠圓といひ、二子を長圓といひ、三子を賢圓といふ、皆その技を傳へて妙工の譽あり

○陳和卿　宋國の人にして文治年中（西紀千百八十餘年）本邦に來る、佛像を刻し又鑄物を能くす

(を)小笠原一齋　安永年間（西紀千七百七十餘年）の根附師にして象牙の素彫を善くす

(か)康尙　寛弘の頃（西紀千餘年代）の佛工の名手にして勅を奉じて多くの佛像を造れり、其子定朝より子孫相嗣ぎて佛工を業とし其中には著名なる妙手を出しゝこと少なからず、世康尙を以て佛師中興の祖とせり

○覺助　定朝の子にして康平の頃（西紀千六十年頃）法眼に叙せらる、其子賴助も亦法眼に叙せられ康和年中（西紀千百年頃）興福寺の佛を造る、賴助の子康助もその技を能くして法眼に叙せられ、康助の子康慶、康慶の子定覺共に法橋に叙せられ定朝以來代々父祖の業を嗣で佛工たり

○康圓　運慶の孫にして後堀河帝の時（西紀千二百廿餘年）の佛工なり嘗て實朝の

命を受て宋帝より寄贈せる藏經の目錄臺に倣ひ、永福寺塔中の輪藏及び諸具を造り、又陳和卿と共に法華堂の佛具を彫む、これ鎌倉彫の權輿にして爾後康譽、宗阿彌、淨阿彌と相傳ふ

○康猶　永享の頃（西紀千四百三十年代）の人にして鎌倉彫を能くし足利義政の命を受て室町新殿の手道具を多く製作せり

○上總介親信　假面の名工にして三光坊の弟子なり、次郎左衛門、備中椽等相繼ぐ、此三代を稱して近江井關といふ、後柏原帝の時（西紀千五百年代）の人なり

○河内ノ大椽　名を家重といひ世に井關河内といふ、慶長年間（西紀千六百年頃）の人にして假面を作るに妙を得、時人に古今無類と稱せらる

(よ)横谷宗與　元和年中（西紀千六百廿年頃）の金工にして幕府の彫物師となる、即ち横谷彫の祖なり

○横谷宗珉　寶永の頃（西紀千七百年代）の人にして横谷彫中興の名手と稱せら

る、毛彫といふ、緻密精巧なる刀法を創意して名を博うす、其下繪には探幽及び一蝶の畫を用ゐたりといふ、世に宗珉一輪牡丹の目貫とて高名なる者あり、此は當時藝者を以て聞ゆたる紀文牡丹の目貫を所望して金拾両を手附に贈りしが三年を過て未だ成らず、紀文待佗て頻りに催促せしかば宗珉意に協はずとて手附金をもどし其後漸くに雕上りたるを他の富家某に與へしに某金五拾両を贈りて謝せしとぞ、是その一輪牡丹の目貫にして此後は生涯一輪牡丹を雕らず故に天下の一品と稱せり

○吉重五郎作　正保ごろ（西紀千六百四十年代）の金工にして加州彫の祖なり

(た)高男麿　天長の頃（西紀八百二十餘年）の佛師にして近江國の人なり、多武峰なる鎌足の像を刻めり

○湛慶　運慶の嫡子にして能く佛像を刻む、法印に叙せられしを以て世に尾張法印と稱せらる、後堀河帝の時（西紀千二百二十年代）の人なり

(な)奈良宗貞　奈良彫の祖にして寛永年中（西紀千六百廿年代）の人なり、幕府に召れて御彫物師となる

○奈良利壽　寶永年中（西紀千七百年頃）の人にして奈良彫中興の妙手と稱せらる、其技頗る精巧にして優美なり、享保の頃（西紀千七百廿年代）に奈良政隨いでゝ蘇爽の風を雕り、享和の頃（西紀千八百年代）に奈良安親あらはれて一種新奇の体を刻む、是等はみな奈良彫中の錚々たる名工なり

○奈良乘意　天明年中（西紀千七百八十年代）の名工にして彫刻に一機軸を出して肉合雕を創意せり

(む)村上如竹　鎧の象眼師にして元祿年間（西紀千六百九十年頃）の人なり、新斬なる意匠を出して象眼の一派を開きたり

(う)運慶　康慶の子にして其祖定朝以來特に優れたる名工なり、後鳥羽帝の世（西紀千百九十年代）に在て名聲頗る高し、建久年中（西紀千百九十餘年）康慶、定覺、快慶等と共に奈良大佛を造れり（大寺再建ありて建久六年に落成す）

○埋忠重吉　天正年中（西紀千五百八十年代）の人なり、鐔目貫等の彫刻に巧にして其名當時に高く勅命を蒙りて多くの佛像を造れり、其作一派の風を聞き奈良一流の祖と稱せらる、其子院朝も亦名手にして其業ますゝ盛ンに赴けり、父は法眼に叙せられ子は法印に叙せらる（院助は崇德帝の時（西紀千百廿餘年）の人なり、院朝は（西紀千百五十餘年）の人なり）

(ゑ)院助　佛工覺助の二男にして其名當時に聞えたり

(く)鞍作鳥　推古帝の十三年（西紀六百五年）勅を奉じて銅及び繡の丈六の佛像各一軀を作る、鳥は司馬達等（南梁の人にて欽明帝の御宇に歸化して佛法を奉ず）の孫にして頗る造佛の技に秀づ、後世鳥佛師と稱するは是なり

○國中連公麿　聖武帝の御宇（西紀七百三十年頃）の人にして其祖父を德卒國骨富と稱し（韓人）天智帝の時國乱を避て本邦に歸化す、公麿頗る巧思あり、聖武帝奈良に東大寺を創始したまふに方り盧遮那佛の大像を造らんと思召せど當時の鑄工に一も手を下す者なし公麿これに當り鑄工を督し

て能くその功を成せり、勞を以て從四位下に叙せらる、其大和葛野郡國中村に居るを以て姓を國中、連と賜ふ

○觀喜　紀州名草郡能應寺の僧にして能く佛像を刻む、寶龜中（西紀七百十年頃）丈六の天迦及び十一面觀音を作れり、其子多利麿も亦佛工の名手なり

○會理阿闍梨　醍醐帝の頃（西紀九百年頃）の佛師にて嘗て東大寺講堂の千手觀音及び虛空藏、地藏等を造る

○快慶　康慶の弟子にして建久ごろ（西紀千百九十餘年）の妙手なり、其師康慶及び定朝定覺等と共に奈良の大佛を造る、また一種優美なる風を創意して佛像彫刻の舊法を改めたり、快慶一に安阿彌と稱す

（や）大和眞盛　河内大椽の弟子にして當時假面の名工と稱せらる、靈元帝の御代（西紀千六百七十年頃）の人なり

○柳川直政　正德ごろ（西紀千七百十餘年）の名工にして特に獅子を彫るに妙を得たり

（ま）增田宗次　天智帝の御宇（西紀六百六十餘年）の人にて甲冑製作の名工なり、本邦八甲のうち獅子尊靈の甲は宗次の作に係るといふ、世この人を以て增田家の祖とす、其後醍醐帝の時（西紀九百年頃）增田宗國あり、白星靈甲並に卯花威の鎧を造り、村上帝の時（西紀九百五十餘年）增田宗季あり蘇迷盧山甲を造り、また源滿仲の爲に薄金無楯鎧二領を造り共に當時の名工と稱せらる

（け）稻文勳　元明帝ごろ（西紀七百十餘年）の佛工にして其子稻文會と共に長谷寺法隆寺等の十一面觀音を造れり、世その巧妙に驚き此父子を以て天照大神及び春日大明神の化身なりといふに至る

（こ）後藤祐乘　金工後藤家の祖にして始め巧業を稻荷大明神に祈りて丹誠をこらしゝかば瑞夢を蒙り、遂に天下無双の名手となりしといふ、果して稻荷の靈驗なりや知る可らずと雖も其精神の到るところ斯の如し名聲を天下に揚げ高譽を子孫に傳へしと故なきに非ず永正九年（西紀千五百十二年）五月歿す其子孫に多く名工を出し歷世家聲を墜さず